
いつもどこかズレタセカイ ~人喰い

祿 左右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつもどこかズレタセカイ ～人喰い

【Nコード】

N22990

【作者名】

裱 左右

【あらすじ】

とある街で起きている連続猟奇殺人事件。その事件に共通していることはその被害者の全員が女性でその臓器が持ち去られていることだった。そんな内容のニュースを真剣な目で見る妹、美弦。いつも俺はその様子をうんざりした目で見ていた。それが日常の光景。二人の間にある微妙な距離感、交わされるのは空々しい会話、誰にも理解できないどこかズレタ関係。そして、日常から少しづつずレテいくセカイ。

かなり前に書いた作品でもありますが、見づらさや表現が気になりましたので、現在すこしづつ改訂中です、なおストーリーに変更はありません。

プロローグ（前書き）

このプロローグは読まなくても話は通じます、プロローグってそういうものですけど。なお、話が進むと残酷な描写があるので注意ください。

え、ハッピーエンド？人が死ぬ物語に何を求めてるんですか？

プロローグ

プロローグ

ある大学の研究室で。

汚れ一つない白衣を着た学生が、じっとケースを見つめている。

何もせずに、そう瞬きすら。微動だにせず。

そう例えるなら、まれに美術館などにいる、立て掛けられた絵に魅入っている人物。……丁度そのような印象だろう、その絵の世界に自分を投影し、その中で、その世界で生きている自分を想像する。あるいは 体感する。

蝉の鳴き声だけが響く。

それ以外の物音は一切存在しない。

何一つ余計な物音はなく、その学生は静寂の中ケースを見つめ続ける。

突然、背後にある扉が開いた。

その学生の肩が一瞬震える。

同時に聞こえるその静けさを乱すことない声。

音であるのに、静寂を表する矛盾したトーンを含んだ声。

それは異質なことであるはずなのに、とても、心地の良いものだった。

「待たせたね。少々、会議が延びてしまっただね」

その声と共に入ってきたのは、いまいち年齢を掴みにくい風貌の男だ。

掛けられた眼鏡のそのレンズの奥には、玩具と戯れる子供のよう

な無邪気さがある。それと共存するかのようにある、深い闇を推し測ろうとする老獪な警戒心を備えた知性と好奇心の輝き。

そんな彼は、学生と同じように白衣を羽織っていた。

20代にしては落ち着いており貫禄があるように思うが、そう言われればそうだと納得してしまうかもしれない。ようするに学生の一人だと。しかし、少々若作りの40代である、と言われてもなぜか違和感を持ってない。そんな雰囲気の人だった。

その眼から受ける印象を差し引き、その顔だけを見るのなら、その表情そのものは無表情にも見えるが、逆に多くの感情……憂いや恨み、喜びや哀愁、を称えているかのようにも見える。

そう、あえて言うなら能楽で使われる能面のようだ。

無表情な中にどこか影があるように、裏に秘めたものがあるように見えてしまうのは、それが事実であるからなのか、彼の演技であるのか。あるいは、見ている人間が勝手に心情を反映させているのか。

年齢が分かりにくいのもそのせいだろう。

彼には人間にあるべき皺が不自然なまでにないのだから。

「何か面白いものでもあるのかな、そんなにびくびくして。もし、悪巧みをしているのであれば私にも参加させてもらえないかな」

彼は静かによく響く声で学生に尋ねる。

その声は、なぜかはわからないが聞いているものを不安にさせる声だった。

それは聞いている者にこう思わせる、今から想像だにできないおぞましいことが起こるのではないか、と根拠なく。

学生は戸惑いながらも、男の言葉を見殺して尋ねる。

その不安を振り切るように、感情を波立たせるように。

「このケースのものは何ですか、こんなものは見たことがない。これは、まるで……」

学生はそこで口をつぐむ。

これ以上は口にしてはいけないことのように感じたからだ。

それを聞いて男は口の端を少し歪ませる。ただし、左端だけだ。

その表情が、真実彼が笑っていることを意味しているのかどうかは学生にはわからない。

「君は生物農薬を知っているかな」

彼の静かな声に学生は一瞬考えてから頷く。

それが、学生の未来を決定付ける意味をもつかのように学生は慎重だった。

彼はそれを確認して言葉を続ける。

「普通の農薬を、つまり化学農薬を大量に散布しては植物がダメージを受ける。

しかし、害虫が大量に増えれば一定の収穫を守るために農薬を撒かなければならない。植物を守るために植物を傷つけるなど本末転倒な話ではある。

そこで環境にダメージを与えずに、考案されたのが、害虫を食らう天敵の虫を散布することにより害虫を減らす生物農薬だ」

彼は話しながら近くにある本棚から何かを探し始める。

学生は最初は彼に目を向けていたが、その言葉が耳に届くたびに、次第に視線をずらし、最終的にケースに視線を移した。

そして再び、それに魅入る。

否、魅入られる。

「これはね、それなのだよ。いや、本当はそのつもりで造った。

環境に被害を出さずに害虫を始末する。人から頼まれて作った実験作だ。その点に関して言えばこれはとても有能だよ、環境にダメージを与えないと言う一点において、とても無駄がない。なにせ、その環境作る構成要因とすら……ああ、知ってるんだったね。

そう、増える時期までの期間がかかるのは何だが、生命力も強いし、それでいて害虫がいなくなれば自動的に減っていく。ある意味理想的と言っても良い」

学生はその話をほとんど聞かず、ケースの中身、それに魅入られていた。

そのケースの存在は学生にとっても、理想に近いものだったのだ。いや、しかし決定的に足りないものがある。

「だが、それは失敗作でね」

学生はその一言に反応した。

「なぜですか。これの性質は無断で失礼かとは思いましたが、さきほど詳しいデータを拝見させていただきました。これに、不完全な要素などありませんでした」

その一言に彼は首を横に振る。

「ああ、だろうね。しかし、ならばわかるだろう、これは生物農薬として使うには失敗作なのだ。これを制御する為に時限爆弾としての役割を果す細胞を組み込もうとしたんだが、いやはや上手くは行かないものだ。必ず、一部のものは能動的に生き残ってしまう。」

受動的に、結果的に、ではなく、だよ。そう、まるで意志を持ったウィルスのような……環境を変化させかねないほどに」

彼は静かなままに話す。

静寂なままに。

そして、学生は思い出す、以前彼がこう言っていたことを。

『力』とは周囲の環境を変える『方向性』だと。

そして、『力』とは結局のところ、なんらかの意思から発生するのだと。

つまり、この目の前の物体が環境を変えかねないほどの意志を持っていることに他ならないのだ。そのことに学生は気付く。

……そんなことはありえない。

これは、あくまで機械的な何か、に過ぎない。本能と言うプログラムに支配された動物きかい以上ではない。

だが、それを一笑出来ぬほどに、その存在感を学生はそれに認めていた。

「それでも、……これは完璧ですよ」

「完璧？ それは君にとつてだろう。君の不完全さを埋めるのにちょうど良く欠けていると言っただけの話だ、パズルはどちらも欠けているから噛み合うのだよ？」

「……………」
「そしてもし、真にそれが完璧ならば、その完璧さ故に不完全なのだ」

男は一息おき、さらに『力』を込めて……即ち意思込めて男は言った。

「コイツが狩る害虫はね、狩り尽くしてもらっては困るのだよ」

制御できないものなど、不要だ。そう男は続けて語る。

学生は俯いていた。

彼は学生の近く本を置いた。

「これが君の借りたがっていた資料だ、来週には戻しておいてくれたまえ。では、私は他の研究があるのでこれで失礼するよ」

彼は出て行こうと扉に手をかける。

「待ってください」

突然学生に声をかけられた彼は首をかしげて、学生へわずかに身体をひねる。

「何かね」

彼は学生に問う。

学生は俯いたままだ。しかし、その声には先程にはない『力』強さがあつた。

××という名の強き『意志』が。

「この生き物はこれからどうなるのですか」

男は口の端を歪める。

その目に感情は無い。

ただ見ている者に、幼い無邪気さと深い老獪さを感じさせる光があるだけだ。

そうなのだ、感情はない。

「捨てておいて貰えるかな」

感情の無い機械めいた声。しかし、その声はよく響いた。

学生は俯いたまま頷いた。

扉の閉まる音。

部屋は再び、学生一人となる。

学生は少しづつ静かに顔を上げる。

その目にはケースが映る。

学生はただ、じつと何もせずに見つめた。

蝉の鳴き声は無い。

いつの間に鳴き止んだのか。

とても、静かな時間が流れていく。

唐突に学生は、なぜ自分がそのケースの存在に魅入られているのか理解した。

そのケースの存在は、自分にとってまだ理想の完璧な存在では無い。しかし、これから理想の完璧な存在になれるものなのだ。

だが、それにはやはり足りないものがあった。

そう、その足りないものとは……。

学生は立ち上がる。

ゆっくりと周囲を見渡す。

すぐに近くにあった『そのために用意されていたかのような』金槌を気付き、その金槌に向かって右手を伸ばし掴んだ。

学生はケースに視線を向けそれを数秒見つめた、ケースには学生の顔が映っている。

無表情な顔の中で狂喜に輝く瞳。

突然、学生は右手を振り上げる。

そして……。

世の中っていうのは辻褄が合わないものだ。

理屈にも合わないし、理想にも合わないし、答えも合わないし、割にも合わない。

いびつすぎて型が合うものなど存在しない。

それが俺達の現実。

結局の所。俺達人間が世の中に合わせなければならない。そうしなければ、簡単に何処か遠くに弾き飛ばされてしまう。世の中は、人間が一応造ったものにも関わらず、その人間を排除する。

そのことを俺が実感したのは比較的最近のことだ。

明確にいつ実感した、と言うのは無い。

実感って言うのは、俺の知る限り唐突に湧き出てくるものではなくて、徐々に侵食していき完全に染まったときに気がついたらしているものだ。

だから、生まれたときからの経験から徐々に徐々にその実感に侵食されてきてたんだろう。

その実感は俺に教えてくれた。

世の中に合わせるために、人は表面上、普通の人間の顔を被って生きているんだということ。

……さて、あんまり好きじゃないけどこうい言葉がある。

人に好かれるための唯一の方法は、畜生のなかで最も愚かなものの皮をかぶることである。

逆に言えば、愚かなものの皮を被らなければ、人に好かれないうて言うことだ。

これを言い残した奴はなんて口が悪い奴なんだろう、多分かなり

の……。

まあ、それはいい。

俺が言いたいのは、普通の人間こそが、最も愚かな畜生であるということだ。

その普通の人間の皮を被っている奴らの中には、自分が他の人間と同じように普通の人間と言う皮を被っていることに耐え切れず、奇抜を装い、他の人とは違うと思いたがる人も居る、と。

そうやって別の自分の皮を被るわけだけだが、結局の所どんな皮を被ろうが正体が変わるわけじゃない。

普通の人ほどその事実を見ないようにして、他の人とは違う姿になりたがるのだ。

普通の人ほど理想の自分を作りたがる、多くの皮を被りたがる、本当の自分は別にあるんじゃないかと思いたがる。

だが、忘れてはならない。長年かぶり続けられたその皮は、確実にその皮膚の下にあるむき出しの欠陥と筋肉に癒着し、根を下ろしていることを。そしてそれはすでに身体の一部であることを。

普通の人間の皮を被った人間の中身はなにか、それは普通の人間なのだ。

同時に知るべきだ。他の人と同じように、普通の人間の皮を被った特別な人間もいることを、彼らには本当の自分なんて必要ない。彼らに中身などない。

この場合の特別とは異常なことだ。「狂ってる」と言ってもいいそして、「狂ってる」というのは、世の中が人間に合わせないために、何処か遠くに弾き飛ばされてしまった存在のことを、弾き飛ばされないようにしてる連中が指して言う言葉だ。

普通の人間が自分にはなれない、その存在を指して言う言葉だ。

その言葉に秘められた感情は、困惑でもあるし、嫌悪でもあるし、恐怖でもある。そして密かな羨望でもある。

実は世の中は、そんな人の皮を被ったモノたちが交錯しあい、すれ違い、通り過ぎたりしている。みんな見えてるのに気付こうとしない、仮に気付いたとしても無意識に見なかったことにする。

俺達の身に起きたことは、簡単に言えばつまりはそういうことだ。はっきり言って、いや、はっきり言わなくてもたいしたことじゃない。

もしかして、難しくて分かりにくい？

いいんだよ、わからなくても。

どんなことでも、わかつうがわかるまいがそのまま生きくしかないんだし。

でも、まあ一応言っておこう。

俺が、いや僕がわかっていて欲しいことは一つだけだ。

世の中ってというのは辻褃が合わないものなんだよ。

プロローグ（後書き）

感想、意見などございましたら、どうぞお願いします。

いつもどおりの朝（前書き）

実際のところ、主人公、八賀谷コウは嫌な奴だと思っています。かなり。そして、変な奴だと思っています。すごく。

いつもどおりの朝

第一話 『非日常』は『日常的』から

目覚まし時計が鳴ったような気がして、反射的に手を伸ばしアラームのスイッチを止める。そのまま顔を伏せて俺はうずくまった。頭痛する。

起き上がりたくない。

出来ることならこのまま化石になってしまいたい。それで1万年後くらいに未来人だか宇宙人だかに発見されて「おお、これが当時地球を支配していたホモサピエンスの化石なのか！」などと騒がれて、宇宙国際博物館とかでそれはそれは厳重な警備を受けつつ展示をされて……それはいやだな。

無駄なことを考えたせいで、頭の重量と鈍痛が増した気がする。気力を振り絞り、顔だけを上げ時計を見てみれば、6時半の少し前。

アラームは6時半丁度に鳴るようにしてあるので、まだ鳴るはずはない。

……またか。

鳴ってもいないはずのアラームを止めるのはこれが最初ではなかった。

寝なおそうかとも思ったが、眠れるほどは眠くはないし、早くに家を出なければいけない諸事情があるのでそうもいかない。

と言うか、数分寝た程度で収まる眠気ならそもそも寝なくていい。

俺はベッドから手を伸ばし、床に綺麗にたたんで置いてある制服を掴もうとする。が、そのままベッドから転げ落ちた。

床に倒れこんだ俺は、「このまま、ミイラか化石になって宇宙に思いをはせるのもいいかもしれない」という誘惑に駆られたが、やはり博物館で見世物にはなりたくないものでそれを振り切る。

しかし、起き上がりたくない。

意外に床の冷たさがだるい朝には心地いいものだ。

そう言えば、こんな無粋な言葉があったな。「朝寝が一番高い時間の出費である」と。

でも、考えて欲しい。朝寝なんて貧乏学生に出来る最大の贅沢じゃないですか。

やっぱり、起き上がりたくない。

そこで仕方なく寝たままで制服に着替えることにする。

脱いだパジャマを意識もせずたたんで、それをベッドの上に置き、ワイシャツ、ズボン、ベルト、と目をつぶった状態で順序よく着ていく。

ネクタイも寝たままで結び、ふと気が付けば残念なことに、あとは部屋から出るだけになっていた。

あくまで俺は起き上がりたくないの、時間稼ぎに化石と化した俺を発見するであろう宇宙人（決定）の誕生の歴史を脳内で追う。

光よりも早い超高速（物理的に無理）で永い時が経ち、とある宇宙にとても高度な文明の誕生を俺は予測した。そのとても遠い宇宙にある種族の共同体で大きな事件が起きた。

種族の元首が他の種族の元首の奥さんと浮気をしたことで民族紛争が勃発し、それを切っ掛けとした複数の種族を巻き込んだ宇宙大戦争となった。それは『第一次宇宙・わき・宙戦争』と後世に呼ばれた。

その宇宙戦争は激化に激化を重ね、ついには東の宇宙人。ゾダーク（仮名、70歳巳年：恋人募集中）が最終兵器『虚無』を開発。

軍部の過激派がそれを持ち出し、ついにはそれ使用する。結局は俺を発見できずに無残にも、宇宙人たちが絶滅した頃には、自分がいつの間にか立ち上がっていたことに気付いた。

人類って偉大だ。

って言うか駄目じゃん。俺、発見されてないじゃん。

ドアを開け、階段を降りていく。

どうも頭がはつきりとしらない、最近はいつもこうだ。

別に寝不足というわけではないはずだが。

階段を降りてすぐのリビングから人の声が聞こえる、ドアがいつも開きっぱなしだからなおさらだ。

俺はリビングにはまだ入らずに、そのまま洗面所へ行って顔を洗う。

顔を洗って少し目が覚めた気はするが、鏡の中の自分はまだ眠そうだ。

それでも目が覚めたせいか自分の服の乱れに気付く、鏡も見ずに自室で結んだネクタイは少々不恰好だった。

服を直してすぐに歯を磨く。

そうしていると、リビングから聞こえる人の声がテレビから流れているニュースキャスタの声であることに気付いた。

「今度は20代前半の女性の遺体が公園で発見されました。被害者の遺体はまたもや複数の臓器が持ち去られており……」

くだらない、朝から趣味の悪いことだ。

俺がテレビが嫌いなこと（特にニュースやワイドショーなどの他人の不幸や、どうでもいい私生活を覗き見るもの）を知っているクセに。

ところでリビングというと、どうしてもゾンビを思い出してしまうのは何故なんだろうか。

なんというか、おかげで爽やかな朝が望めない。

何故なんだろうか、と言いつつそのことに関して誰かから同意を得られたことは一度もない。

リビングと言えばゾンビだろうか？

まあ、朝食をリビング以外で摂れば一挙解決なんだが、それをすると家族としての最低限度のふれあいを失くすことになる。と親たちが言っていた。

そんなの悪いテレビの見すぎだ、と俺は思う。

二人とも朝なんか減多に食事など摂らないくせに。

リビングに入ってみると、美弦が朝食を食べる動作を途中で停止させたままテレビに熱中している。まだ制服もちゃんと着ていない。……だらしななことだ。

もしその格好で、人前（特に余所の男の前）にできれば大問題になること請け合いだ。

ちら、とテーブルを見る。

今日の朝食は、食パンに野菜スープ、サラダ、ハムエッグ。そして牛乳。

まあ、いつもどおりだな。たまにはご飯も食べたいがまあいいだろう。

俺は席に右隣の座り、美弦の目の前にあったリモコンに手を伸ば

す。

美弦は僕の行動に気付きもしない。少し、ため息をつく。

「同一犯の犯行でしょうか、だとするとこれで3件目の事件となりま

リモコンでテレビの電源を消した。モニタが真っ黒に塗りつぶされる。

美弦は停止したままだったが、そのままの体制で目を大きく見開く。

そして、鈍いとしか言いよつのない動作でこちらに顔を向けた。そこまで来てようやく一言。

「……コウ？」

何を驚いてるんだか。

美弦はまだ何が起きたかわかっていない。

どうやら美弦は俺と違ってねぼけているだけでなく、思考が凍り付いているようだ。ああ、凍るのは思考じゃなくて脳みその方が？むしろ、腐りきっていると評するべきか？

ここまで来て美弦はようやく状況を理解したらしい。顔が真っ赤になっている。

「私が見てたのに何てことすんの、後から割って入ってきて。少しは常識ってモノをわきまえてよ！」

突然耳元で怒鳴る。

俺は耳を左手で押さえながらとりあえず言い返そうとする、が。

「割って入る、の用法が違うんじゃないのか。それは人間同士の会話ないしは関係に割り込んだときに使うのが常識だ。朝食ぐらいすぐに食べたらどうだ、ノロマ。だいたい人間のクセにフリーズしてんじゃない、見苦しいぞ」

そう心の中で呟くに留めておく。

そういえば、最近俺のパソコン調子が悪いんだよな。誰かに見てもらおうか。

「だいたい、言いたいことがあるんなら、消す前にまず口で言えば良いじゃない」

どうでもいいことを考えながら、食事に手を伸ばす。まずは野菜スープ。

「私の楽しみを何でそう邪魔するの。私に何か恨みでもあるの?」

朝からヒステリックだな。

問題をすり替える真似はよして欲しい、恨みがあつての嫌がらせ? 朝の俺はそこまで暇じゃない、嫌がらせは恨みがなくても暇ならするけど。

まあ、仕方ないからそろそろ言っておくか。

「恨みなんてあるわけ無いだろ。早く食べないと遅れるぞ、お前の学校少し遠いんだから」

俺の言葉に美弦はムツとする。

「とりあえず服をちゃんと着なさい、風邪を引いたら困る」

美弦は少し膨れながらも服を直した。膨れるといっても、よく見ないと分からない程度だ。そんな風船みたいには膨れない。もし、そこまで膨れることが可能なら、その様子をスケッチに描きとめ、かつレポートにまとめてみたい。って言うか、触りたい。心ゆくまで

「お父さんじゃないんだからさ、そんな説教じみたこと言わないでよ」

「説教じみてるかな」

食事をしながら俺は言葉を返す。

このスープ、塩味効きすぎだ。欲を言えば薄味のほうが俺は好みだ。特に朝に関しては。

次第に膨れるのにも飽きたのか、美弦はぼやき始める。

「結構説教じみてるよ。いつも、思うんだけどそんなに子ども扱いしないで欲しいんだけどな。1歳しか違わないんだし、正直な話いきなり兄貴面されても困るのよね」

俺の経験から言うと、こつやっつてばやいた時に人間は放っておかれると傷つくものだ。

食事をやめて俺は美弦を真っ直ぐ見つめる。

そのまま一息おいて、と。

「子ども扱いはしてないよ。美弦と俺との関係で兄貴面をする気も無いし、説教をする気もない。ただ、心配で口出ししただけ。迷惑ならやめるよ」

少し声のトーンを落としてつつ俺は言う。

これは持論だけれど、人間の誠意とは態度と行動だと思っている。決してお金ではなく、あくまで態度と行動だ。

……決して自分に金が無いからそんなことを言うわけじゃない。
あと、誠意に精神面を含めていないことには突っ込みを入れないで
欲しい。

まあ、そうするとおそらく俺の誠意が伝わったのだろう。美弦は
文句を言わなかった。

しかし、代わりになぜか美弦は少し目をそらした。

「うん、わかった。ごめんね、私が言いすぎた」

そんな殊勝な態度にいきなりなされると、なんとか残っている良
心的な部分が痛む。

俺も視線を美弦から外し、下に落とした。

「いや、俺の言い方も悪かった。それに、口で言ってからテレビを
消すべきだった」

口で言ったからって美弦が素直にテレビを消すとも思えないけど、
それはそれだ。

二人とも黙って食事を始める。

実際、こういうやり取りはいつものことだから、二人とも言い合
いに慣れているところがある。

それに、なんとというかわざと言い合いをしているというか、少し
極端に言えば演技を強いてる部分が互いにある。自分たちの繋がりを
保つために。

こつやってやりとりしている時が一番家族らしいというか、仲が
良い気がしてそうせずにはいられないのかもしれない。

手探りの作り物めいた家庭の雰囲気、こついうのも幸せというの

だろうか。

二人で居る時の静かさを嫌って俺は声をかける、本当は静かに一緒に居られたら理想なんだけど。

沈黙のままでする許される関係にあこがれるのは歪んでいるのだろうか？

「このところ、毎日同じニュースが流れているね」

美弦は少し考えながら、頷く。

「うん、まあ、そうかも。この町で起きた連続猟奇殺人って地元メディアが大騒ぎしてるから」

地元メディアとは、あまり女子中学生の使わなそうな言葉だな。

「なんて言っただって1人目は女子高校生。2人目は今年入社したばかりのOL。3人目は20代前半の女性、と若い女性ばかり狙った事件だからさ。私も自然と目が行っちゃうんだよね」

そう彼女は言うが、美弦の趣味はそういった殺人事件などの悪趣味な事件を調べることなので、仮に被害者が老人だろうが中年だろうなんだろうが興味は持つと思う。

いや、彼女が興味を持っているのは事件ではなく、人の死……か。どちらにしても悪趣味だ。生きていようが死んでいようが、人間に関する情報を集めるのはだいたい悪趣味だ。

まあ、となると、世の中の大半の人間は悪趣味だな。

「それにしても、すごい話だね。内臓が半分以上も持っていけたんだって？」

俺はそう言いながら、食パンにイチゴジャムを塗る。
美弦は顔をしかめた。

「やめてよ、食事中だからわざわざそういうこと言うの避けたのに。
なんか気持ち悪くなるでしょ」

お前がそんなことで気分を悪くするか。実際に見たわけでもある
まいし。

恐らく、「普通の女の子ならそういう感覚なんだ」と言う思い込
みがあつて、それが彼女にそうさせてるのだと思う。

でも、なんで汚物でもないのに人はそうだったもので食欲を失く
すのだろう。

もしかしたら、潜在的に人は人の中身を汚い物だと認識している
のかもしれない。

そう言われたら、確かに人間の中身ほど汚いものは無いとも思う。
俺からすれば、人間以外の他の動物の中身でもほぼ同じだ。なるほ
ど、そう考えれば生物はみな、汚物だろう。

一番、遠ざけるべき感染源。健康を害する不衛生、病原菌の塊だ。

（人間であろうがなかろうが死体には変わりないしな、触って血が
ついたら手は洗うだろうし。俺はつかなくても洗うかな）

とりあえず、俺が犯人だったらそんな作業をするのは気が滅入る
な。って、美弦の言うとおり確かにある意味で気分が悪くなってき
たぞ。

と言うか、朝からこんなことを考えてる時点で気が滅入るような。

「新しい学校にはもう慣れたの？」

突然の美弦の声で俺は閉鎖的思考を止める。

誰にも解放しない、密閉された思考内容。

「どうだろうね。一応、友人は出来たし授業も大体一通りはやったけど。まだ、なんとも言えないかな」

俺は今年高校に進学した。地元では優れた進学校として有名な公立校で、入るにもそれなりの学力を必要とした。

実際問題、俺はそれほど学校の成績は低くなかった。

テストの点数は平均よりマシかそれ以下だったが、授業態度は良いためなかなか高い評価を受けていた。

それでも俺にはその高校に受かるのは難しいと言われていたのだが。

そんな中、実際に受験してみると自分でも絶対に落ちると思っていたのに、演技バリバリの面接や嘘を書いた作文で乗り切ってしまった。

俺はその時改めて、世の中外面が大事だと実感した。もしかしたら、試験官の目が腐ってたのかもしれない。

ずっとこの学校を狙って、真面目に勉強していたのに落ちた奴には悪いと思う。でも、勉強が出来ない分を別の方向でカバーするのは、当然なことだし誰もがすることだ。いや、当然としてしなければならぬことだ。

問題は今後の授業において行かずに済むか、ということだが。

まあ、それは置いて、親父たちの都合というか、夢というか、その辺の大人独特の勝手さで、突然この家に引っ越すことになった時は驚いた。

受験勉強真っ只中の当時の俺からすると、はなはだ迷惑ではあっ

だが、偶然でも家が高校に近かったのは今になって考えると都合が
いいと言える。

ただ、美弦の中学校は前の家からは近かったのに、この家からは
少し通学が大変になってしまった面もあるので一概に全部がよかつ
たとは言えない。

いや、そもそも全部がよくなる決断などこの世にないわけだが。
ふと時間が気になって俺は部屋の時計を見上げる。7時過ぎぐら
いか。

「もう時間じゃないか、美弦」

俺はまだ1時間は余裕があるが美弦はそろそろ行かないと遅れる。

「あつ、本当だ。急がないと」

美弦はそう言ってサラダを口に掻き込む。
あまり品が言いとは言えない。

「ご馳走様でした。行ってきます」

椅子の下に置いてあった鞆を持って立ち上がる美弦。そのままリ
ビングを出て行く。

俺は鞆とフキンを持って立ち上がる。

「待てよ」

美弦は振り向いた。

「口汚れてる」

俺は美弦の口をフキンで拭いた。まだ一度も使っていないから汚くは無い。

少し戸惑って美弦は口を開く。

「やっぱり子ども扱いしてるじゃない」

美弦はまた少し膨れた。そして、俺の持っている鞆を見る。

「なんでもう鞆持ってるの。こんなに朝早かったけ？」

俺は首を振る。

「いや、駅まで送っていきこうと思って。そのまま学校行けば丁度いいぐらいだろ」

本当はまだそれでも早いぐらいだけど、そんなことは言わない。
俺から完全に顔をそらす美弦。

「またなの？」

「嫌なのか？」

「……前から思ってたけど正反対でしょ、方向」

「かもな、でもそんなの関係ない」

「なら、顔ぐらい洗ってきたら。まだ眠そうよ、コウの顔」

美弦は怒ったような声を出して言った、わざとだ。
頷きもせず、素直に俺は洗面所に走って行く。
これが俺にとってのいつもどおりの朝になる訳だ。

いつもどおりの朝（後書き）

基本的に主人公の戯言^{たわごと}で物語は進みます。視点^{たぶん}がほかの人と変わることがありますが、主人公はほかの人物の視点と比べて、読むのが面倒です。

なぜ嘘なのか（前書き）

主人公の女性の好みは結構あれです。その上、女性関係が結構あれな気がします。

なぜ嘘なのか

街中を歩けば自転車通学の学生やらサラリーマンやらなにやらで、どこを見ても嫌になるくらい人が道でうごめいている。

少しぐらい減れば良いのに、思い切って整理したらいいと思う。

誰かが。

駅に向かっていいる中で、美弦が口を開いた。

「最近、少し早起きなのはどうして？その気になればまだ一時間は寝れるじゃない」

美弦がこちらを見つめてくる。

俺は美弦を見ずに平然と返した。

「美弦と朝ごはん食べたいから」

これは嘘だ。

美弦の表情が固まる。

「本当に？」

少し声が弾んでいるようだ。

美弦に、気持ち悪いとか何言ってるのとか、頭おかしいんじゃないとか、控えめにもそれくらい言いわれるかと思ったんだが。

実は冗談のつもりだったのに、これで今から嘘といたらどうなるかな。

そう思いつつも俺の口から出るのは別の言葉だ。

「うん、この時間に起きれば駅まで送れるしね」

最近、無駄に嘘を重ねている気がする。いや、完全に嘘つてわけでも無いんだが。

ちなみに、嘘をついていて良心が痛んだことはない。相手が喜んでくれるからだ。

むしろ、本当のことを言って相手が悲しんだ時のほうが、俺は痛む。

嘘とは優しさだと言っていた人がどこかにいた気がする。誰だったかな。

「そっか」

そのまま、美弦は黙り込む。

こういう時間も悪くないのかもしれない。
そのまま、駅の前まで来た。

「もういいよ。ありがとう」

美弦ははにかんで言った。

「いや、俺が好きでしてるんだから」

むしろ、そのまま駅の中まで行きたいぐらいなんです。
などと言ったら怪しまれるよな。かなり。

「それじゃあね、行って来ます」

軽く手を振りながら、歩いていく美弦。なんとなく名残惜しそうな様子だった。

俺はその場に留まり、手を振り返す。
次第に美弦の姿は見えなくなっていく。

「さて」

俺はそう呟いて、駅の中を經由してやや急いで駐車場へ足を運ぶ。
あのままついていたら急がなくて済んだんだが、そうもいかない。

そして、駐車場で待つこと2、3分。
もう、そろそろかな。

俺は後ろから肩を叩かれたような気がして、反射的に振り向く。
そこには俺に肩を叩こうとして、その手前で手を止めた女性がいる。

もちろん、手が俺に触れたと言う事実はない。正確にはなかった。

肩より少し長めのストレートの黒髪。その夜の闇を絹にしたかのような黒髪によく映えるルビー色の紅いピアス。そして、その紅の映える陶器のような白い肌。

俺はひそかに彼女を一つの芸術だとそう認識していた。

その女性の名前は神城 由枝。

彼女は俺の学校の数学担当教師だ。

彼女は嬉しそうに笑う。その知的な涼しげな瞳を持つ彼女がそんな幼い表情を見せるたびに、俺はなんとも言えない気持ちになる。

「相変わらず良い反応してるね。足音どころか息も消してたのに」

そこまでするか、肩を叩くぐらいで。

「確かに気配は判らないですよ」

ただ、それだけじゃ駄目だ。

先生は静かな目で俺を見る。そして笑った。

「なんだか自慢されてるみたいね」

「自慢してるんですよ。一応、俺の勝ちですよね」

「勝ち負けがあつたとは初耳ね」

それは俺も初めて聞きました。っていつか今作りました。

「今日も美術室で時間を潰すの？」

優しい声で先生は俺に尋ねる。それは俺に言わせれば油断を許さない声だ。

なぜなら優しさは嘘だから、だ。

「ええ、まあそうなるでしょうね」

俺は肩をすくめる。

由枝先生は納得したのか、してないのか。とりあえず頷いた。

「車、乗ってく？」

少し首をかしげる。黒い髪が揺れる。

俺は先生の首のかしげた角度分だけ、見惚れてしまった。

駄目だね、俺はまだまだ甘い。

油断しない、なんて間抜けなことを考えるレベルにすらない。

「はい。また、お願いします」

俺はそう返事して、歩き出す。

それこそが俺の目的だ。大して学校まで遠くはないけど。

先生も俺の様子を見て歩き出した。

すぐ近くに先生の車はあった。

既にエンジンは掛かっている。

よくわからないが、赤い車。友人によれば高い車らしい。

フェラーリだったかベンツだったかは忘れた。どちらでもないかもしれない。

男は誰しも車やバイクに興味を持つ、そう友人は言っていたがどうも納得できないし、この通り俺はまったくそんなものに興味はなかった。

確かにこの車が高そうなのはわかる。だが、どこがいいのかまったくわからない。車やバイクにまったく興味を持ってない俺は男子というものからはずれているんだろうか？

先生は鍵のスイッチを押す。自然と開く鍵。

意図的に人工的な力で鍵を開けたわけだから、自然に開くという言い方は正しくないのかもしれない。かといって自動的もおかしいと思う。

ふん、こんなところに拘るから、わけわかんない、と一蹴された拳句美弦を怒らせるんだ。

先生は車に乗り込んだ。

俺もそれに続いて、助手席に乗り込む。

「毎回、生徒を乗せて何か言われませんか」

俺は尋ねた。

先生は肩をすくめる、その動作は先程の俺を真似たものだ。

「さあね」

言いながらシートベルトを締める。

俺もそれに習った。こうやって言葉を濁すのは大人の女性だからだろうか。

とりあえず、俺はこういうやり取りも悪くないな。とそう思った。そもそも俺は曖昧さは嫌いではない。

車が走り始めた。

俺は一息つく。

この時間はとりあえず何も考えずにすむ。それは貴重な時間だ。朝からようやく落ち着いたらかな。

はたから見れば、常に変わりないんだろうけど。

「疲れてるね。なんだか」

相変わらず優しい声。人に、特に女性にそういう声をかけられるのは慣れていない。

「そういう訳でもないですよ。それに、もし疲れてるなんて言ったら、大人に子どもものクセにそんなこと言うなって言われちゃいますし」

おどけて俺は言った、あまり面白くもない本音だ。だから俺は大人の前で疲れたとは言わない。

車が駐車場から出た。

それと同時に先生は笑う。

「普通、子どものほうが大人よりも疲れることは多いの。何も言えないし出来ないから。大人が疲れているのは日々の生活や仕事などではなくて人生そのもの、飽きてるだけよ。そんなの疲れているうちになど入らない」

これは冗談のつもりなのだろうか。

「何かが『出来る』とか『言える』『境遇より、何も『出来ない』』とか『言えない』境遇の方が疲れますか」

俺は外を見ながら先生に返す。みんな駅に向かっていている気がする。勿論、駅から出て行く人もいるけれど。

「何か出来たり、言えているとあまり自分が疲れていると気付かないものよ。気付くのはするのをやめてからか、出来なくなってから」

理屈はわかる。そういうものかもしれない。

真剣になっていると、休憩時間になってから肩がこるものだ。

この例えは厳密に言えば違う話だが、まるきり外れた話でもないだろう。

疲れは蓄積されていく。当人からすれば、いきなりのしかかってくるものだ。

まるで、自覚するその前までそんなものは存在しなかったように。

だが、先生の言うことがもし、真なら。

疲れている人間は、みんな無力な人間と言うことにならないだろうか。疲れるような人間は大人に値しない、子供だと。

「八賀谷君、あなたは疲れてる」

先生はそう俺に告げた。それは否定できない。
そのまま、間が空く。
互いに無言のままです。

由枝先生はこちらを見ることはない。前を見ているだけだ。
紅いピアスが髪の間から見える。先生の横顔は最近はいつも見て
いるけれど。

俺は、車が信号待ちになってからようやく口を開く。

「俺のことはコウでいいですよ、先生。確かに俺は疲れているの
かもしれない。でも、休んでも居られないんです」

きっと俺が休むには全て人間関係を遮断して、その上で記憶も消
して自分も失くさないとだめだ。まあ、そんなことは不可能だけど。
いつそのこと、階段から落ちて頭でも打ったらどうだろう。どう
にかなるかもしれない。

「休まなくて良いでしょう。人は傷ついたら癒さなければならな
いとか、疲れたら休むとかみんな思っているみたいだね。普通、
傷ついて疲れたまま生きていくものでしょう。せいぜい、生きるペ
ースを落とすぐらいしか出来ない」

先生の静かで優しい、それでいて人を人を思わない平等な声。
俺はその声にとりあえず頷く。

先生の声はなんだか聞いていると眠くなる。リラックスしすぎて。
もう何も考えたくない、な。
呟くように俺は言う。

「疲れてると言われると、何だか本当に疲れてきますね」

先生は何も言葉を返さない。

エンジン音だけが響く車内。

学校までの短い時間。ずっと俺たちは沈黙を保ったままだった。

それは本当に心地の良い沈黙の時間だった。

学校に着く前に、学校の目の前にある人気のない公園で車が止まる。

寝てしまいそうだった俺を見て先生が笑う。いや、意識はあったがほとんど寝ていたのかもしれない。

先生は俺の前髪を撫でて起こす。

「今日も、1日頑張ってたね」

先生の髪が揺れる。

「ええ、もちろんですよ」

そう言って、俺は自分のシートベルトをはずした。

この人の頑張ってたね、は他人事だよな。まあ、他人事なんだけどさ。

僅かに不愉快な気持ちがある内にあることに気付く。もしかして、俺は先生に他人事で居て欲しくないのだろうか。

鞆を背負って車を出ようとした俺は、突然動きを止めて先生に向き直った。

そういえば忘れていたな。

「おはようございます。由枝先生」

先生は一瞬黙り込んで、苦笑した。だが、その笑顔はすぐにいつもどおりの笑顔に変わる。

「おはよう、コウ君」

この人の苦笑は綺麗だ、透明な感じがする。
俺は先生に笑い返してから車を出た。
車はすぐに走り去る。

明日も朝から会えないかな。
はっと気が付いて俺は首を振った。
馬鹿か、俺は。会えないかな、じゃない。会いに行くんだろう？

自分で自分への反論をしている事実と、内容がどうにもピンクなことには目を瞑りつつ、
自分のくだらない思考を一蹴して、学校に向かって歩き出す。

公園の景色を見渡しながら歩く。

この時間もそんなに嫌いじゃない、森林を見ながらの朝の空気が美味しいと思うのは、錯覚だと俺は思う。だが、錯覚することは悪いことじゃない。

にしても、すっかり緑だな、この辺も。ついこの間まで桜だったのに。

ふと、誰も居ないサッカー場が目に入った。

この公園はとても大きく、サッカーグラウンドやテニスコートなどがある。

確か、少年団とか地元の児童団体（って言うんだろうか）が使用していた気がする。

そんなものより、近場に図書館とか映画館とか作って欲しいものだ。そういつた設備は駅からは近いのだが、学校からだと言をばさんで反対方向になる。俺の家からだと言、学校も映画館も同じ程度に遠い微妙な位置だ。

俺は苦笑する。

また無駄な思考をしてしまった。思考は有限の資源だ、有効に使わなければならない。

って、無駄な思考をしてしまったと思ひ返すこと自体が無駄な思考か？

俺は頭を掻きながら学校に向う。

すぐに校門が見えてきた。

校門に刻まれている見附無高等学校の文字を横目で見ながら、学校の敷地に入っていく。

あと、30分もすれば生活指導の先生たちがここで並んでるはずだ。

玄関に入った俺はすぐに上靴に履き変えて美術室に向かう。

本来ならば、この時間に美術室の鍵が開いているはずはないのだが、顧問に事前に断って由枝先生が開けてくれていた。

美術室は3階にあり、階段を登るのも面倒ではあったが、美術室で絵を描くことは俺にとって一番楽な時間の潰し方だ。

授業まで一時間近く、ずっと美術室で暇つぶしだ。少々、退屈ではある。

でも思ひ返せば、退屈でない時間のほうが一日の占める割合は少ない。

ふむ、だからこそ楽しい時間が輝くと思えば我慢できなくもない。

階段を走りながら登っていく、すっかり目は覚めていた。

なぜ嘘なのか（後書き）

主人公の高校は見附無高等学校、略して見附高です。なかなかの進学校としてそれなりに有名ではあるのですが、少々奇人変人がいるのが問題です。

↳ 藤咲マミの視点 1 (前書き)

ここでもう一人の主人公の視点が入ります。

今日、私はとても意外な人と関わることになった。

……その人の名前は、八賀谷コウ。

高校に入って、あまり彼とは関わりがなかったわけだけど、とても意外なきっかけで私は彼と話せたのだった。

この日も私は、他の生徒より早めに学校に登校することにした。

学校前の公園を足早に通り過ぎようとする。

というより、登校中はいつも足早だ。自分の姿を誰にも見られたくないと言う意識が働いているのかもしれない。

この辺は車の通りも少なく、登下校の生徒と近所の人以外はほとんど人通りが無い。

多少、登校時間をずらすだけでもほとんど人と合わずに済む。そうやって人目を避けながら校門を通る。

今の時間帯ならせいぜい部活で朝練のある人たちがいるぐらいだから、あまり避ける必要もないけれど、理屈では分かっているのになんとなく警戒してしまう。

……私って駄目だな、本当にどうしようもない。

そう思いながら玄関で上靴に履き替える。

私の向かう先は、自分のクラスの教室……ではない。向かう先は保健室だ。

最近、私は教室に行っていない。こういう場合は、なんていうんだろう。学校には来ているのだから登校拒否ではないと思う。

高校に入学してから最初の頃は、少なくとも表面上は普通に教室へ行っていた。今だってクラスメイトと仲良く出来ない訳じゃない。でも、嫌なのだ。

理由は自分でも分からない。

クラスメイトが嫌いだと言っわけじゃない。もちろん全員が全員好きってわけにも行かないし、苦手な人だって沢山居るけど、決してそんなことが理由じゃない。

クラスに馴染めなかった訳でもないのだ。特に、クラスが出来てすぐの頃は「みんな仲良くしよう」って雰囲気があったし。

いや、それが逆に苦痛だったのかもしれない。

……そうやって、仲良しを無理やり作るような空気、自分の意識を押し殺してまで、誰かと同じグループにいないといけないということが。

私は考えながらも保健室に向かって歩いていく。

学校に入ってから、なんだかこころなしか体が重くなった。

仲良しが苦痛、小さな頃からそうだった気がする。

いつもふと気が付いたら友達の前から外れてて、それを笑ってごまかした。

その度に急いで輪に戻った私を、みんなさっきまで遊んでいたかのように何も言わずに受け入れてくれた。私はそれは優しさなんだと思っていた。

いや、そう思ったかったんだ。

簡単な話だった。いつもみんなが受け入れてくれるのは、いてもいなくても同じだから。

もし、いなくて困るのなら私が輪から外れるはずなんて無かったんだ。外れて困るなら、みんな怒ったり心配する。輪から離れた瞬間に引き戻しに行く。

本当にその人が掛け替えのない存在なら、そうするはずだ。最初から私は輪の中の一員に数えられて無かったんだだろう。きつとそれは、優しさなんかじゃない。

仲間じゃない人と遊んであげる。自分にとって必要ない人に居場所を与える。

人はそれを、哀れみと言っんじゃないんだろうか。

でも、もしかしたら、みんなそうなのかもしれない。

掛け替えのない人なんて、誰独りいなくて。友達がいないのが嫌だから、とりあえず集まっているだけなのかもしれない。

誰もが誰もいなくても困らない。

誰でもいいから、そばにいて欲しい。

……だとしたらすぐ。

それは××だ、どうしようもないくらいに××だ。

私はため息をつきながら、階段の前を通り過ぎる。

若干の吐き気。重い身体をなんとか動かして歩いていく。

保健室は角を曲がればすぐのところだ、体が重くなれば荷物も重く感じる。たったこれだけの距離がいつも遠い。

でも、実際、必要な勉強道具全てが入っているから、本当に重いのかもしれない。みんなは勉強道具を先生に内緒で学校に置いて帰ってるけれど、私はそれに抵抗を感じる。

真面目だね、と言った誰かを思い出す。

違うよ、私は真面目なんじゃない。

ただ、単純に……。

……ようやく保健室の前についた。

その保健室の戸に手をかける、どうやら鍵が掛かっているようだ。職員室に行く？ でも、誰もいないかもしれないし。いや、そもそも誰にも会いたくない。変な先生に見つかって、話しかけられたらやだ。

このまま待つ？ それもいやだ。どうしよう、このままいてクラスメートには会いたくない。

ふと、玄関の方から足音が近づいてくる。

先生だろうか。いや、違つかもしれない。

廊下のかどで身を隠したままで覗き見る。

それは八賀谷君だった。

私はすこし安心する。

彼は一応は同じクラスメートと言うことにはなる。でも、八賀谷君なら見つかったても何も聞いてこないだろうし、誰にも何も言わない。とそう思った。

彼とは八賀谷君とは小学校で同じクラスだった。その後は私は中学の時に親の都合で隣のマンションに引っ越したため、それからずっと会うことはなかったけど。

いや、正確に言うとは度か街中とかですれ違ったりしたことはある。でも、中学生になってからは一度も話したことはなかった。

高校でクラスが同じだと知ったときには少し驚いた、彼と高校が同じだ、ということもそうだけど……むしろ……。

八賀谷君が階段を登っていく、教室に向かってるんじゃないみたいだ。こんな朝早くからどうしたんだろう。

その時、後ろから誰かにポンッと肩をたたかれた。

そういうことに慣れていない私の体は完全に固まる。

「リアクションが欲しいと思うのは酷かなあ」

妙に明るい女性の声。確かこの声は。

「……加藤先生ですか？」

「当ったりー、いや見事正解！」

肩をたたいた人物の正体がわかったせいか、私は体を動かせるようになっていた。

私は振り向く。

朝からテンションが高い、この白衣で眼鏡をかけら女の方は加藤先生。

白衣を着ているけれど、化学や物理の先生じゃなくてあくまで保健室の先生。生徒のカウンセラーでもあり、休み時間は生徒の体と心の悩みを聞いたりしているらしい。

誰がこの先生に相談なんかするんだろう。

「ずいぶん、失礼なこと考えてるわね」

「……なんで分かるんですか」

「当たり前でしょ、みんな私を見たら考えるんだもん」

自覚症状があるのなら、その部分をなんとかしたら良いと思う。

改善する余地がたくさんある性格だろうし。

「改善たって、それ自分の性格を他人に都合よく合わせてるだけでしょ？ 他人に合わせて生きてるって退屈だし、絶対にきりがないじゃん。それなら自分らしく生きてる人の方が楽しいし、そもそも人間的に信用出来ると思うけど」

「その自分らしさの内容にもよると思います。って言うか、人の思考を勝手に読まないで下さい」

先生は私の言葉に返事をしない。
聞いているのかいないのか、先生はただにやにや笑っている。
何なんだろう、やな予感がする。

「今、階段を登って言ったのは確か5組の八賀谷君だったかしらねえ」

なんで、私の背後からそれが見えるの？

「いや、珍しい。本当に珍しい。あの、あの藤咲さんが男子に、そう男子に燃えるように熱いまなざしを送ってるなんて」
「送ってません！」

先生は無視して話を続ける。

「これはどういうことか聞かせてもらいたいわね。いや、むしろ藤咲さんが私に話したいことでしょう。ええ、いいわよ。いくらでも相談に乗ってあげるわ」

私の思考は読めるはずのクセに、先生はこういうときはあえて都合よく読めないことにする。なんて教師だ。

……私、逃げようかな。

いや、そもそも学校でここ以外に居場所なんて無いし。

久々に私は自分の性質を呪った。

もしかしたら、この人はこうやって嫌がらせをして生徒の自立を促す方針なのかも。

いや、そんな馬鹿な。

「さあ、いらっしやい。私のカウンセリングルームへ！」

先生がカウンセリングルームの扉を右手で開けつつ、私に方へと宝塚の劇団員みたいな感じで左手を伸ばして言った。それも、むちやくちやに嬉しそうな笑顔で。

例えて言うなら、新しいおもちゃを見つけた子どものような笑顔だ。

ああ、今わかった。この先生が生徒の相談を受けてるなんて、なんか変だと思った。

この先生は生徒に相談をされてるんじゃない。生徒に相談をさせてるんだ。

それはなんとなく悪質なキャッチセールスを思わせる。

反応しない私を見て、先生は自分から私の腕を掴む。

そして、私はカウンセリングルームに引っ張り込まれた。

↳ 藤咲マミの視点 1 (後書き)

今後、彼女はかなり重要な人物となって行きます。

クラスメイト〈前半〉(前書き)

クラスメイト紹介、……にはなってませんね。

クラスメイト<前半>

俺が教室に入った頃には、クラスメートのほぼ大半がそろっていた。恐らく今ここにいない連中は、たぶん遅刻か欠席だろう。

まあ、全員欠席で全然構わない。クラスメイトなんていないに越したことはないしな、その方が静かだし授業も受けやすいし？
教室はいつもどおり、生徒のおしゃべりでがやがや騒がしい。

俺は自分の席に向かう。

だが、なぜか既にその席に先に座っている奴がいた。髪の毛を茶髪に染めたソイツは、俺が席に近づいたのを見て立ち上がる。

顔と柄、さらに頭も悪そうな野郎だった。

ソイツはなんとも聞き取りにくいしゃべり方で話しかけてくる。

「よお、スバルちゃん。また、朝から下手糞なお絵かきでもしての
か？」

うん、悪そうじゃないな。実際に悪いんだ。顔も柄も頭も、ついでに品も。

ちなみに、スバルはろくに交流もない一部の人間が使う俺のあだ名だ。

身近な人間はあだ名で呼ぶ必要がないし、へたをすれば身近すぎて名前も呼ばないものだ。

その話しかけてきた男子の髪型は、死にかけたライオンのようで、耳には似合いもしないピアスを光らせている。

だいたい、髪を染めるのが似合う人間と似合わない人間がいるって知ってるのだろうか。たぶん、知らないんだろう。ついでのつい

でに鏡の存在も。

死にかけてたライオンヘアの男子は、まだ俺に向かって話している。

「なにだんまりこいてんだ？ あんまり調子に乗っているとテメエの生意気なその面スタスタにすんぞ。てめえは佐才の野郎がいなきや何にも出来ないんだらうが？」

その男が目の前に接近してきた。

まったく、近づくな。制服も臭ければ吐き出す息も臭い。俺の周囲の空気を汚染するな。

よく見ると、後ろにも似たような男子がもう一人いる。

ああ、二人でつるんで因縁つけに来たのか。似た格好すぎてどちらがどちらか俺には見分けがつかない。

そんなことを考えながら見ていると、未だに何も言わない俺に痺れを切らしたその男は、突然近くにあった机（俺の席の机だ）を蹴る。

教室が一気に静まった。これはいいな、授業中にも是非して欲しい。

「黙ってねえで何か言ったらどうなんだよ」

怒鳴りちらして男子が言った。

俺は首をかしげる。

「……君、だれ？」

教室が沈黙に包まれる。

俺を除くその場にいるほぼ全員が、何を言ったかわからないという顔をしていた。

が、すぐに周りのクラスメート達は笑い出す。怒りからか恥ずかしさからかは分からないが、茶髪の男子の顔がだんだん顔が真っ赤に染まっていく。後ろにいる奴などあたふたしていた。

俺はその様を見てなんとなく笑みを浮かべる。

「……………!？」

身体に衝撃を受けたような気がして、反射的に身をそらそうとする。

だが瞬間、すでに茶髪の男子が顔を真っ赤にしたまま殴りかかってきていた。既に体の前にある拳。

完全に油断していた、これで直撃するのが確定した。避けきれない。

世界が中途半端にさかさまになる。一瞬、何が起きたかわからない。ただ、複数の何かが崩れるような大きな音がしたことだけは把握している。

気が付くと俺は机に向かって倒れかけていた。いや、ほとんど倒れていた。わずかに体が机に引っ掛つているだけになっている。

だが、当たり所は直前に身をそらしたためそれほど悪くない。背中が若干痛むかな、という程度だ。

目に入るのは散乱する教科書類、いくつか机と椅子が倒れているようだった。

赤い顔の男子はざまあみろ、といった調子で口を開く。

「いい加減にしろよ。それ以上調子に乗ればどうなるかわからねえのか」

ずいぶんと高い声でさえするものだな。とてもそれが癪に障る

自分の顔の笑みがいつそう深くなるのを自覚する。なんだか心臓がバクバク言っている。それが……とても心地良い。

「それ以上しゃべらないでもらえるかな、息が人間とは思えないほど臭いんだよね」

俺は制服を手で払いながら立ち上がった。

どうしよう、楽しすぎてどうにかなくなってしまいそうだ。

案の定、俺の言葉を聞いた茶髪は激情して飛び掛ってくる。

キレた奴を倒すなんて簡単だ、でもちよっとテンションがあがりすぎて倒すだけで済むか自信がない。

突然、目の前に影が割り込んでくる。

遮られる視界。

と同時に、ドスンッと何かが倒れる音がした。

静寂にして、無音。それは僅かな一瞬の出来事。

視界を隔たった何かは呟く。

「アンタ、邪魔」

その声はボソツとして聞き取りにくいかった。

気が付けば、茶髪の男子は赤い顔のまま床に倒れこんでいる。

よく見てみれば、その影は眼鏡をかけた感情の無さそうな男子生徒……ウツロギだった。そいつはいきなり俺と茶髪の間割り込んだのだ。

教室は先程と同じように静まり返っている。

こいつ、今何をしたんだ？

ウツロギは周囲の全てを無視して、鞆を背負って自分の席に向かう。

そして、何事もなかったかのように席に座った。

戸が開く音。

全員が（倒れこんでる茶髪と、今席に座ったウツロギ以外）教室の戸に注目する。

そこにいたのは、眠そうなうちの担任だった。

周囲を見渡して、言う。

「どうしたんだ、お前ら」

クラスメートたちは互いに顔をあわせ始めた。俺ですらこの状況に戸惑っている。

気が付くと心臓の鼓動が落ちついていった。

俺はため息をつく。

なんとというか気分がしらけてしまったな。

さっきまで、あれだけ高揚していたのが嘘だったかのようにだった。

く藤咲マミの視点 2

「ふうん、小学校が同じだっただけなの。へえ……」
嫌そうに加藤先生をしかめる。「それじゃあ、つまんない」と言わんばかりに。

こんななのに、この人はこの学校のカウンセラー。

「ええ、先生のご期待に添えなくて申し訳ありません」
私は出来るだけそっけなく言う。

早くこのおしゃべりをやめて、今日の分の勉強に取り掛かりたい。
と、そのセリフを聞いた先生は表情を変えた。

「でもね、あなたが本当にただそれだけで彼のことを見ていたとは思えないの」

急に先生の目が細くなる。

笑っているような、怒っているような。時々、先生はそんな顔になる。

「恋愛感情なんて単純で安っぽいものじゃなくてね、何かこう複雑な別の想いを抱いてる」

「違う？」と先生は首をかしげて私に聞いた。

私はうつむくしかない。答えようがない、そんなことは。

そんなことを考えたことはなかったけど、違うとは言いきれない何かがある。

考え込んだ私を見て先生は笑った。

「別にいいよ、無理に答えなくて。ただ、なんでも自覚があるのに越したことはないかなって。そういうお節介だから」

私は少し顔を上げる。

先生が私の方を見ていた。

「ごめんね。余計なことだったかもしれない」

先生は立ち上がって部屋の隅にある流し台に向かう。

「コーヒーと紅茶、どっちがいい？」

加藤先生は自分の家からコーヒーポットやティーセットを持ってきて、保健室やカウンセリングルームで楽しむのを趣味にしている。私は自宅で楽しむ方がいいとか、職員室でもコーヒーは飲めると思うのだけれど。

先生が言うには「学校で食べるカップラーメンやパンは格別なのよ。それと同じ」とのことらしい。私には全然わからないんだけど先生には特別なこだわりがあるらしく、そのために勉強もしたと言っていた。

その勉強が教師になるための勉強なのか、お茶とコーヒーを入れる技術の勉強なのかは不明。どっちにしたって、私の感覚だと「なんだかなあ」って感じだけだ。

「でも先生、いいんですか。恋愛感情が安っぽいなんて言っただけで恋愛相談に来る娘もいるんじゃないんですか？」

先生は笑う。

「私だって言う相手は選ぶよ。それに恋愛感情は原因が見えてる分、単純なのは確かでしょう。安っぽいどうかは、ね。人生永く生きればそんな結論も出るよ」

先生はまだ永く生きてるって言うほど歳でもないと思う。多めに見ても30代なっただばかり……かな。

いや、もしかしたら「実は20歳ほど若作りしてます」の可能性もある。

「あなたねえ、女性の年齢探るなんて無礼の極みよ？」

先生がテーブルにコーヒーを二つ置く。

相変わらずテレパストみたいな人だ。

先生は椅子に座りながら、コーヒーを飲み始めた。

「私が恋愛相談で思うのはね、好きな人を好きになれたわけですよ。何を悩むことがあるのかなって思うの。好きになれた、それだけでもう幸せでしょう。あとは、自分が相手とどういう関係でいたいのか、それぐらいしか考えることはないと思うけどな」

先生はコーヒーの香りを楽しみつつ、もう一言付け加えた。

「その中で恐れるべきはただ一つ、相手を冷静に見てないことよ」

「冷静に見てないから、好きと言つのではないんですか」

少し、ムツとして先生に言う。

先生は微笑む。

「好きな相手だけでなく、誰に対してだってなかなか冷静には見れないものよ、そしてそれは少しだけなら許される。でも、相手を常に完全に冷静に見れないならそれは一時の気の迷い。勘違いではないわ。その状態では、例えばどんなに好きだと思っても、それは自分の作り出した感情に酔ってるだけなの」

先生はコーヒーを飲んで一息つく。

「藤咲さんも飲んでいいよ」

私は頷いて、コーヒーにミルクと角砂糖を入れ始めた。角砂糖は多めに3個。

それをスプーンで混ぜながら、私は先生に聞く。

「絶対に冷静に見れないと好きじゃないんですか」

先生は首をかしげて、困っているような顔をした。

「そういうわけでももちろんないけど。お酒と同じでね、酔っ払ってるようなものだから。その状態で好きって言ってもねえ。恋に冷めた後に、それでも好きって言えてようやく本物なんじゃないかな」

「それは恋じゃなくて愛なんじゃないですか」

「恋愛には恋も愛も含むでしょう。どっちにしたって嫌いな相手を好きになつたり、好きな相手を嫌いになるよりは安っぽい問題と思っうわけ」

また一息つく。

今、先生の言ったことがいまいち想像できない。嫌いな相手を好きになる。好きな相手を嫌いになる。それこそ単なる勘違いだっただけのことじゃないのだろうか。だとしたら、そっちのほう安っぽい問題じゃないのかな。

私は先生の言うことに、どうもさっきから納得できない。

「藤咲さん、さっきから質問ばかりね。うん、やっぱり女の子なの

ね。こういう話に食いつきいいし」

なんか、私としてはそういう言われ方は嫌だな。

ふと、流し台のほうに新聞があるのが目に付いた。

「加藤先生も新聞読むんですね」

「何度も失礼ねえ、そりゃ読みますよ。なんて言ったって……」

コンコン、と戸をたたたく音。

「……授業中に誰かな」

先生は立ちあがって、ドアに向かう。

そして、先生はゆっくりと戸をあけた。

「はい、何の御用？」

扉の前に立っていたのは見覚えのある男子生徒。

そこにいたのは、なんと先程不本意ながら話題になった八賀谷君そのひとだった。

クラスメイト<後半>

俺が保健室に行ったのは、結果的に言えば当然のことだったと言える。

担任は教室に入ってきてから、俺と、茶髪とつるんでいた男子（西川と言うらしい）から事情を聞き、その後確認の為にクラスメイト全員を問いただした。

しかし、誰も関わりたくないのか口を開こうとするものはほとんどいなかった。人間というのはそういうもので、だからこそ世の中が成り立っている訳なのだが、くだらない連中だなと思わざるを得ない。

そんな中、一人だけ俺を積極的に弁護をしてくる女子がいた。

隣の席の女子、佐々木だ。

佐々木はうるさくて騒がしい、どこにでもいるような感情だけで生きているような奴だが、悪い奴ではない。せいぜい悪意のない軽犯罪者というところだろう。

「スバルは手を出してないよ。一発殴られたけど、やりかえさなかつたもん」

そこは実際、やり返す前に終わっただけだった。訂正を加えなくなつたが、加えた方が格好悪くなる訂正ってなんだろう。

佐々木が俺の顔を心配そうに覗いた。

「……なんだ、さつきから。」

佐々木の言葉を聞いた担任は、眠そうな顔で腕を組む。

ちなみに担任が眠そうなのは朝だからではない。朝、昼に関係なくいつも眠そうな顔をしている。さすがに夜はどうなのかは知らない。もしかしたら夜行性の可能性もありうる、と俺は勝手に思っている。

「じゃあ、なんで古田は倒れてるんだ」

どうやらあの茶髪は古田という名前らしい。

「ウツロギがやったんだけど。こう、合気道っていうか柔道なのか

よくわかんないけど」

「ウツロギ？……ああ、宇都木か。なんで宇都木がそんな真似するんだ、殴られたのは八賀谷だろうが」

佐々木は言葉に詰まった。

「……アタシにわかるわけないでしょ、本人に聞いたら？」

もつともな意見だと俺は思う。だが担任がウツロギに聞かずに佐々木に聞いたのも、当然と言える。

担任は顔をしかめる。寝不足で機嫌が悪くなったようにしか見えな
いが。

「宇都木に聞いてまともな答えが返ってくると思うのか」

さすがにそれを本人を目の前にして言うのはどうかと思うが、当の本人は全く持つて気にした様子がないので、別にいいのだろう。

担任の言動にムツとしたのだろうか、今度は佐々木が顔をしかめた。

「本人に聞いてから言いなさいよ」

佐々木の言葉に、担任は沈黙する。

佐々木の言っていることは常識的な意見ではあるが、別に佐々木が常識人つてわけでもない。女子はたまに感情で論理的に動くことがある。いつも常識のない人間に、常識的な意見を言われた担任の心境はさぞや複雑に違いない。

担任はウツロギのほうを見て、口を開く。

「で、なんで古田をぶん投げたんだ。宇都木」
機械的に返すウツロギ。

「邪魔だったから。それに投げたんじゃない、倒したんだ」

「どう違う」

「姿勢を崩させただけで倒れたのは奴自身だ」

担任は頭を軽く抑えながら、首を軽く左右に振る。

「……なにが、どう邪魔だったんだ」

「古田が、自分の席に行く為の進路を阻害したから、邪魔だった」

「だから投げたのか」

「投げてない」

再び、沈黙する担任。

担任もウツロギからまともな答えをあきらめて話せばいいのに。

担任は佐々木に向き直る。

「橋本はどうした」

「さあ、遅刻じゃないの」

橋本と言うのは、この『話すでく人形』とまともに力づくで会話ができる女子である。力づく自体がまともかどうかは俺にはわからない。

担任はため息をついた、俺もつきたい気分だ。

「八賀谷」

突然、担任は俺を呼ぶ。

「なんですか」

「お前、保健室行つて先生呼んで来い。頭を打ってるかも知れん奴を、あまり動かすわけにはいかんだろ」

頭を打ってるかも知れん奴と言うのは古田のことだろう。確かに、それは動かさないほうがいいのかもしれない、が。そんなのアンタが行けばいい話だ。

俺は担任に不満を隠しながら、担任に言う。

「なんで俺なんですか」

担任は自分の口の左端を指を指して言った。

「切れてるぞ、結構深く」

俺は自分の口の端を触る、指に鮮やかな赤いものが付着していた。舌で舐めてみると鉄の味がする。かなりの出血をしているようで、服を見てみると所々赤く染まっていた。

「腕も引っ掛けて血が出てるしな。手当ての受けついだ、行つて来い」

冷静になつて自分の身体を見回す、擦り傷があちらこちらにあるようだ。気付くとなんとなく身体が痛くなってくる、さっきまではなんともなかったのに不思議なものだ。

俺はしぶしぶ頷いて、教室を出て行く。

先程の佐々木の心配そうな視線の意味をようやく理解した。

八賀谷君の顔と手にはあざと擦り傷があった。なによりも、口の端が切れていてその血は制服とその下のワイシャツを汚していた。

加藤先生は加賀谷君を上から下までじっくり見てから何度も頷いた。顔には笑みが浮かんでいる。その表情ははたから見れば屈託のない笑顔だが、その目には意地悪そうな光が宿っていた。

「ああ、噂をすればなんとやらねえ」

「噂？」

八賀谷君は不審そうな顔をする、当たり前だ。

「気にしない、気にしない。いいから部屋に入って」

加藤先生はあわてずにゆっくりと両手を顔の前でふってごまかした。先生のその様子はごまかすことに慣れている感じがする。

やや間をおいて先生は、ややきつめの口調で八賀谷君に言葉を続けた。

「んで、なんで廊下からカウンセリング室のドアをノックしたの。

そういう場合は保健室からノックするんでしょ、生徒から相談受ける途中だったらどうするつもり？」

カウンセリングルームは保険室からもドアを隔てて繋がっていて、そこからならドアを開けても相談している生徒の顔が見えないように配慮されている。

それを聞いて八賀谷君は困ったような顔をした。

「俺もそう思ったんですけど保健室開いてなかったから、仕方なくそれって、保健室を開けてなかった先生に問題があるんじゃない？」

それを聞いて、自然な流れに見せかけて加藤先生は彼から目をそらす。

「そんなことよりもあなたの怪我の手当てが先だったわね。少し待ちなさい」

目のついでに話しもそらしつつ、ポケットから保健室の鍵を探す先

生。

なんか大人つてずるいと思う。

八賀谷君はそれを見て口を開いた。

「待って下さい。教室に、えーと、その、気を失っている生徒が頭を打っているしれないので担任が先生を呼んで来いと」

加藤先生は考えるようしてから振り向いた。

八賀谷君に向き直った先生には笑顔が消えていた。

「何、あんた達ケンカでもしたの？」

「……ええ、まあ」

加賀谷君は答えにくそうに頷く。

「朝っぱらから何やってんだか。若いのと幼いのは違うのよ、ガキじゃないんだしわかるでしょ。馬鹿な大人のまねなんかしないでいいの」

先生は呆れたように八賀谷君に言った。

こういう時は、大人の女性だなあと感じがする。

加藤先生が私をにらむ。

「こういう時は、っていつもは大人の女性に見えないのね」

先生がぼそつと呟きながらも保健室の鍵を開けた。

だから、なんで私の考えがわかるんですか。

先生は、そのまま私の横を通って八賀谷君の前に出て行く。

「んー、じゃあさ。私は君のクラスに行くから、手当てはこの暇そ
うな娘にしてもらって。君のクラス5組でしょ？」

八賀谷君は、先生の言葉に「はい、わかりました」と即答した。

そんなことを私としては無断で決めないでほしかった。

でも、先生のことだから私の意見はどうせ聞き入れてもらえないの
だろう。と思つて諦める。本当はクラスメートと関わりたくないの
だ。

例え、八賀谷君でも。

そのまま先生は、八賀谷君が避けたのを確認して扉から出て行く。

私は先生が手ぶらなのに気付いて尋ねる。

「救急箱とかは持っていかなくても大丈夫なんですか」

「いいよ、出血してるわけでもないんでしょ。それに、カットバンとかなら携帯してるから、大丈夫」

私は先生を見送ってから八賀谷君へと向き直る。

あれっ、いない。

視線を移すと、流し台の方で八賀谷君が何かを見ていた。

なんだろう。

私は立ち上がって、流し台に向かう。

横から覗いてみると、それは今朝の新聞であるとわかった。

彼が見ているのはその中の記事の一つのようだった。

あの連続猟奇殺人の記事。確か、若い女性ばかりを狙っている事件。ニユースキヤスタによると内臓の一部が持ち去られていたらしく。

今では色々な噂や憶測が飛び交って、どこまで本当かわからないような話ではある。

この事件はこの街で起こっていることもあって、どの学校も生徒に（特に女子生徒に）集団でなるべく早い時間帯に帰るように言っている。と加藤先生に聞いた。

「そんなに興味あるの？その事件」

私は少々ためらってから八賀谷君に聞いた、ほとんど話したことなかったから話かけづらい。

「まあ、そうかも。地元だしね」

彼は新聞を見たまま頷く。そして、私の方へ向き直った。

八賀谷君の口の端の傷が目に入る、もう血は止まっているようだったが痛々しい。

「君は気にならないの？」

彼が血で黒ずんだ口を開いて私に聞いた。

そう聞かれても、私は気にしたことなかったのですこし困惑する。そのまま正直に言っつてよいのだろうか。

「んー、なんていうか。テレビ中だけの事件みたいな気がして、現実感ないんだよね」

とりあえず、答えにもならないような答えを返す。

彼は「そう」とだけいって、また新聞に目を移した。そのまま彼は黙り込む。

なんか怒らせちゃったのかな。

それも仕方ない。私はそう割り切ることにして、彼に話しかける。

「早く手当てしようか。ついてきて」

彼が頷いたのを確認して、私は保健室の扉を開ける。

とりあえず、加賀谷君に椅子に座ってもらってから救急箱を探すことにした。

何度か薬をもらったことがあるので場所はわかる。

私は彼の正面に椅子をだして座った。

「結構、深く切れてるね」

私は彼の口の端を指してそう言った。

こういう時はまず消毒をすればいいのかな。そう考えて、救急箱から消毒液を取り出す。

近くにあったティッシュの箱から、何枚かティッシュをとって彼の傷の下に当てた。

「ちよつと染みるけど、我慢してね」

消毒液を傷口にかける。

彼が痛そうに目をつぶった。なんとなく私も、それを見て口の端が痛くなつた気がする。

私は彼に聞いた。

「どう、染みる？」

自分でもなにを聞いてるんだろう、とそう思った。染みるに決まってる。

それを聞いて彼は肩をすくめた。

「かなりね。軽く、ちよつとどころの話じゃないかな」

八賀谷君が少し笑って言う。あまり顔を動かすと痛いのだろう。

「……無理に微笑まなくて良いのに」

「えっ？」

私は無意識にそう言っていた。彼がそれを聞いて驚く。

それを見て、私は言わなければよかったと後悔した。

「ごめんなさい。なんでもないので、気にしないでね」

私はあわててそう言った。

なんとなく、気まずい雰囲気になる。

私はたんとんと手当てを進めていった。

口の端が切れた傷はどう処置すればいいかわからなかったが、外側からカットバンを張るくらいしか出来ないだろうと思い、カットバンを取り出す。

不意に八賀谷君が口を開く。

「あのさ、慣れてるね。こういうの」

自分ではきこちなく手当てをしていると思っていたから、その言葉は意外だった。

私はなんて言っていていいかわからず、間をおいてから返事をする。

「そんなことないよ」

やっぱり私は、ためらいがちにしか話ができない。悪く思われてないだろうか。

だけど、彼はそんなことを気にしてはいないようだった。普通に私に話しかける。

「もしかして、いつもこういうことしてる？」

「時々。家事とかやっても怪我すること多いから」

私は話しながら、彼の口の端にカットバンを貼った。

「あ、もう一つ聞いていいかな」

「うん、いいよ」

なんだろうか。聞きたいことって。

なぜか、彼の歯切れが少し悪くなる。

「変に思わないで欲しいんだけど、高校に来る前に会ったことないかな」

今度は私が無言になる番だった。

また、気まずくなっていく。

どうやら、彼は私と同じ小学校だったのを覚えていないらしい。そんな中、彼がすまなそうに言った。

「あの、なんか、ごめん」

「どうしていきなり謝るの？」

「傷つけたような気がしたから」

私はそんな顔したのだろうか。

「どうしてそう思うの。顔に出てるの？」

「……やっぱり傷ついてたんだ」

私は言葉を返せなくなる。

彼は再び謝った。

「本当にごめん。どうしたらいいかわからないけど、本当にごめん謝り続ける彼の姿に私はうろたえるしかなかった。」

そんなふうには謝られたのは初めてだったのだ。

誰もそんなふうには謝らない。どれほど相手を傷つけたかなど気付かない。

この人は、なんなんだろう。

「もう謝らないで。その、私。小学校の頃と同じ学校だったの」

彼はまだ、すまなそうにしながらも納得したかのように頷いた。

「うん、なんとなくだけど覚えてる。えと、確か……マミちゃんって呼ばれてた」

私は頷く。

「あなたはコウって呼ばれてた。一緒に遊んだり話すことはなかったけど」

それを聞いて彼は笑った。

とても嬉しそうに笑った。

すこし痛々しい顔で笑った。

「じゃあ、これから話そう。俺は八賀谷 コウ。仲の良くない奴はスバルって呼ぶ」

私も彼につられて笑う。普通は逆じゃないのかな、仲の良い人があだ名を呼ぶはずだ。

「なんか変なの」

「そうかな」

「自己紹介だったら最初の日にはクラスでしたでしょ。みんなの前でそれにもう私にとっては小学生のころから知っている相手だ。自己紹介なんて少し今さらのように思う。」

加賀谷君は顔をしかめ、少し考えてから言った。

「みんなには言ったけど、藤咲さん個人には言っていないよ。もちろん、俺個人にもね。みんなまとめて一つにされたくないな」

八賀谷君は真剣な声で私に言った。目がまっすぐすぎて、少し照れくさい。

八賀谷君はやっぱり変わっている。私の知る限り、みんなの前ではそうでもなかったけど、こう所々ぼろが出るというか、ふと穴が見えることがある。

誰にも見せない、誰も持っていない、誰も気付かないものを隠している。

結局、私も彼に乗ることにした。

「じゃあ、私も自己紹介。私は藤咲 マミ。えと、趣味は……」

「待って」

八賀谷君は私の自己紹介を途中で止めた。

私は首をかしげる。どうかしたのだろうか。

「そういうのは、後の楽しみに取っておこう。きっと、付き合っていくうちにわかるから」

彼はまるで、新しい遊びを見つけた子どもだと、そう思った。

やっぱり、楽しそうな笑顔。

「今は、名前だけで。ね？」

すこしだけ、加藤先生に似ているのかもしれない。

セミと猿

昼休みの屋上。

俺はいつもここで昼食を食べている。

……くだらない話を楽しみながら。

「それで、説教食らって午前中潰れたのか」

優等生としか言えないほどに制服を整えた男子、佐才 登が俺にそう話しかけた。登は俺の中学からこうして話すようになった人物で、いつもこうやって昼食を食べるメンバーの一人だ。

「いや、俺よかウツロギと古田だっけ、それとつるんでた奴が絞られてたかな」

もつとも、ウツロギがそんなもので堪えるとは思えない。今頃は同じく午後から来た橋本に絞られているだろう。それでも堪えるとも思えないが。

ちなみに、古田たちを怒ったのは担任じゃない。学年主任だ。うちの担任が説教を始めると怒っているのか、愚痴っているのかわからないようなことになる。多分寝ぼけてるんだろう。

「それにしても古田の奴まだ懲りてなかったんだね」

と小柄な男子生徒、有元 篤史が言う。篤史も登と同じく中学からのメンバーだ。と言っても、俺たちは友人でもなんでもない。実際、俺たちは周囲から特別な関わりを持っていないように思われている。共通項があるとすれば、中学のころから真面目な生徒として学校では認知されていたということくらいか。実際に真面目だったかどうかは、個人の価値観によるだろうからなんとも言えない。

登が右拳を自らの手の平にたたきつける。

「あの猿野郎、何回ぶん殴れば学習するんだ」
その言葉に抗議する篤史。

「猿って言うなよ、失礼だろ」

「ああ、わりい。確かに失礼だったな。猿に」

「そう、猿に」

「どっちかっていえば、いつも群れてるカラスどもってか」

「まあ、カラスも猿も執念深いからね。でもそれ言うならセミの方がいいかも」

「ああ、執念深いんじゃないかってそういう風に出てくるのか。本能的に」

「そう、本能的に常にうるさくてうっとおしいんだね。ついでにいつらの寿命も一週間だったら良かったのに」

「ああ、あれはセミの長所だからな。その辺も同じだったらいいのにな、あのセミ野郎」

あまりの彼らの言いように、俺はさすがに心が痛んできた。彼らに俺は口を開く。

「お前ら止めるよ。いい加減可哀想だろうが」

「セミが」

3人の声がそろった。

登と篤史が笑い出す。

「いやー、さすがにこう3年も一緒にいると息が合ってくるな」

「うん、なかなか良い感じだよな。学校祭は漫才でもしようか」

「やめとけ、俺たちのキャラじゃない」

「だよねえ、一応真面目君で通してんだからさ」

俺は彼らに「どうしようもない奴らだな」と他人事のように呟いた。だが俺の顔にはそんな言葉は裏腹に自然と、喧嘩の時とは違う種類の笑みが浮かぶ。

俺たちはいつも昼休みの間、こうやって屋上に行って昼食を共にする。

なぜなら学校が禁止していて、あまり人が来ないからだ。正確には元々は自由に来ることができたが、今では禁止されているって言うところか、ただあまり人の来ないところで集まると言うのは、目撃されれば確実にその関係性に気づかれる危険性があることなのだけ

ど。

まあそれはともかく、ここが出入り禁止になった理由と云うのが、あの茶髪のライオンヘア（さっきまで覚えていたけど、名前は忘れた）達がたむろっていたからだ。それが表向きの原因の一つで、まあ、その後色々あったのだ。

ライオンヘアはあれでも一応、地元ではそれなりに有名な奴らしく、進学校のいわゆる『なんちゃって不良』の先輩方では怖くて対抗できなかつたのだろう。って、少しは抵抗しろ。

……彼らに面子って言うものはないんだろうか。

そんな中、俺たちは結果的に彼らの溜まり場を奪ったことになる。彼らも気にせず俺たちの横で話してればいいと思うんだが、犬や猿と同じく自分達のテリトリに入るものを攻撃する性質があるらしい。そのお陰で、ここで昼食をとる俺たちへと、脅しから始まってすぐに殴り合いに発展した。何度か大きな被害を受けたこともある。そんな彼らに対し、俺と篤史がそれぞれ交渉役となり誠意を持って対応したが、交渉は10秒で破綻。

結果、彼らは何者かにバイクで轢かれそうになり、またスタンガンで襲われ気絶させられ、夜間学校で全裸で居たところを警備員にみつきり、拳銃の果てに近くの川に携帯や家の鍵、身分証明、置き勉強道具、学校ジャージと上靴と外靴、自転車を何者かに捨てられることになった。

家の鍵に接着剤を詰めたり、鞆の中にペンキを流し込まれたこともあるらしい。

誰がやったかは知らないが、その犯人はいまだに見つかっていない。

一部は公になったために警察が捜したにも関わらず、だ。不思議なこともあるものだ。

うん、「全ての犯罪とは馬鹿がやる、賢人は罪を犯さずして目的を達する」とは誰の言葉だったかな。

まあ、前半部分はともかく（俺が今付け足した）、後半部分に関しては、言う奴の心当たりは一人しかいない。

と、ここまで考えてふと気付く。

「そういえば、なんで二人とも午前中にいなかったのさ」

登と篤史は顔を見合わせた。

登が恐る恐る口を開く。

「いやな、……ふとバイクで海まで行きたくなくなってな」

「それを登から聞いたので、ちょっとついていってみたいりしたんですよ」

なるほど、つまり。

「俺に内緒で楽しかったかい。しかも、君たちが不在のせいで俺が殴られたわけだもんな。笑いが止まらないよねえ、どおりで二人とも機嫌が良いと思った」

俺は笑顔を保ったままで言う。うん、これは傑作だ。

ふたりの肩が震える。

ふたりの顔がこわばってる気がするけど気のせいだろう。

あわてるように、急いで登が口を開く。

「いや待てよ！仮に誘ってもお前は行かねえだろ。行くつっても、バイクに3人乗りは無理なんだぜ？」

「うん、だろうね。だから？」

篤史が登に合わせて言う。

「それに、殴られたのは結果論であって俺達に言ってもどうしようもないだろ。それに、君が傷ついて喜ぶわけないじゃないか」

「知ってるし、わかるよ。だから？」

彼らの顔から血の気が引いている気がする。

なぜだろう？

あれ、なんかいつもより頭が回らないなあ。

登がおそろおそろ口を開く。

「だから、あのー。怒るのを止めてもらえますか」

へえ、僕が怒っていると勘違いしてるみたいだ。笑ってるつもりなんだけどな、一応。

ああ、笑い方が足りないのかも知れないな。そう思って、より一層

笑顔を深くする。

「怒ってないよ。僕は、ね。でもさ、彼らには事故とかおきた方がいいんじゃないかな、そうは思わないか。佐才、有元」

ふたりは合わせたかのように、何度も頷いた。

「あたりまえだぜ。なあ、篤史」

「うん、友達が傷つけられたんだ。黙ってる気はないよ」
僕はふたりの言葉を嬉しく思った。

「ふたりともありがとう。でも、報復なんていけないよ。あくまで事故が起きると良いなってことだから」

その場に、笑い声が響く。もちろん、仲良し三人組のだ。

若干、から笑いの気がするが。

と、もう一つ聞くことがあった

「聞きたいことがあったんだけどさ、藤咲って女子知ってる？」

なぜか登は、あからさまにほっと息を吐き出した。そして、一息ついてから俺の言葉に返事をする。

「ああ、うちのクラスのだろ。最近来てないけどな」

その言葉に、篤史が口を開いた。

「いや、来てはいるみたいだよ。保健室にいるんじゃないのかな、それがどうかした？」

俺はあわてて首を振る。

「べつに、なんでもないよ」

ふたりは怪訝そうな顔をしたが、特にそれ以上追求はしてこなかった。

俺は心の中でこっそりとため息をついた。

やっぱりうちのクラスだったのか、藤咲さん。

うん。あれ以上、傷つけることがなくて幸いだっただな。

正直、俺はそのことを完璧に忘れていた。向こうはそのことを覚えていたようだっただけに、本人には絶対いえない、いや絶対誰にも言ってはならないな。

そう考えた俺はこのことを記憶から抹消した。これで誰も知ること

は出来ない。

俺は思う。あえて言わないことも優しさなのであると。

俺は一人で頷いて納得した。

もしかしたら、忘却と沈黙って人間の美德なのかもしれない……っ
て年寄り臭いか。

加藤先生は新しく紅茶を入れる。今はお昼休みでお昼ご飯を食べ終わった私たちは、一緒に私の焼いたクッキーを食べる約束をしていた。

「さつきから楽しそうね、藤咲さん」

「そうですか？」

そう言いつつも、実は自分でも機嫌がいいのがわかっていた。久しぶりに、あったかい気持ちになれたのだから。

でも、本当はあまり彼に期待しないほうがいいんじゃないか、とも思っている。

また、裏切られるかもしれない。

裏切られるもなにも、彼女たちにその気は一度もなかったのだろうけど。全部、勝手に期待した私が悪いのだ。

最初からわかっていて、それでも私は期待せずにはいらなかったのだ。

もしかしたら、いつかは私の気持ちをわかってくれるんじゃないかって。

私は彼女たちに期待し過ぎた。だから、私は駄目になってしまったのだろう。

相手に配慮するばかりだった。

相手の考えをわかってもらうとするばかりだった。

自分から言わなきゃいけないのに。

例え、拒絶されるとわかっていても。

でも、今さら勇気を出せなかった私は殻に閉じこもるしかなかった。もう、それは仕方ないことなのだと諦ようとしていた。それでも諦め切れなかった私。

いつも、すこしづつ知らないうちに相手に期待してしまう。それが私。

先生が私の前に紅茶を置いた。

「楽しそうなのはいいけれど、紅茶飲んでくれると嬉しいな」

「はい、先生」

私は鞆からクッキーの入った袋を出して広げた。

アーモンドと栗の入ったチョコクッキーと、蜂蜜と紅茶の入ったバニラクッキーの2種類。

先生は両手を体の前で合わせて「いただきまーす」とわりと礼儀正しく言った。

そうしてすぐ嬉しそうに手を伸ばす。

でも、私はクッキーにも紅茶にも手を出さない。

なぜだろうか。私の彼に抱く思いは期待じゃない気がする。

なんとというか彼は、私とは別の世界の人だ。

多分、私の考えともまるで違う考えを持っているんだろう。

もし彼に、私自身の気持ち素直に言っても絶対にわかってくれないだろうし、それどころか拒絶もしないのだろうな。

私にはなぜかそんな確信があった。

これでは私は、彼に期待は出来ないはず。

ここで不思議なのは、例え彼にそうされても私は傷つかないだろう。と言うことだ。

では私は彼に何を求めているのだろうか。それは、理解ではないと思う。

「先生」

気が付くと、私は加藤先生に声をかけていた。

先生がクッキーを、大きく開いた口にはおり込みながら返事をする。すこし、かつこ悪い。

「ん、なーに。あ、クッキーだったらね。むちゃくちゃ美味しいよ」

「そうじゃなくて」

「なあに？」

「これは仮定の話なんですけど」

私は息を吸ってから言葉を続けた。

「自分を理解して欲しいと願っていた人物が居るとしますよね。その人物が、絶対に自分を理解出来ない人間に出会って、なのにその人物に興味を持ってしまったとしたら、なにか理由があるんでしょうか？」

一息で言った私は、止まって息を吐いてようやく落ちついた。早口すぎたかもしれない。

それを聞き、先生は首をかしげた。

だがそれも一瞬のことで、かしげた後すぐに上を向いて考えはじめる。

今の質問はひどくわかりにくい言い方だと自分でも思ったのだけど、カウンセリングに慣れている先生にとってはたいしたことでもなかったようだ。

上を見たまま、そのままの状態で先生は言う。

「要約して、相手が自分を理解してくれないのはわかってるけど、その人のことが気になる。でいい？」

「……はい」

「そうねえ。一概には言えないけど、もしかしてその人物って『他人に理解してもらうためには、まず自分が他人を理解しなければならぬ』とか思ってたんじゃないのかしら」

言われてみればそうなのかもしれない。

私は頷く。

「そうかもしれませんが」

先生は神妙に何度も頷いた。

「それで、努力に努力を重ねて他人を理解した結果。他人は絶対に自分を理解できないって、わかっちゃったりした？」

そんなこと、考えたこともなかった。

それでも、先生の言葉には自分でも気付かなかった真実がある気がした。

「……もしかしたら」

私はうつむきながら返事をする。

それでも、その人物は他人に期待せずにはいらなかったのだろうか。いや違う、諦めきれなかったんだ。わかりたくなかった、わかろうとしなかった。

それが事実なら、自分の願いは叶わなくなってしまいうから。

「じゃあ、きつところかな。その人物にとって、その人は初めて見た人間だったの」

先生の言うことの意味がわからない。

よほど私はその言葉を聞いておかしな顔をしていたのだろう。私の顔を見た先生は、楽しそうに笑った。

「つまりね、その人物は初めて相手を理解できなかったのよ。どれだけわかってとしても、わかることのできない人間。その人にとって、その人間はそんな人物だったのよ、きつと」

私は、先生のその言葉を理解するのに時間がかかった。

他人を理解しようと決めていた人物が、理解できない人に出会ってしまった。

だから、理解したい？

なるほど、そうなのかもしれない。

確かに、彼は私の言ったことになにも言わないかもしれない。それ以前に彼は、どんなことを言葉を言うかわからない、どんな行動をするかわからない。そんな感じがあった。

それを踏まえて、私は先生にさらに尋ねる。

「その人はどんな人だと思いますか」

「興味を持った人物、興味を持たれた人。どっちのこと？」

先生はクッキーが大量に入った口で返事をした。なんか、きたない。興味を持った人物、つまりは私。興味を持たれた人、つまり八賀谷君。どちらを私が気にしているのかなんて考えるまでもない。

私はなんとなく先生の食べ方に困りながらも、言葉を返す。

「もちろん、興味を持たれた方です」

先生は紅茶を飲んで、一息ついた。

「うんとね、あくまで多分よ？多分、その人はね。他人を理解しようとしてない人なんでしょう。そもそも、理解する必要があるとも思っていない人なのね。それは、他人を理解しようと思わなくても、他人のことで必要なことはわかる人か、もしくは、単純に他人がどうでもいいか。そのどっちかなんでしょう」

単純にそれを受け取ると冷たくて、空気の読めない人ってことになる気がする。

「……なんでそう思うんですか？」

「他人を理解しようとする人にとって、一番理解できない人はどんな人か、って考えてみただけ」

「……でも、他人を理解しようとしてない人なんていっぱいいると思いますよ？」

世の中の人、大半そうだと思う。

誰一人、周囲の人がどんなことにどれだけ苦しんでいるのか、関心なんて持たない。

「それは他人を理解出来ない人ですよ。正確には、他人を理解してなくせに、自分は他人を理解していると思いついてる人、かな。勝手にこの人の苦しみはこれくらいだろう、って考えて、自分の苦しみにたいしたことはないって思う、みたいなの？」

「なんとなくイメージはわかりますけど……」

「ああ、自分の苦しみになんて他の人に比べたら……って言う人も、結局は他人を理解してないに等しいけどね。そもそも、苦しみを度合いとか数値で測ろうってのが間違いだし」

「そうなんですか？」

「目に見えない物を定規で測るようなもんでしょ？しかも、その定規は自分一人の価値観、経験論。その上、その時の気分や体調で伸び縮みする。究極的に、その人の苦しみはその人にしかわからないんだから」

「カウンセラーする人が他人の苦しみはわからない、って言うのはどうかと」

「それを踏まえた上で、現実として何が出来るか、がケアだと私は思っている。ただ聞くだけってのも立派な手段だし、ね。理解しろとは言わないけど」

「はあ」

先生の話は要領を得ないように思うことも正直多い。単純に私の価値観にそぐわないってだけのことなんだろうか、それとも私の理解力が低いのか。

「話を戻すけど、私が言いたいのはその人は他人を理解できるけど、わざわざ必要以上に理解しようとは思えない人ってこと。……論理的判断によるものなのか、感情的判断なのかはわからないけど、最終的にどちらにも変わらないと私は思う」

……それは、つまりそれはどういう人と言うことなんだろう。

八賀谷君は他人を理解しようとしたくない人ってこと。さらに突き詰めると八賀谷君は他人を理解する必要がないから、理解しようとしていない。だから、私は理解できない？

なぜなら、私にそんな部分は無いから。

うーん、なんとなく先生の言ったことに一理ある気がする。

だけど、それが完全な答えだとは思えない。

なんというか、イメージがあやふやなのだ。先生の言ったことだけでは彼という人間を思い描けない。

それでも、思うのは彼はどこか作り物めいているように思うということ。

別に誰とも仲良くしたいと思わないけど、それでもあえて親しそうに話す、とか。別に期待も何もしていないけど、とりあえず親切にする、とか。そういう部分があるように見えて思うのだ。

そう言えば誤解されそうだけど別に悪いことはしていない。むしろ他の人からすればいいこと、と言うか、損か得かと言えば、得……だろうか？

感情と行動を切り離している、そんな感触。

きつと、そんなことをする人は他人に裏切られるとか自分から気持

ちを言うとか、ましてや他人に期待するなんていうそんな小さな考えから突き放した所にいるのだろう。

他人に理解して欲しい、そう思う私はそうされない時、裏切られたように失望する。とても勝手に。他人に理解して欲しい、そう思う私は他人に期待しているに他ならない。相手に見返りを求めているのだ。

「私は貴方を理解してあげてるんだから、貴方もそうしなさいよ」と。

彼はそんなのと無縁なら、私とは理解しあえない。私は理解できないだろう。

いや、そんな人は誰とも理解しあわない。と思う。だって、そういう部分って誰にでもあると思うから。

彼は私の同類じゃない、私も彼の同類ではない。そんな人に馴れ合える人はいない、理解し合える人もいない。

仮にいたとしても、それは偽りなんじゃないか？
偽りの中では人は独りだ。

そう、独り。
独り。

ああ、彼は独りなんだ。
私はなんとなく胸を左手で押さえる。

これは、なんなんだろう。この気持ちは。
なんだか、胸が暖かい。

私は自分の考えに浸って、クッキーにも紅茶にも手を出すことはなかった。

「あら、おしゃべりは終わり？」
私は先生の言葉に無言だ。

先生が寂しそうな顔をする。
仕方なく、先生はまた一人でクッキーを食べ始めた。

そして、そっと呟く。
「なんか、一人で本当に楽しそうね。先生、寂しくなっちゃったわ」

部屋には、先生がクッキーを食べる音だけが響いた。

エピソード

とある物が新聞を持って椅子に座っている。

「誰が、こんなことを？」

手に持った新聞を見ながら、その人物は改めて呟いた。ただし心の中で。

新聞には連続猟奇殺人の文字。

この情報はこの町どころか、日本中に知れ渡っている。

自分は今まで完璧にやってきた。

情報は流れても、警察内部で済むはずだった。マスコミに知れ渡ることはないはずだった。

このままでは、今までしてきた苦勞が水の泡だ。

そろそろ他の件との類似点に気付くものも現れるだろう。

それでも到底警察の手が自分に届くとは思えないが。

だが、過信は禁物である。日本の警察は基本的には優秀だ。

もし、自分が手を下したら正体がばれる可能性は大きい。なにせ、

次の獲物も同じこの街に住んでいるのだ。もしかしたら、容疑者として疑われるくらいはあるかもしれない。

それは、あまり好ましくない。

やり方を変えるか、時間が経つまで待つか。

だが、犯人が自分と同類ならば同じ獲物を横取られる可能性は高い。あんな獲物はふたつとないからだ。と言うことは、待つのは危険である。

だが、簡単な話だ。

この犯人を利用すれば良い。

前々から狙っていたことだ。

そうすれば全てを帳消しにして、もう一度いちから始めることが出来る。

だが、上手く行くのだろうか。

いや、上手くは行くだろう。自分はそのための手がかりを持っている。が、しかし。

その人物は立ち上がる。

「どうも、相手が自分と違うモノの気がしてならない」

誰にも聞かれないようにそう呟くと、その人物は歩き去っていった。その場に残るのは、赤いピアスが一つ。

形ばかりの美術部

街の路地裏での独白

もう人は襲いたくない。

俺は誰も傷つけないんだ。

そう思っつて、耐えてきたがもう限界かもしれぬ。

このどうしようもない空腹には勝てないのだ。

殺したいわけじゃない、今でも人は殺したくないのだ。

だが、自分が生きるためには襲わなければならぬ。

本当はそんなことはしたくないのだ。

襲い掛かるときも喰らうときも自分は涙を流し、腕を止めようとし、咀嚼するのを何度も止めさせようと手で塞ごうとした。

だが、手はいうことを聞かずただ延々と俺の口にそれを運び続ける。本当は食べてたくないのに。

そして、食事が終わってから自分自身におぞましさを感じ吐き気がこみ上げる。

最初の頃はそうして、吐くことで人間性を保っていた。

そして、吐き出した分をまた涙を流しながら喰らうのだ。

だが、今ではどうなのだろう。

いや、最初はそうだったのだ。だが段々と感覚が麻痺してきている。今では、道行く人間を単なる肉の塊としてしか見れない。

親も、友人も、そして恋人もだ！

今では、自分が人間を襲わぬように路地裏から出ないようにしている。

あまり人が来ないここならば、誰かを襲う心配は少ない。

だが、もしここに誰かが入ってきたのなら。

そんなことは想像もしたくない。

ああ、どうしてこんなことになってしまったのだろう。

どうしたらいいのだ、俺は。

死のうとしても、体がいうことを利かなくなる。

もう自分に逃げ場はないのか。

ああ神よ、お願いだ。もしいるのなら俺を殺してくれ。

ああ頼む。もしいるのなら、誰もここに来させないでくれ。

出来るなら、誰か俺を助けてくれ。

第二話 『わりこみ』ないしは『よごどり』

放課後の美術部。

俺は絵を描いていた。

最近はこうして放課後を過ごしている。

部室には他に誰もいない。

今日は、部の活動日ではないからだ。もっとも活動が個人の自由と言う、本当の意味で自主的な部活であるため、活動日でも出ない部員は少なくない。

今日は部室に入るのにも一苦労だった。

活動日ではない日は、自分で部活顧問の教員を見つけて鍵をあけるように頼まなければならぬ。今日はその顧問がなかなか見つからなかったのだ。

顧問には、たいして実績がある部活でもないため（こんな状況では当たり前だが）新任の教員が部活の当てられてた。

まだ学校に慣れられない顧問は、いつも消化しきれない色々な仕事に追われている。

顧問を探し廊下を歩いていると、黒めのスーツを着た若い女性が女子生徒たちに囲まれて談笑しているのを見つけた。

それを見て、俺は反射的に怒鳴りつけようとして息を吸い込んだ、
が結局は我慢した。

平静を装って近づく。

「先生」

俺はその若い女性を呼ぶ。

女性は俺の声が聞こえていないようだったが、談笑している女子生徒の一人が俺に気付いて顧問に知らせた。

「スバルくんが先生のコト、呼んでますよ」

その声を聞いてようやく女性が振り向く。

やや長めのパーマのかかった黒髪が揺れた。

「何かな、スバルくん。なにか先生に用？」

俺は頷く。

「美術部の鍵を開けて欲しくて」

しかし、女性からの返事はない。

なんだ？

なぜか、彼女は目を大きく見開いて停止していた。

「どうしたのスバルくん、その怪我!？」

大声で目の前で言われる。五月蠅い。

女子たちがその言葉に反応した。

「喧嘩したんだって。古田達と」

「えっ、一方的に殴られたっつて聞いたよ」

「それを止めようとして、ウツツィがぶち切れたんだよね」

口々に好きなことを言い始める女子たち。かなり、五月蠅い。

ちなみにウツツィはウツロギのことだ、鬱病の鬱から来てるらしく、

大半の女子はそう呼ぶ。てか、五月蠅い。

もちろんウツロギのアレは鬱病などと言ったものではない、そもそも

モアレは病気になると言うそういう人間らしさからは逸脱している

存在だろう。それはともかく、五月蠅い。

女子達は俺を無視して話し続ける、その様子を見て俺は呆れた。し

かも、五月蠅い。

まあ、どこもこんな風に噂してるんだろっけだな。まあ、五月蠅い。

その後、自分で直接この女性に説明をしなければ、この無駄話が終らないと判断した俺は、多くの言葉を労して、本来は不要な説明を
行い、貴重な時間が10分ほど過ぎた後ようやく事態が收拾した。

「と言うわけで、とりあえず美術室開けてもらえますか」
俺は疲れをこらえながらも、できるだけ平静を保って女性に言った。
結構、精神的に来る。

「うん、それじゃあ行くのか。……みんなまた明日ね」

女子生徒たちが「バイバイ、先生」と手を振って歩いていく。

それを確認した若い女性は美術室に向かって歩いていく。

俺はその女性に頷いて、後ろからついていくことにした。

既にわかりきっているだろうが、この察しの悪い女性が美術部顧問だ。部活の顧問はこの通り、教師になったばかりで俺たちと結構年が近い。

頼りなく役にも立たない。授業は生徒が教員の友達づらして騒ぐという、授業もまともに来ない有様だが、他の生徒たちの評判は悪くない。

学校なんて、実力や努力で人を判断しない連中ばかりだからな。みんな、見た目や話し方で判断してるんだろう。その上で、見た目や話し方を注意されたら「人間中身だろ、外見で判断するんじゃないよ」とうるさく騒ぐ。外見や話し方を直さないのは、実の所、それを中身より重視してる証拠だ。

結局、全員が外見を中身より重視してるってだけの話。

と言っても、この教員の中身がそれほど悪いわけでもない。ただ無能なだけである程度は善人と言える。世の中に害を為すのは、だいたい無能な善人の仕事だ。

「えらいねえ、スバル君は。神城先生が言ってたけど、朝もやってるんだって？」

それは顧問のあんたが把握するべきことだろう。

と思いつつも、普通に返事をする。

「ええ、まあ」

先生は感心したかのように何度も頷いた。

「絵、描くの好きなんだねえ」

別に好きだからしている、というわけではないのだけれど。そもそも

も俺は好きなことはあまりしない主義だ。

「……まあ、嫌いではないですけどね」

「元々好きなの？小さい頃から描いてるとか？」

だから、絵を描くのは好きじゃないって。

「高校（こく）に入る少し前ですね、描き始めたのは……だからかなりヘタなんですけど」

「それでも、1年生なのに偉いよね。他の皆は活動してもマンガのイラストとか描くばかりでさ。ちゃんとした絵は一人もやってないよ」

それは部としてはどうなんだろう。

それ以前に、あくまで美術部であって漫画研究部とかイラスト同好会などではないはず。

「それに活動日でも2、3年生来てない人が多いって言うのに、ほとんどちゃんと来てるし」

いいのか、先輩を差し置いて1年生に部室をほとんど独占されてる部って。

まあ、そんなことを気にする俺ではないんだが。

そういえば、部員に一人だけ毛色の違う奴がいたな。

「ちゃんと来ている人いるじゃないですか、たまに休みの日も来る人。一人だけ」

「2年生の金檻さんね、金檻さんは部員じゃないでしょ。なぜかいつも来てるけど」

部員じゃないのに来てる奴、そういう奴がいると噂には聞いたことがある。金檻がそうだったのか。

って言うか、奴は部員じゃなかったんかい。絶対に部員だと思ってたのだが。

……まあ、第一、俺は奴を人間を数えるときの勘定には入れたことないけどな。たまに美術室にいるどころか、大抵存在してるし。まあ、とにかくこの顧問は察しが悪い。

「人に聞いた話なんですけど、あの人、部長会議に美術部部长として

出席して、そのことに誰も違和感を覚えさせなかったって本当ですかね」

「さあ、先生来る前のことだから。私今年来たばかりだし」と言うことは、去年の話になるんだろう。噂が事実ならばだが。

ん、待てよ。となるとその金檻はまだ1年の時にそんなマネしたのか。

「金檻さんもだいたい1年生の頃から絵を描いているらしいから、その辺はスバルくんと同じだね」

「一緒にしないで下さい」

そんな風に話しているうちに美術室の前に着いた。

顧問は少々時間がかかって、不器用な手つきで鍵を開ける。

「それじゃあ、ガンバってね」

「顧問の先生なのにもう行くんですか？」

というか、生徒一人に任せておいて良いのか。しかも、一年だぞ。

「それはそうなんだけど、少し忙しくて」

廊下で女子生徒と談笑するのに忙しい、か。

「そうですね、それじゃあ先生も頑張ってください。生徒との交流とかも」

どうぞ、おしゃべりに励んでください。と言う皮肉のつもりなのだがこの顧問にはそれを察する能力はない。

「ええ、ありがとう」

顧問は笑顔で礼を言う。

(……今度こそ、怒鳴ってやろうか)

いや、落ち着け俺、賢者は他人の無能さを軽蔑の対象にしないんだぞ。

って、誰が賢者だ。そんなものになりたいと思ったことなど、一度もないわ！

いや、だから、落ち着け俺。

顧問は俺の心の内の葛藤に、当然気付くことなくその場を立ち去る。くそ、一応は教師なんだから、少しは生徒の言葉の裏を読んだらど

うだ。そんなだと教え子の気持ちがないがしろにして生きるはめになるぞ。

そう思いつつ、俺もさっさと顧問に背を向け美術室に入ってしまった。そんな面倒な過程を経て、今俺はこうして絵を描いている。

俺はため息をついた。

なんか、ストレスがたまる。

そうやって絵を描いていて30分程した頃のことだ。美術室の戸が開いた音を聞いた気がして、入り口に注目する。

まだ戸は開いていない。

だが、次の瞬間に勢いよく戸が開き、なんとなく身なりのいい女子と（他の女子と同じ制服を着ているはずなのにも関わらず、だ）が元気良く入ってきた。なんだか態度がでかい。

その女子が俺を指差して言う。

「ようやく見つけたわ、八賀谷くんでしょ」

その後ろに無言で立っている眼鏡をかけた感情に乏しそうな男子。つまり、そいつらは橋本とウツロギだった。

なんだ、いつたい。

俺は突然の予期せぬ訪問者に困惑する。

とりあえず、事態を把握する為に橋本に尋ねることにした。

「俺に何か用かな」

俺の言葉に反応したのか、橋本は髪をかき上げる。

「いや、用って程でもないんだけど。コイツが八賀谷くんに迷惑をかけたらしいから」

「かけてない」

ウツロギが感情を込めずに言った。

それを聞いた橋本は、ウツロギをにらみつける。

「アンタは黙ってなさい」

沈黙するウツロギ。

橋本は何事もなかったかのように、再び話を続けた。

「だから、コイツに謝らせようと思って
いや、別にウツロギに謝られても。」

そもそも悪いのはあのライオンヘアだ。

「別に謝る必要はないよ、実を言うと助かったぐらいだし」

俺はなんと言ったらいいかわからなかったが、いつものように考えてもいないことを口にする。

まあ、本当に実と言うものを言うんだったら、俺が仕留めたかったと言う所だろうが、さすがそれは口に出せない。

俺の言葉を聞いたウツロギが橋本に非難するかのように目を向ける。その視線を言葉にすれば「ほら、俺の言ったとおりだ」と言う感じになるだろう。

だが、橋本はそれを気にも留めない。

「いや、1対1の男同士の喧嘩に割り込むなんて男としてしちゃ駄目なことなんですよ」

どっから出てきたんだ、その知識は。

俺は言葉を濁す。

「いや、そうとも限らないかも」

橋本は1対1の喧嘩と言ったが、それは結果的にそう見えるだけであってあのままやってたら多分もう一人が手を出してきただろう。

幸いそれ以前に喧嘩は終わったが、本当は2対1だった。

そう冷静に考えれば、単純に考えて俺に勝ち目は薄かったことになる。

実際、本当に俺は助かったのかもしれない。

彼の余計な割り込みのお陰で。

なんというか、複雑な心境だな。

いや、きつと担任が入って来たろうからそんなにひどいことにはならなかっただろう。

そもそも、朝のホームルーム前にわざわざ喧嘩を仕掛けてくるだろうか。クラスメイトや担任に見られるのはあいつらにとってもあまり歓迎のできることはないはず。

と言うことは、最初から彼らに喧嘩をするつもりはなかったのかもしれない。俺の言葉で頭に血が上ったのか。考えてみれば、もう一人のほうの対応が遅かった気がする。

「ねえ、聞いてる？」

気が付くと目の前に橋本が腕を組んで立っていた。

「どうやら、ずっと俺を呼んでいたらしい。」

「ん、なに」

俺は今さらながらに返事をした。

橋本がこころなしか心配そうな声で俺に聞いた。

「だから、八賀谷くんはミノリのこと怒ってないのね」
「みのり？」

ああ、そういえばウツロギの名前は宇都木 ミノリだった気がする。ミノリね……今さら下の名前じゃやこしいな、それ。今すぐ改名しろよ、ウツロギに。

そんな自分の思考に呆れつつ俺は肩をすくめた、様々な意味を込めて。

「怒ってないよ」

「そう、ならいいや」

ずいぶんあっさりとして橋本が引き下がった。

なんだそれは。全く意味がわからない。

これはどういうことなんだ。

橋本は俺がウツロギを怒っているかもしれないと考えて、わざわざこいつを引っ張ってきて謝らせようとしたのか。

仮に俺がウツロギを怒っていたとして、ウツロギや橋本に何の影響が出るっていうんだ。

そもそも、こんなことをしてなんの意味がある。

突然、橋本が口を開く。

「そういえば、ちょっと聞きたいんだけどさ」

「なにかな」

「アンタさ、昼休みどこにいたの。結構探したんだけど」

昼休みからか、そりゃご苦労なことだ。

「屋上で昼飯食べてたよ」

橋本は顔をしかめる。

「なに言ってるんの、屋上は鍵掛かっているはずでしょう。不良の溜まり場になってるから、しばらく鍵をか掛けとくって先生言ってたけど」

その通り、最近はずっと鍵が掛かっている。それは昼休みも例外じゃない。

さらに言うなら、掛けておくように教員たちに訴えたのは俺達だった。正確には俺達を含んだ生徒達であり、より正確に言うのなら俺達によって訴えるように先導された生徒達だった。

「掛かってなかったのさ、たまたま閉め忘れたみたいだね。今はもう掛かっているだろうけど」

橋本は納得のいかない顔をしたが、追求はしてこなかった。

そのまま俺の描いていた絵を覗き込む。

「結構、絵とか上手いなだね」

その絵はまだ、鉛筆で下書きしただけのものだった。俺からすれば、子供の落書きと変わらないものに過ぎない。

そんなものを褒められても嬉しくはないし、世辞は嫌いな部類なので僅かに腹立たしさが勝る。が、表面上は平然として見せた。

「まだ上手いかどうかわからないよ、色を塗らないといけないから結論はその後だね」

だいたい下書きの時点で見れるレベル以下だったら問題あるだろう、絵を描くということは文字通り、描ききるまでを言う。

まあ、もともと興味はたいしてなかったのだろう。

「ふうん」と納得したのかしてないのか、よくわからないような返事を橋本はした。

「で、なんで美術室誰もいないの」

「今日、部活休みだし」

「なら、なんでやってんの」

「するのは自由だから」

それを聞いて橋本はまた「ふうん」と返事をする。
なんなんだ、いったい。

橋本は大きな声でウツロギに話しかけた。

「ミノリ、アンタもなんか部活入ったらいいんじゃないの。ここ、部活するの自由らしいから丁度良いかもよ」

ウツロギはボーっと戸の近くに腕組をして立っている。橋本の言葉を聞いているのか聞いていないのかは全くわからない。

「それじゃあ、そろそろ行くかな。なんか邪魔してゴメンね」

橋本はウツロギを連れて去っていく。

とたんに静かになる美術室。

……なにしに来たんだ、あいつら。

形ばかりの美術部（後書き）

主人公は基本的に人間が嫌いなようです、人を見るときにまず欠点を見るタイプ……と分析されそうな人間。少なくとも、人格者とは思われないでしょう。

ただし、彼が何を考えていようが外から見ただけではわかりません。フツーは。

く 藤咲マミの視点 5 (前書き)

修正：『藤咲ミノリ』を『藤咲マミ』に修正します。本当は下の名前で色々と考えていた話があったのですが、残念ですけど本筋の邪魔になりそうなので。

私は自宅に、住んでいるマンションに帰宅した。体のだるさを覚えながらもエレベータのボタンを押す、すぐに3階のボタンが点灯した。

すぐに開いたエレベータに乗る。

体がだるいと言っても、別に身体が疲労するようなことをしたわけじゃない。きつと、精神的に疲れたんだろう。

私が学校を出るのは他の生徒よりも遅い。

それは、私が他の生徒と帰宅時間を合わせないようにしているものもあるが、なによりも放課後になると担任の先生との話し合いが待っているからだ。

「なにかクラスで不満なことでもあるのか」

「イジメとか、からかわれたりするなら先生が力になるぞ」

「勇気を出してみんなと勉強してみないか」

「せめて何か理由があるなら言ってみよう」

私はため息をつく。

不満や理由があるのなら私が教えて欲しいくらいだ。

エレベータから出た私は自分の部屋の前まで歩いていく。

誰も人は、『何事にも理由があるものだ』と思っている。

中には、「いや、私は思っていないよ」って言う人もいるけれど、じやあそういう人に「誰かに行動の理由を聞いたことは一度もないの？」と聞くと、それを「ない」と否定することが出来る人はまずいない。

相手に理由があることでみんな安心しようとする。納得して、区切りを付けたがる。

私もそうだ。

だから自分の行動を色々な風に説明しようとして考える。

でも、答えは出ないし出たところで何も解決しない。理由がわかっ

たからって、解決できる……なんてことは現実にはほとんどない。
312号室、その横には藤咲の文字。

自分の部屋の前に着いた私は、鞆から鍵を探す。
もちろんそれは、取り出しやすいところに入れてあるのですぐみつかり、すぐに鍵を開けることができた。

ドアを開き、部屋の中に入る。

そして、ドアを背中であらめた。

自分の家に帰ってきたという安心感からか、肩から力が抜ける。
「疲れた」

自分の部屋の前に来てからの第一声はそれだった。

適当に靴を足でほうり投げるようにして脱いで、そのまま家の奥へと入っていく。

居間へのドアを片手で開けた。

「ただいま」

私は入るときにそう言った。
だけど、返事はない。

誰もいないからだ。

ああ、なんだ。私は彼を独りだと思ったけど、そうじゃない。
独りなのは私だ。

私はそのまま台所に向かう。手洗い、うがいを済ましてすぐに夕食の準備に取り掛かった。

今日はひとり分だけ作ればいい。

うちの母親と長女

鍵は掛かっていない。

俺は玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

母の声が家の奥、恐らくはキッチンから聞こえてくる。

たいして大きな声で言ったつもりもないんだが、うちの母はしっかりとこちらの声が聞こえているらしい。

この間、あまりにも母が俺の言葉を聞き取るのでそれを疑問に思い、何か理由があるのではないかと思つて本人に聞いてみた。そうしたら母親は笑つてこう言つていた。

「母親つて言うのはね、自分の子どものことを何よりも大事に考えてるのよ。だから子どもの言葉を聞き取るために、常に気を張つてるんだから」

それを聞いて俺は感動した。

すごいな、母親つて言うのは。どこもそうなのだろうか。

俺は鞆をその辺にほおり投げ、洗面所で手洗いとうがいを済まして朝のように顔を洗う。

そして、歯もみがく。

階段を誰かが降りてくる音。

この音は美弦だ。

もし、これが父親だったらもつと重たい音がするし、曜日、時間帯からしてもいつも通りならまだ帰つてこないはずだ。

降りてきた影を見て、やはり美弦だったと確認する。

美弦はどうやら、俺が帰つてきたのを知つて一階に降りてきたらしい。そのまま歩いてきた美弦は俺の背後に立ち、俺を見て笑つた。

「おかえり、いつもより早いね。なんかあったの？」

「まあね」

「どうせもつすぐ夕食なんだからさ、わざわざ歯を磨くなんてよしなよ。二度手間でしょ」

「いいんだよ、歯の健康のために磨いているわけじゃないんだから」呆れたようにして肩で息を吐く美弦。

「じゃあ、なんのためにしてるのよ」

俺は美弦の言葉を無視して、口をゆすいだ。やや水が染みる。

美弦がムツとした様子で近づいてきた。文句でも言うのか、蹴っ飛ばすのかそのつもりだったんだろう。

しかし、その考えはすぐさま忘れ去られることになる。

なぜなら、俺の絆創膏とアザだらけの顔を見たからだ。

最初は痛みもたいしたことはなかったし、アザもそれほどなかった。だが時間が経つにつれ少しずつ痛みが増し、あちこちにアザが浮き出てきた。それにだんだん腫れてきている気がする。

我ながらよほどひどいぶつけ方をしたのだろう。と感心してしまう。

美弦はそんな俺を見て大きな声で言った。

「どうしたの、その怪我！」

「んー、一言で言えばケンカだよ」

「コウが殴り合い？」

「いや、どちらかと言えば一方的に殴られただけ」

それを聞いて、顔を痛そうに歪める美弦。

目の前まで歩いてきて、俺の顔に手を伸ばした。

「すごく痛そう、大丈夫なの？」

心配そうな美弦の顔を見て、俺は笑いかけるようにして答える。

「別にそこまで痛くはないよ、大丈夫」

怪我自体は本当にたいしたことはない、だがさっさと冷やした方が良く俺は判断して自主的に部活を早めに切り上げてきたのだった。俺は美弦の横を通って、リビングに歩いていく。

それを見て美弦は俺の後を追った。

「本当に大丈夫なの？冷やしたりして横になった方が良くないんじゃない？」

余計なお世話だ。

「本当に大丈夫だよ。冷やすつもりはあるけど、それより食事が先だね」

そのままリビングに入ると、もう夕食の用意は出来ていた。

美弦がキッチンでまだ料理をしている母に向かって、声をかける。

「お母さん、聞いてよ。コウったら学校でいじめられたんだって。

ほら、あざだらけ」

いやいや、そんな記憶はないな。いじめなんて。

そうは思っても、口を挟むような空気ではない。

美弦の言葉を聞いた母は、スープの味見をしながら平然と返した。

「知ってる、学校から電話きたしね」

母は鍋を持ち上げて、こちらに向かってくる。

電話……って、どんな連絡が行ったんだか。

鍋をテーブル置いた母は、俺たちを見回した。

「ほら、なにしてるの。少し早めに夕食にするから席に着きなさい」

俺はいつも通り。美弦はしぶしぶ席に着く。

席に着いた美弦は、すぐに母に文句を言い始めた。

「お母さん、どうして私には言ってくれなかったの。私が帰ってきた頃には知ってたんでしょ」

「もちろんよ」

母は「いただきます」と手の平をそろえて言った、俺と美弦もそれ

にならう。

そして、母は自分の分のスープをうつわに注ぎながら冷静に言葉を続ける。

「でも私は、本人でいない前であまり人の話はしないことにしてる

の。家に帰ったら家族全員で『彼氏できたんでしょ』って聞いてき

たら嫌でしょう？」

美弦は顔をしかめる。

「それは確かに嫌だけど、それとは話が別なんじゃない？家族の身に起こったことぐらい知らせてくれたっていいでしょう」

「それが別かどうかを判断するのは、あなたじゃなくてコウ君。コウ君が嫌なら話すのはフェアじゃない」

「でも、コウは私に話してくれたよ」

「母さんは本人に直接確認をとるべきだと言ってるんです。私の言ってることがわからないあなたじゃないでしょう、いい加減に八つ当たりは止めなさい」

美弦は母の言葉に口をつぐんだ。

母の言い方はあくまで淡々としていて、声を荒げたり余計な感情を含ませることがない。

美弦も一般的な同年代の女子に比べれば、論理的で思慮深い部類に入るが母と比べれば文字通り子どもと大人ほど違う。

俺は食事に手を付け始めた。

しかし母の言う、『八つ当たり』とはどういうことだろう。

俺は眉間にしわを寄せる。

単に口の中の傷に食事が染みただけだが、美弦が不安そうな顔で俺の方を見た。

あまり顔に出さないほうが良さそうだな、余計な心配をかける気はない。

路地裏にて

夜もふけた頃、白衣を着た一人の男が路地裏に向かって歩き出す。ゆっくりとした足取りで。

男性はふと空を見上げた。

曇っていて夜にしては明るめの空。雲が深く今日は月を見れそうにはない。

その時、路地裏の奥、大きめのゴミ箱の影から浮浪者のような男が出てきた。

暗くてよく見えないが、所々黒く汚れた服を着ていて顔がやつれているような雰囲気ではある。まるで病人だ。

白衣の男が、その浮浪者のような男に語りかける。

「どうだい、ミマタ。気分は」

そのやつれた男、ミマタは答えない。

「そろそろ新しい獲物を狩ってほしいな。もう餌が足りなくてね、君も腹ペコだろうし」

やはり、ミマタは答えない。

男はそれを見て、わざとらしく肩をすくめる。

そして右側の眉だけを下げて非左右対称な表情をした。

「答えないのは君の自由だよ、逆に言えばそれぐらいの自由しか君にはないんだからね。それぐらいは許すさ」

話しながら男はミマタに近づいていく。

「君が逆らうなんてありえないことだけど、君が『嫌だ』と言うのなら好きなようにしてもいい。でも、何かをしないことにもそれ相應の責任が伴う、行動するのと同じようにね」

白衣の男は「わかるだろ」となれなれしくミマタに語りかけた。

ミマタは何も反応しようとしなない。

「君が従うことによる対価はもう支払い続けているよ、現在進行形でね。だから、これは対等な取引だ。こちらは研究材料とデータが

手に入り、君は自分の命ともう一人の命を守ることが出来る」
ミマタはその言葉にとつとつ口を開き、言葉を返そうとした。
が、身体が震えいうことを聞かなくなる。

結局、出てきた言葉はミマタが言おうとしたこととは全く別の話だ
った。

「邪魔をする人間がいる」

その言葉に男は頷く。

「ああ、わかっている。それは調査中だ」

男はミマタの肩をたたいて笑いかけた。

「すぐに見つかるさ、心当たりがないわけではない」

その男の笑顔の中に眼は輝いてない。

ただ、底知れない暗さを秘めていた。

優しい嘘と欺瞞（前書き）

主人公に限らず、人は嘘を吐きます。

いつだって、フィクションでもノンフィクションでもです。

優しい嘘と欺瞞

翌日の朝、あくびをかみ殺して歩き出す。

今日も、美弦を送るために学校を早く出た。

美弦が俺の顔を覗き込む。

「なんか、疲れてない？まだ、寝ていたほうが……」

「言ったら、大丈夫」

疲れていないわけでもない、昨日は色々あった。

けど、ここで遅れるわけには行かなかった。と言っても学校には遅刻しないだろうけど。

「でも」

「いいから、送らせてほしいな。自分の体のことはわかってる、無理はしてない」

それでも、美弦は不安そうにこちらを見ている。

これは当たり前まだ、無理をしない人間はいない。好きなことに関しては特にそうだろう。人間はこういう時、本気で自分にも他人にも嘘をつく。

美弦もそれは知っているから俺の言うことを、いや俺に限らず他人の言うことを鵜呑みにしたりはしない。

基本的に安っぽい嘘には騙されないし、間違っている所があればすぐには指摘せず、考えながらより効果的な言い回しに変えたりする。これは、美弦の他の女子より大きく優れている所ではある。それは俺も認めている。

でも、それが朝からこう言った状況を作り出しているのだ。ずっと朝食を食べている間もこんな感じで、時々にも言い返せないぐらいに的確なことを言う。

そうは言っても美弦は詰めが甘いので、今のところはなんとか言葉を濁すことで逃げ切れてはいる。が、そろそろ面倒だな。

まあ仕方ないか。

俺は真剣な表情で美弦を見る。そして、口を開いた。

「美弦、俺が駅まで送るのは嫌なのか」

これは問題のすり替えだ、我ながらあまり好ましくはない。

美弦はあわてて首を横に振る。

「そんなことないよ、嬉しいくらい」

「俺もだ。だから、少しぐらい無理をさせて欲しい。その方が俺は元気になるから」

俺がそう言つと、美弦はうつむいてしまった。

これで静かになったな。

俺の言葉は嘘ではない。

それに、俺の言葉をどう解釈したかは美弦の自由だ。

美弦は基本的には安っぽい嘘には騙されない、それはあくまで他人の嘘にはと言の意味だ。

「人は騙されたがつている、そしてまず自分自身に騙される」とは誰の言葉だったろうか。いや、今作っただけだよね。

そのまま、沈黙したまま俺達は歩いていく。

もしかしたら俺は冷たい人間なのかもしれない。

ふと、俺はこういうのも悪くないと思ってしまった。

どういう意味で「悪くない」なのかはわからないが、なんとなくその発想が冷たいような気がした。

何に対して冷たいと思ったのかも、よくわからない。

そろそろ駅だ。

突然、美弦はこちらを見ずに「それじゃあ、行くね」とそう言った。

いつも別れる場所より、まだ距離があるのにそのまま彼女は走っていきこうとする。

「待って」

俺は無意識のうちに声をかけていた。

美弦は立ち止まる。

そのまま、俺の口は「ごめん」と言いそうになったがその言葉を俺は飲み込む。

頭の中で俺は考え直し、ようやく口を開く。

「ありがとう」

美弦はゆっくり振り向く。

笑顔だった。

だけど、俺はその笑顔が無理やり浮かべているような気がして、その姿を自分など問題にならないくらいに痛々しいと、そう思った。

「どういたしまして」

そう言っつて、美弦は今度こそ駅に向かって走り出していく。最近、俺は自分がよくわからない。

*

駐車場に着いた俺は周囲を見渡す。

誰もいないようだ。

いつもは、この辺で待ってくれているはず。

そのまま歩いて行こうとした時、ふと後ろから呼び止められたような気がしていた。

すぐに振り向く。

駐車場の外、入り口の前に由枝先生がいた。

長い髪が揺れる。

「気付くのがいつもより遅いのね、私の勝ちかな」

俺はため息をつく。

「でも、声をかける前には気付きましたよ」

「でも、声をかけようとする前には気付かなかった。そうでしょう」
俺は沈黙する。

先生は俺の横を通り過ぎる。

紅いピアスが光った。

先生はゆっくりと静かに駐車場を進んでいく。

まるで、舞台の上で演技でもしているかのようにだった
ふと立ち止まる。

髪を揺らして先生は俺に顔を向けた。

「どうしたの、コウ君。今日は乗らないの？」

俺ははっと気が付いて、顔を隠すようにして歩き出す。

先生の顔を見ることが、なぜか出来なかった。

車の鍵を開けた先生が乗り込んだのを確認して、俺も乗りこむ。

そして、シートベルトを締めた。

「なんだか、今日はピリピリしてるのね」

先生はエンジンをかけながら言う。

俺は首をかしげた。

「そうですか？」

なるべく、先生の方を見ないようにして話す。先生の顔を見れない
ものもあるが、出来るだけ顔を見られたくないと言う気持ちもあった。

「自分が疲れてるのは自覚してみたたいね」

車がバツクしていく。

「なにか出来ないことでもあったのか、言えないことでもあったの
かはわからないけどね。なんだか、つらそう」

「……そんなことは」

あるのかもしれない。

出来ないことだらけだ、いつも。

「ちよつと限界でも来た？」

先生は軽く冗談めかすようにして聞いてきた。

横目で気づかれないようにして見てみると、先生は笑わずに前を見
ている。

俺は軽く、ため息だと思われぬようにゆっくりと息を吐き出した。

「限界なんてそうそう来るものじゃないですよ。いつものことです、
定期的に疲れが出るのは」

車は駐車場を出た。

エンジン音だけが響く車内。

うちの車より車の振動が大きい気がする。

景色が流れていく。

流れていく人々、車、木々、道路。そして時間。

人生は流れていく、水のように……そう、指の間をすすると。

……嫌だな、そんなつかみ所のない人生

そうやってくだらない思考をして、自分の気持ちを落ち着けていく。だんだんと景色の流れが止まっていく。

信号待ちだ。

ふと違和感を覚える、先生は俺の顔の怪我を指摘していない。

その瞬間、何となく居心地が悪くなった。

人の中には事情を聞かないことが優しさと思う人も居る、相手のことを思いやることだと思う人もいる。でも、それは状況や人によって大きく違うものだ。

『人間は人それぞれ』だとそう思っている人は、本当はその通りに行動していない。

なぜなら、それは『人それぞれ』と言う自分の考えを押しつけているに過ぎないから。『人それぞれ』『相手の問題』と言う名目で他人を無視しているに他ならないから。

俺はそういう時、ただ気持ち悪くなる。

ただ気持ち悪くて、吐き気がこみ上げてくる。

俺がそれを我慢して口を押さえていると、先生が俺に話しかけてきた。

「安心して、私はあなたに無関心じゃない。あなたは私にとって、とても大切な存在だから」

先生がなんでもないことのように言う。

俺は驚いて先生の顔を見る。

「それを指摘しないのは、あなたがどうでもいいからじゃない。あなたがその怪我のことをどうでもいいと思っているから、だから言わなかったの」

先生が俺の方を見て笑った。

とても、綺麗な笑顔だった。

「だから、安心して」

いきなり身体が楽になる。

また、俺は先生の顔が見れなくなって、どうしようもなくなくなって両手で顔を隠してうつむく。

何かを言おうとするが言葉が出てこない。

俺がようやく言えた言葉は「どうして」の一言だけだった。

そんなの伝わるわけがない。

でも、先生は答えた。

「それはコウ君に自分で考えて欲しいな」

先生は一息ついて「だから」と続ける。

嬉しそうに先生は続ける。

「答えは、言わない」

目頭が、かあつと熱くなる。

でも、涙は出ない。

俺は泣かないから。

泣けないから。

「先生は」

「ん？」

今、きつと先生の髪は揺れただろう、と顔を隠しながら思った。先生は俺に向かって首を傾げたと思う、耳を傾ける為に。

言葉が出ない。

そのまま、沈黙する。

静かな車内、いつもの俺はこの静けさが良いと思うんだろう。

でも、このままじゃ駄目だ。

俺は思い切って言葉にする。

「先生は透明ですね」

また俺は息を吐き出した、それを隠す余裕はもうない。

やっぱり駄目だ、俺は。

「コウ君」

先生の声が聞こえる。

「ありがとう」

先生の声が初めて平等でないものに感じた。言葉の奥に秘められた
不平等な優しさ、それが先生から伝わってきた。

でも、俺はなにも先生に返せない。

先生は今笑ったんだろうな、さつきよりも綺麗な笑顔で。

そう俺は思った。

顔を上げられないのが残念だった。

優しい嘘と欺瞞（後書き）

年上好きなのか年下好きなのか、節操なしなのか。
主人公を見ていると「貴様など刺されてしまえ」とよく思います。

今日も私は他の生徒よりも早く学校に来た。

でも若干遅めに、ほんの少しだけいつもより遅れて学校に着くように心がけた。

学校前の公園をいつものように駆け足で通り過ぎようとして、一瞬考え直す。

もっと遅れて行った方が良くないだろうか。

いや、遅れすぎかもしれない。

そんな風に考えながら、私は急いだりゆっくり歩いたりを繰り返していた。

私はめずらしく周囲の人間の視線などを気にしたりはしなかった。

そんな事をしているうちに、もう校門の前に着いてしまった。

学校に付いている大きな時計を見ると、時間帯は丁度良い感じだ。でも、待てよ。

彼がいつもこの時間に登校してきているとは限らないのでは？

昨日だけ偶然早かった可能性もある。

だとしたら、私はなにを一人でしているのだろう。

馬鹿みたいだ。

私は自己嫌悪に陥ってため息をつく。

最近クセになってきているかも、ため息。

「ため息つくと、知らない人からいきなり声をかけられるよ」

笑いの混じった声を私は後からかけられた。

私は驚いて振り向く。

八賀谷君だった。

彼は口の左端にバンソウコウをつけて、しゃべりにくそうにしていた。

「…………今みたいに」

彼は微笑んでいるような目で私を見る。

顔自体は無表情に近いのが不思議な感じだ。

彼の言葉が笑えない冗談だと思った私は、とりあえず笑おうと努力した。けどそれに失敗する。

たぶん私はそのせいで変な顔になってしまった、と思う。

焦った私は、彼に気付かれない程度に顔をそむけた。

「八賀谷君は知らない人じゃないと思うけど」

なるべく普通の返答に聞こえるように声を出す。私の普通の声ってこんな感じだったろうか。

努力して出した私の言葉に、もしかしたら変になってしまった私の顔に対してかもしれないけど、とにかく彼は普通に笑った。

誰もがするような、よくある感じの笑み。

「そうかも」

それから、彼は話してこなくなった。

なぜか空気が痛い。

実は、私より八賀谷君の方が痛く感じているかもしれないけど。

話題に困った私は、とりあえず彼に質問をすることにした。気になつていたこともあるので、丁度良いのかもしれない。

「八賀谷君はさ、いつもこんなに早いのか？」

我ながらこの質問は日本語として妙だと思う。

八賀谷君は気にしていないようだから、別にいい。

「そんなに早くないよ、君も来てるじゃない」

私はそう彼に言われて困ってしまった、実はその矛盾は私も気付いたことだったから」。

その様子をみて、彼が笑う。

なんだ、また冗談だったのか。困って損したかも。

彼は笑いながら言葉を言い直した。

「うーん、時間帯を気にしてきてるわけじゃないけど、最近はいつもこの時間かな」

「じゃあ、ホームルームまでずっと教室にいるの？」

「いや、美術室で絵を描いてる。短い間だけ」

そういつて彼は玄関に向かって歩き出す。
私もあわてて歩き出した。

彼はなんと言うか、時々自分以外に人がいないかのように振舞う。
昨日、カウンセリಂಗールームでもそうだった。

勝手に新聞なんか見たりして、これは私のことを気にしてないって
ことなのだろうか。

なんか、ムカムカする。

玄関に着いた。

彼は上靴を取り出して履きかえようとする。私もそれに倣う。

少しぐらい私の様子を気にしてもいいと思う。

と私が心の中で呟いたその時、靴を履き替えた彼が私に対して口を
開いた。

ただし、私の顔は見ずに。

「藤咲さんはこのあとどうするの」

私の呟きが聞こえたのだろうか。もしかして、私は口に出していた？
いや、そんなはずはない。そう思いなおして私は彼の言葉に答える。

「……たぶん、保健室に行って勉強かな」

「そう」と彼は呟いた、一呼吸おいて彼は言葉を続ける。

「じゃあ、暇なのかな」

どうなのだろう。

私は暇なんだろうか。

そう言われたら、忙しくはないのだから暇なのかな、と言う気がし
てくる。

「……たぶんそうだと思う」

私の微妙な返事に八賀谷君は頷く。

そうして、なんでもないようなことのように言った。

「じゃあさ、暇つぶしに美術室来ない？」

私は返事をしない。

彼も何も言っていない。

ひょっとして、これも冗談なんだろうか。

なんでもない積み重ね

教室に前まで戻ると、戸が開けっ放しになっていた。

いつも不思議に思うんだけど、教室に戸って必要なんだろうか。失くしてしまった方が非常時にも助かると思う。

荷物を盗まれないように鍵をかけるためにある、と言う考え方も出来るか？

でも、貴重品なんてものは盗まれないように持ち歩くものだ。いや、持ち歩こうと思う程の物だから貴重品なんだろう。

と言うか、貴重品を持ち歩かない人間はなにを考えているんだろう。そこまで他人を信用しているのか、それとも何も考えていないのか。どちらにしたって、それなら盗まれたって文句は言えまい。自業自得だ。

きつと、そういう奴はるくに何も考えないで生きてるんだろう。

「なに、教室の前でぬぼーっとしてんだよ。寝てんのか？」

そう、教室の前でぬぼーっと寝ているような奴に違いない。

……ぬぼー？

俺は声のした方向へと顔を向ける。

「あれ、登じゃん。どうしたの？」

「そう言うお前こそ、どうしたんだ」

俺がどうしたって？

そんなの決まってるだろう。

「教室の戸の存在意義について考えていたんだけど」

「そんなことはいいからさっさと教室に入ってくれよ」

ため息混じりの登の言葉にとりあえず俺は従った。って言うか、その馬鹿を見るような目をやめる、この馬鹿。

教室に入るといつものようにあちこちから生徒の話し声が聞こえてくる。

芸能人やバイト先、気に入らない教師の言動、流行っているゲーム

ソフト、そして最近話題の連続猟奇殺人。そんなくだらない話ばかりが重なり合って、クラスメイト達の話し声という一つのBGMとなっているようだった。

あまり聴いていたくないBGMだ。

全ての綺麗な色を混ぜると汚い茶色のようなものになるが、なぜ全ての汚い色を混ぜても同じ色になるんだろうか？

そんなくだらない思考をしつつも、俺は無意識のうちに自分の席に向かっている。

俺を追うかのように教室に入った登は、今では俺に視線を向けることもなく自分の席に座って他の男子生徒と談笑している。

さっき俺に声をかけてきたのが、まるで嘘のようだ。

俺はその光景に無関心に自分の席に向かう。

実は俺達は、人目の付く所では他の生徒に余計なことを言われないうちに、また特別仲が良いと思われないうちに、わざわざ教室で呼び止めて話すことはしないようにしている。

今みたいに時々登はルールを平然と破るが、登はクラスメイトほぼ全員と積極的に話すような人間なので基本的にはあえて放っておいてやっている。

それでも、気をつけなければならない。他の一般生徒や教師に俺達をグループとして数えられるのは、あまり都合が良いことではない。俺達の数多くのアライバイ作は、真面目を装っているからだけが理由ではなく（装っている部分を差し引いても、他の生徒よりは真面目な部類だろうけど）、たいして仲の良くない人間がつるむはずはない、という思い込みがあるから成功するのだ。

日頃からそういったことに気をつけているからこそ、今のところ何が起きてても、彼らではなく、あの真面目な彼と彼と彼がやると思えない。と言った認識が第三者からなされるのである。

その事実を知っているのは、俺達に敵対した事件の当事者達だけだ。『日々の積み重ねが人生をつくる』と言う言葉もある。『ローマは一日にして成らず』でもいい。世の中の連中は大体そう思ってるん

だろうし、その考え方の正しさ、有効性は疑うまでもない。

だが、ま、自分で言っておいてなんだけど、この格言に関して言えば、あえて登の言葉を借りて「そんな言葉はクソ食らえ」と言っておこう。

努力と研鑽を積み重ねたからって、悪事が出来る人生なんてやだ。

……ならすんなよ、俺。

「おはよー、スバル」

隣の席の佐々木が妙なイントネーションのある声で挨拶をしてきた。顔を見るといつもより若干、化粧が濃い目かもしれない。

「おはよう、佐々木さん」

俺は挨拶を返して席に座る。

「ねえ、怪我はもう大丈夫なの？」

佐々木は俺に話を続ける。

底抜けに明るい声だな。

いつもならそれが癪に障るところなんだろうけど、なぜか今の俺は全く気にもならない。

「うん、全然大丈夫。早めに保健室で手当てできたから腫れも少ないし。佐々木さんがかばってくれたお陰だよ」

全然大丈夫、というのは日本語としては間違っているらしいが、生徒と同士での日常会話では使った方が会話が弾みやすい。だから、会話で使っても全然大丈夫。

「そっかあ……なんか、スバルさ。今日、機嫌むちゃくちゃ良い？」

佐々木が語尾上がりの発音で俺に尋ねる。

機嫌よくない、それは「機嫌がいいよね」ときいているのか。それとも、「機嫌がよくないね」と聞いているのか。イントネーションだけで左右されるので曖昧だ。なんとなく、発音的に前者のような気がするが決め付けはよくない。

「自分じゃよくわからないな」

俺は曖昧な返事で言葉を濁すことにした。

その俺の言葉に「そうなんだあ、まあそういうものかもね」と佐々木も適当に返事を返して、おしゃべりを続ける。

「前から思ってたんだけどさあ、佐々木さんじゃなくてカナエって呼び捨てで良いよ。みんなそう呼んでるし」

カナエ？

ああ、そういえば佐々木の名前はカナエだったか。どうも人の名前は憶えづらい、特にどうでもいい人間に関しては。

と言うか、みんなそう呼んでるってどこのみんなだよ。お前の友達、特に女子はカナちゃんと呼んでいた気がするぞ。

とにかく俺は相手に話を合わせる。

「女の子に呼び捨てはしづらないな。カナエさん、じゃだめかな」

「えー、よりにもよってカナエさん？」

わざとらしく佐々木が声を上げる。

俺は意図的に困ったような顔をした。本当はこのまま冗談みたいに持っていくのがベストだが、その方向性は俺のクラスでのイメージとはほんの少しずれている。

「いやかな」

「いやじゃないけどさあ。なんて言うか、違和感あるよ」

そりゃそうだ、後輩とかならまだしも同級生にさん付けされるなんてぞっとする。正直な話、する方もごめんだ。

「でも、呼び捨ては照れくさいし」

いや、全く思ってもないけどな。そんなことは。

それを聞いて佐々木は「うーん」とわざとらしく腕を組んで考え込む。そんなにこの話題は重要なことだろうか。

俺は表面上は笑って話を続ける。

「じゃあ、カナエちゃん」

「カナエちゃんかあ、それもありが」

なにが、どうあるんだ。

「そういえば、これ聞いてみてよ」

そう言っただけで突然、佐々木が携帯電話を取り出す。全体的にピンク色

に染まっただけで、可愛いのかなんなのかわからないストラップが大量についていた。

……使いにくくないか？

「ほら、早く」

佐々木が携帯電話のボタンを押してから差し出した。

とりあえず俺は頷いて、携帯電話を受け取り耳に当てる。

それを聞いた俺は首を傾げた。

なんだ、これ。

見ると、佐々木が楽しそうに目を細めて俺を見ている。

「どう、ちゃんと聞こえた？」

「そりゃね。ねえ、これはなんなの」

俺が尋ねると、佐々木は声を弾ませて説明する。

と、そのまま無駄話を続けていると、担任が教室に入ってきた。いつものように眠そうな顔。

これで無駄話は中断だ。

佐々木はあからさまに不満そうな顔をして、席にきちんと座りなおす。

ここでは佐々木みたいな女子でもそれなりの態度は取る。これでも一応、進学校だ。とらないのは馬鹿を通り越して真性の愚者だけだろう、あのライオンヘアですらそうするんだからな。

俺はふと気付いて、周囲を見回す。

教室にライオンヘアがない。

*

「気付くの遅っ！」

登はメロンパンをかじりながらそう言った。

ここは学校の屋上、そこでまた俺達は昼食を食べている。

「そうかな、俺アイツのことそんなに気にしてないし」

他人が一人いないぐらい気付かなくても不思議ではない。

「昨日、喧嘩した相手ぐらいチエックしようよ」

今度は篤史が呆れたように口を開く。

俺はため息をつく。

「そんなのもう終わった話だろ」

と思っても俺は彼らに言う気はなかった。どうせ2対1の口げんかには勝てないんだから、何も言わないのが得策だ。

そうしたら、今度は逆に俺がなにか諦めが入った表情でため息をつかれた。それも二人分。

「ま、コウだからな」

「そうだね、コウだからね」

二人は互いに顔を見合って頷いた。

なにも余計なことを言われたくないのが俺の望みだった。だから彼らが非難してこなくなったのは、むしろ俺にとって希望通りのはずだ。

だが、逆に一番余計な一言を言われた気がして腹が立つ。

「どういう意味だよ、それは」

俺は彼らを睨みつけながら聞く。実は、その言葉に返ってくる反応は大体予想できるので、わざわざ聞くこともないのだが俺はなぜか聞いてしまった。無駄に。

登は牛乳パックに差し込んだストローを口に含む、そしてそのままろくに口も開けずに器用に返事をした。

「どういう意味もなにも、そのままの意味」

篤史は新しいパンの袋、『産地直送どんぐりパン』と書かれた袋を開ける。

「世の中にはどうしようもないことがある、ってことだよな」

そのまま二人は食事を続ける。

俺は大してお腹が空いていないので、購買のパンに手をつけることはない。

「なんだかお前らの言葉を聞いてると、まるで俺がどうしようもない人間と言っているように聞こえるんだが」

その言葉を聞いて彼らは二人揃って肩をすくめた。この肩をすくめるのは俺の真似であって、要するに俺に対するあてつけた。本気で俺に喧嘩売ってるのか、こいつら。

冷静に考えろ、これ以上話しても時間と思考の無駄だ。

今、俺に必要なのは事実確認だ。そう頭の中で唱えて思考を整理する。

「……それで、なんでライオンヘアが休みなんだい？」

そう、最初から元はといえばこの話題だ。

二人は食事を一時的に止めた。そして、ほぼ同時に笑みを浮かべる。

「さあ、事故つてヤツじゃない？」

「ちなみに休みなのは古田だけじゃない、西川もだ」

俺は彼らの言葉を聞いて、ようやく悟った。なんだ、こいつらそれを聞いて欲しかったのか。素直にそういえばいいのに。

俺はわざとらしく驚いたフリをする。

「へえ、事故ね。どんな事故だったんだろうな、想像も付かないけど」

二人は愉快そうに語り始めた。

「そうだね、あてずっぽうだけどさあ。トイレの個室とかで起きた気がするな」

「俺も適当に思いついたただけなんだけどな。あいつら昨日の放課後、もしかしたらどこか公園のトイレに入ったり出てこなかったかもな」

「それが万一本当だとしたら、かなり不幸な事故だね」

「そうだな、かなり不幸な事故だな。みんな同情してくれるさ、発覚すればな」

俺は頭の中で、それは一般に事故ではなく事件と言うな、と彼らにそう言った。

彼らの語る様子を俺は他人事のように見る。一見、俺が話に興味がないか退屈しているかのように見えるだろうが、内心驚きっぱなしだ。

いや、それどころかある意味で恐怖すら感じている。

昨日の昼に何気なく言ったことをその日のうちに実行して、今では何事もなかったかのように笑っている。これは、イカレてるんか言いやうがない。

だけど、同時にそれを面白いとも思ってしまう自分がいた。

トイレから出さないようにしたのか、それとも出れないようにしたのか。どっちなんだろうな。この両者の違いは案外大きい。

俺はトイレに閉じ込められた奴らの様子を想像して、彼らと一緒に大口を開けて笑い声を上げそうになる。が、それは我慢する。

それは少々悔しい。今、笑うと負けな気がする。

もう少し突っ込んで、なにをしたのか具体的に聞きたいところだ。

が、俺はあえて聞かない。それは彼らの思う壺だし、案外聞かないほうが楽しいことに気付いたからだ。

次に会う時、奴らはどんな顔をしていることやら。

先生は腕組みをして私を正面から熱心に見ている。

さつきからずつとそうだ。

なんだかなあ。

多分、他の人から見ると私が問題を起こして怒られているように見えるだろう。

「ケーキは？」

まるで、不要物を持ってきた生徒を責めるような言い方で先生は言った。

私は淡々と返す。

「ありません」

このやり取りも、もう4回目だ。

先生はいつもよりもずつと落ちついた声で、また同じやり取りを繰り返そうとする。

「じゃあ、クッキーでもいいけど」

「ありません」

「じゃあ、今日はなに作ってきたのよ」

「ケーキです」

「頂戴よう」

「ありません、もう食べました」

先生は両手を目元に当てる。

そのまま、上目遣いで私を見た。

「泣くよ？」

「どつぞつ？」

「……しくしくしく」

「……わざわざ口で言わないでください」

いくら泣きまねと言っても、さすがにそれはないと思う。

私はなるべく優しい声で言ってあげた。

「先生、いつもよりうつとういしいです」

加藤先生はピタリと泣きまねを止める。一応、私の声は聞こえてはいるようだ。

さっきのように腕組をした体勢に戻って、同じように責めるような口調で私に話しかける。

「せっかく私が、この水出しコーヒー機を使ってコーヒーを淹れたのに」

先生の背後にそびえ立つ、ガラス製の科学実験器具のようなもの。すくなくともメートルはあるだろうが、今日はそれでコーヒーを淹れたらしい。

「こんなもの、どこから買ってくるんですか」

「オークション」

そのコーヒーに賭ける情熱はどこから買ってくるんですか。

「しかも、豆は有名ブランドでマニア間でも話題沸騰中の超高級品」それを聞くのも、もう4度目くらいです。というか、話題って沸騰するんですか。

加藤先生はヒマワリの絵柄のコーヒーカップを手取る。

湯気が出ているコーヒーカップの中身を見て（水出しコーヒーだと言つのに、先生はわざわざ暖めなおしたのだ）先生は力強く頷いた。

「この一杯を淹れるのに何時間かかったことか」

「何もわざわざ、そんな時間のかかる方法で淹れなくても」

加藤先生は私の言葉を無視して、先生はカップを顔に近づけて優雅にコーヒーの香りをかいだ。そして、忙しくて今まで三日くらい寝てなくて今ようやく眠れたような（私自身に経験があることだったりする）そんな顔をした。もはや、その顔は『うつとりしている』の一言では片付けられない。

わずかにコーヒーを口に含み、目をつぶって味わう。ゆっくりとそれを飲み下した。

一気に加藤先生は眼を開く。

「なんてことなの、このコーヒーにケーキが付いていないなんて！

？」

いい加減うるさい。

さつきからこの調子だ。これではカウンセラと言うより、酔っ払いの方がしつくりくる。

もしかしたら加藤先生はコーヒーで酔うのかも知れない。うん、その可能性は高そうだ。きっと、先生にとってカフェインが麻薬と同じ働きをするんだ。

「違います」

先生は突然断言した。

「先生。私、まだ何も言ってます」

もちろん、加藤先生は私の言葉に耳を貸さない。

先生はカップを持っていない方の拳を握り締めた。同時に強く歯を噛み締める。

「私はね、あなたが今日はケーキにすると聞いたからこそ、この完璧なコーヒーを用意したのよ。これで完璧なコーヒーブレイクを楽しめると思ったのに」

「そんなもの学校で企画しないで下さい」

「ああ、信じていたのに。まさか、教え子に裏切られるなんて」

「裏切ってます」

淡々と私は先生に返す。

今度は、私から顔をそらして横目で睨みつけてきた。完全にふててるのがわかる。

「ふうんだ、いいようだ。もういらないもん」

そのまま先生は小声でボソツと言った。

「どうせ八賀谷君と一緒に食べちゃったんでしょ」

「どうしてー！」

私は席から立ち上がった。

加藤先生の動きが停止して、少しづつ私の方へ顔を向ける。だんだんと目が細くなって、口が三日月を形作っていく。

「ああ、そうなの。仕返しにからかおうと思って、適当に言っ

見ただけなのに」

しまった、私としたことが！

「ああ、なら仕方ないわね。うん、なら仕方ないわ。あ、藤咲さんもコーヒ―飲む？さっきから言ってるけど今日は奮発したのよお。

そういえば冷蔵庫にかぼちゃプリンがあったから、一緒に食べよっかあ」

加藤先生の態度がいきなり優しくなる。そのまま先生は冷蔵庫に向かっていった。

自分の顔から血の気が引いていくのがわかったけど、今さらどうしようもない。もう後悔しても遅いんだ。

加藤先生が綺麗に皿に盛られた、かぼちゃプリンを片手に満面の笑みで私に近づいてくる。

そして、私の耳元でこうささやいた。

「で、なにがあったの？」

静かな変化（前書き）

主人公はどこかがおかしくて、ズレています。それは傍目から見ているとただ変わっているに過ぎません。

静かな変化

あの後、昼休みが終わった後も放課後になるまで、結局彼らの犯行について俺が問いたださなかったために、登に篤史に「せつかく頑張った甲斐がない」と嘆かれて鬱陶しかった。

そんなに騒ぐようなことか。……別に俺がやれと言ったわけじゃないんだし。

ともかくようやく放課後になって、開放された俺は今日も美術室に向かう。

ただ今日は部活がある日なので、顧問に鍵を開けてもらう必要がない。

たったそれだけのことなんだが、とても嬉しい。

美術室の戸は既に開いていて、誰かが中にいることを示していた。先輩方はだいたい遅れてくるか、サボるかだ。先輩の中でも金檻は例外で5、6時限目の授業に出席せずに美術室に来ていることがある。と言うことは、もう美術室に入って部活するような人間は1年生か金檻のどちらかだろう。

顧問がいる？ヤツが来るなんて、まあほぼありえねえよ。

そこまで考えてから、俺は美術室に入っていく。

その時、俺は自分の予想が外れていなかったことを知ったが、同時に自分の予想外の事が起きているということも知った。

なんだこれは、どう考えてもありえない。

ウツロギが美術室で絵を描いている。

俺は驚きのあまりに、それ以上美術室に踏み込むことが出来ない。すると、ウツロギの方も俺の存在に気付いたようで、一瞬だけ筆を動かすのを止めて俺の方を見た。が、また絵を描くのに戻った。

俺はその様を見て考える。

そうだ、何もなかったことにしよう。

俺は早速絵を描く準備をすることにした。いつも絵を描く場所に道

具を広げようとするが、ウツロギと隣合う形になってしまいうことに
気付く。

まあ、いいか。どうせウツロギだ。

結局いつもどおりの場所で、いつものように俺は絵を描き始めた。

「おお、やってるやってる」

美術室の入り口から聞こえてくる、底抜けに元気のいい声。

顔を見なくてもわかった、橋本だ。ウツロギがいるからには橋本の
他にありえない、と言う偏見が俺にはあるが、偏見というのはだい
たい事実である場合が多いと思う。

橋本はまるで美術室が自分の領地であるかのように、胸を張って堂
々と進入してきた。俺とウツロギの間に割って入る。

「案外、仲良くやってんじゃない。心配して損した」

橋本は俺とウツロギを指してそう言った。

いったいどこが仲良く見えるのか、俺にはよくわからない。

「あのさ、稔のことだからどうせ挨拶も何もしてないと思うんだけ
ど。コイツ、美術部入ることになったから」

「へえ、そりやまたどうして？」

「進路のこと考えておくと、どこか部活に入った方が有利でしょ」
それはそうだろうが、そんなことをウツロギが考慮するとは思えな
い。おおかた、橋本がウツロギにそうするように命令したのだろう。
ウツロギは橋本に逆らうことはまずほとんどない。口答えること
さえ、かなり珍しいほどだ。

「どうして美術部にしたの？」

「コイツに出来そうだったから」

色々な意味でひどい言われようだ。

でも、彼女の言うことは正しい。ウツロギに体育系の部活や吹奏楽
とか、そう言ったものが務まるはずはないのは事実だ。

別にウツロギに運動神経がないわけでも不器用なわけでもない。む
しろ、そういった身体を動かすことに関して言えば、コイツは人並
み以上の能力を持っている。天才的を通り越して、超人的な能力と

いってもいい。

したことがあるスポーツなら、一度見たテクニクは簡単に模倣してくるし、微細な筋肉の動かし方さえもフェイント込みで実現し、一度やられた手は二度とはきかない……なんて登が言っていた。

楽器の演奏でも、リコーダーの演奏しか見たことがなかったけど、たとえ初めての楽器だったとしてもその演奏を一見ただけで記憶し、一時間程度の指鳴らしで一通りの曲目は演奏できるようになっているはずだ。ただし、情緒の欠片もない機械的な演奏になるだろう、とは思う。

ただ、唯一にして最大の問題点が社会性がないということだ。上下関係など気にしないし、ろくに会話も出来ない（出来ないのではなくやらないだけだと思うが）人に合わせることもない。

だからと言って、ウツロギは先輩に対してタメ口を聞くことがなければ、社会のルールを破ることもない。むしろ、それ以前の問題なのだ。誰に対しても、挨拶も会話も礼も何もしないだから。

もしかしたら、自身が後輩だからといって、わざわざ年だけが上の人間に従う必要性はないと思っっているのかもしれない。実力で言えば、運動も腕っ節も何もかも全てにおいて、自分の方がはるかに上なのだと思うているのだろう。コンピネーション能力がないのではない、コミュニケーション能力がないのでもない。なくても勝てる、目的を達成できると思っっている、俺にはそう見える。

だけど、それでは世の中は生きて行けない。周囲に、社会に『調和』と言う名の隷属する形でしか人間は生きていけないのだ。

いや、もしかしたら俺はそう思いたいだけなのかもしれない。自分がこうして他人に合わせて我慢している以上は、他人に合わせて生きていく人間がいるとは絶対に思いたくないのだ。

きつと、世の中は他人に合わせずとも生きていける。俺にそのための実力と、合わせることによる利益を捨てる覚悟があるなら。

俺にはそのどちらもない。

いきなり、俺達の様子をみていた橋本が愉快そうに笑う。

「でも、よかった。不安だったんだよね、稔に部活なんかできるかってさあ。でも、八賀谷君が友達になってくれたみたいだから、大丈夫だよね」

ただ俺達は隣合って絵を描いているだけなのだが、どうやらこの状態を客観的に観るとそれでもかなり打ち解けているように見えるらしい。

ウツロギは橋本の言葉を否定することも肯定することもなく、黙々と絵を描いている。

あまりに静か過ぎて、呼吸をしているかどうかさえ疑わしい。

「それじゃあ、私。生徒会に行くから二人とも頑張ってね」

橋本は俺達の肩をポンッと叩いて、機嫌が良さそうに立ち去る。

結局この後、活動日であるのにもかかわらず、他の部員どころか顧問すらこの部屋顔を出すことはなかった。そのため、俺は延々とウツロギと二人つきりで絵を描き続けることになってしまった。

静かな変化（後書き）

このことが少しづつ彼らの運命を変えていきます。

く 藤咲マミと路地裏と (前書き)

ようやく物語と事件は遭遇します。

く 藤咲マミと路地裏と

私は学校の校舎を見上げた。

第一校舎の3階、あの辺りが美術室だったように思う。

（まあ、見上げててもどうしようもないか）

私は昨日の朝と同じように、急ぎ足で帰路に着く。別に他人の目が気になるからじゃない。

今日はめずらしく、お母さんが早く帰ってくる日だった。

だから、今日の夕飯は二人分の食事を作らなきゃいけない。それに少しくらい、奮発して多少凝ったものとかを作ってみてもいいと思う。

今日は疲れたけど、良いことばかりだ。

時間帯は他の生徒よりは遅いけど、いつも帰る時間よりは比較的早めで、今からでもある程度余裕を持って料理に取り組めると思う。どうして、いつもより早めに帰れるのかというと、単純に担任の先生のいつもの話合いがなかったからだ。確か会議と言っていたように思う。

でも、そんなことは私にとってどうでもいい話。早く帰れるならそれで良かった。

学校の前の公園を歩いていく。

道の奥の方でスケッチブックで風景を写生している男子がいたので、なんとなく「八賀谷君かな」とそう思ったけど、ネクタイの色が違う気がする。

だから、あれは先輩だろう。

実は私の学校はネクタイの色とジャージの色、それと上靴に入るラインの色が学年ごとに統一されている。なにか他にもあった気がするけど、とにかく私たちの学年は赤で統一されている。ちなみに2年生は緑で3年生は青だ。どうしてそうしているのかはわからない。明確な理由があるわけじゃないんだと思うけど、もしかしたらその方

が先生から見ればやりやすいのかも、とも思う。

「ちよつと、君」

右隣から声。

気取った言い方だな、と私は思った。

そこには道の奥で絵を描いていたはずの男子生徒。

いつの間にそこにいたのだろうか。

ネクタイは緑色で2年生だとすぐわかった。銀縁のガネをかけていて、それがあまり似合っていないのにもかかわらず、私はそれを「センスがいい」と感じてしまうという不思議な感覚を覚えた。

彼が左手を差し出す。

「これ君のだろ」

そこには私の生徒手帳。

どうやら、拾ってくれたらしい。

「ありがとうございます」

でも、私。生徒手帳は鞆の中に入れてるはずだから、鞆を開けて荷物を取りださない限り落したりするはずはないんだけど。

「あまり君はぼーっとしない方がいい。知らない人から声をかけられるからね、どうも君の態度は誘っているように見える」

私はムツとした。

「私がちゃらちゃらしてるってことですか。それとも無防備だったことですか」

彼は無視した、私に目も合わせない。

「忠告はしたよ、それじゃあね。藤咲さん」

そう言つて彼は立ち去る。

私はその背中に「なにか思いつきり言つてやろうか」と思ったけど、正直な話あまり変な人とは関わりたくないのので何も言わずに帰るところにした。

そう言えば、帰り際にアイツは私の名前を呼んだ。

私は舌打ちする。

そうか、生徒手帳を盗み見したんだ。

私はムカムカして足を速める。

他の女の子は本当に歩いていてはいるのかわからないくらいに遅いから、そういう普通の娘からみれば私は走っているのと変わらないくらいの速さで歩いているだろう。

そういえば、舌打ちのクセはよくお母さんに怒られていた。

それで何度も直させられそうになったから、今ではお母さんを含めて人前の前ではしていない。

その時にお母さんは、「人前でそんな事するのは止めなさい」と私にそう怒った。

だから、私はこう思った。「この人の前も他人前なんだな」と。そうやって、お母さんは私に壁を作っていく。だから私も作っていく。

結局、母親も他人なんだとそう思うことにした。

他人と食事が出来るからと喜んでいた私はなんだったんだろう。

わざわざ早く帰って夕飯の準備をするなんてバカみたいだ。

そう考えた私は急ぐのをやめる、もう遅れて帰ることにした。

気が付けばもうすぐ駅の近く。

結構距離を歩いたけど息はあまり乱れていない。私は運動に関して言うと体力だけには自信がある。

私は歩くペースを落とすだけじゃなく立ち止まった。私の住むマンションは線路を越えた所にある、このままじゃすぐに着いてしまう。結局、どこかで時間を潰すことにした。

「……………どうしようかな」

でも、私は時間を潰すのが苦手だった。

本屋で立ち読みとかしてればいいんだろうか。

そんな時だ、声が聞こえたのは。

*

ミマタは潜む。

影多きこの路地裏に。

本来なら路地裏に人など来るはずもない、それも若い女など。

だが、ミマタが獲物を狩ろうと決めるだけでミマタの前に獲物は現れた。

なぜかはわからない。

そもそも、ミマタは理由を考えることはなかった。

「そういうものなのだ」とミマタはそう思うことにしている。

理由がわかったからといって、獲物を狩らなくてよい訳ではない。

生きるためには狩らねばならないのだから、自分が生きることが望む以上どちらにしても同じではないか。

そういう諦めがミマタには植えつけられていた。

ミマタは潜む。

この影多き路地裏に。

ミマタの背中が一瞬揺れた。

いや、身構えたのだ。

じよじよに足音が近づいてくる、ハイヒールの足音。

間違いなく女だ。

ミマタの勘もそう告げていた。

空を見ればまだ狩りをするにしては、まだ明るい。

しかし、時間など獲物を前にしては何の意味もない話だった。

その足音がミマタの眼下を通り過ぎた時、ミマタは音もなく獲物に飛び掛かる。

獲物の頭上から。

その時にミマタはその獲物がまだ若い女性であることを知った。

彼女は、いや、その獲物はミマタに気付くことも無く、腕を強く首に叩きつけられ、その衝撃により大きな音を立てて倒れた。

ミマタは感触でわかった。

即死だ。

そのままミマタは仕留めた獲物近づいていく、動いてはいるが息はない。ミマタはそう認識した。痙攣をしている、という言葉はミマ

夕には無い。

ミマタはふと疑問に思った。
なぜ、いつも目の前に現れるのがこの年齢の女性なのか。
しかし、「そういうものだ」と結論付ける。

ミマタは仕留めた獲物に両手を当てる。

両手で服を裂き、続いてすぐに腹を裂こうとしてためらう。
だが、結局は体のどこからか来る意志にはあがなえない。

ミマタの腕と顔が血に染まる、目から涙が流れる。そして、そのまま喰らいついた。

(誰か俺を助けてくれ)

涙を流しながらミマタはまたそう願った。いや涙を流す前、獲物を狩ると決めた時点から頭のどこかで常に願いつづけていた。

「誰かここにいるの？」

背後から少女の声が聞こえた。

ミマタの身体が震えた。

(助けに来てくれたのか?)

そう考えてミマタは「いや、そんなはずはない」と自らの考えを否定する。

それは制服を着た女の子だった、恐らくは高校生だろう。

どこことなく幼い印象のあるその女の子は、自分が何を見ているのかまだわかつてはいないらしかった。

状況を把握できない女の子が目を凝らす。

とつぜん、大きく目を見開いた。

「あ……」

その女の子はそう声を漏らした。その瞳に恐怖の色が宿っていく。
ミマタは立ち上がった。もう殺すしかない。だが、それと同時にミマタは「逃げろ」とその女の子に叫ぼうとした。しかし、声はでない。自然と身体が襲い掛かるうと身構える。

女の子が背を向けて逃げ出そうとしたその瞬間、ミマタは飛び掛りその獲物を襲おうとする。

しかし、それは実行されることは無かった。

「それは私の獲物だ」

背後から聞こえた、抑揚のない声。

ミマタ自身はその声に反応しようとし、ミマタの頭の中からはその女の子を襲えとの命令が響く。

相反する命に身体が混乱する。

その瞬間にミマタの身体は浮いた。

アスファルトに頭から叩きつけられるミマタ。

(……なにが起きた?)

ミマタはあお向けに倒れている自分に気付く。普通ならアスファルトに叩き付けられた衝撃によって、首の骨を折り死んでいただろう。しかしミマタは、自身の身体を見渡しゆっくりと立ち上がった。

相手はある程度の距離をとって目の前にいた。

ある程度の距離、それは間合いだった。

ミマタにはその人物の顔はわからなかったが、その人物が驚いていることはなんとなくわかる。相手が何の構えも取っていない状態であることも。

ミマタは怒りの形相でその人物に襲い掛かる。右腕を思いつきり愚かな妨害者の頭に叩きつけてやろうとした。

そうして、無防備なまま距離を詰める。ぎりぎりまで攻撃が見切ることが出来るように相手がとった間合い、畏にミマタは無防備なまま飛び込んだ。

腕を伸ばす一瞬。ほとんど光のないはず路地裏で、ミマタの腕めがけて鈍く光るなにかが横切る。

ミマタは右腕を大きく空振り、妨害者のいたはずの位置にその姿はなく、その勢い余って壁に全身を激突させた。

受身を取ろうとしたミマタはなぜかそれに失敗する。

それによってミマタは体の異常を認識し、右腕の、それがあらずの空間に目を向けた。

しかし、そこには何も無い。

ミマタの右腕は宙に舞っていた、それは薄汚れた壁に当たりミマタと妨害者の間に落ちる。

ミマタはそれを無視してすぐに体を持ち直し、すぐに臨戦態勢をとる。

だが、ミマタと違い妨害者の方はそうはいかなかった。

この状況に対応し切れず、妨害者はこの闘いの最中に自分の目の前に落ちた腕を凝視したままだ。

妨害者のその右手に握られているのはやや大振りなナイフ。だが、そんなもので人間の腕を簡単に切断できるはずが無い。しかし、現に腕は切断されたのである。それも妨害者自身の手によって。

その動揺は闘いにおいて大きな隙であった、そしてその隙を見逃すような余裕も油断もミマタには存在していなかった。

ミマタは再び襲い掛かる。今度は左腕で妨害者の右腕をもぎ取ろうと。

思考のうちにあつた妨害者の意識は、目の前に迫り来るミマタを見ることがよりようやく反応した。だが、右腕のナイフはもう間に合わない。

*

私は必死にそこから逃げ出した。

路地裏を出た瞬間に誰かとぶつかる。

「うっ」

それは担任の先生だった。

先生は私とぶつかったせいで、しりもちをついていた。

でも、私は先生に助けを求めるようなことはせず、なぜかここで顔を見られることが危ないような気がして、その場を走り去る。

「おっ、おい！」

先生は私に向かって呼び止めようとしたのか、そう大きな声で言った。

顔は見られていないとは思いつけど、きつとうちの生徒だとはばれてしまっただろう。でも、そんなことよりも私はとにかくここを離れたかった。

私は何も関わってない。

私は何も知らない。

ただ、この場から逃げ出したかった。

周りの、自分の動きがやけにゆっくり感じる。

足が遅くなつたみたいだ。

必死に走ってマンションの自分の部屋の前まで着いた。ここまで距離を感じたのは初めてだった。

呼吸が、空気が足りない。心臓がドラムのように大きく身体中に響いている。

私はドアを開けようとして、鍵がかかっていることに気が付く。

いつも慣れているはずの、鍵を取り出すだけの動作を何度も失敗する。最後には鍵を落とすようなことまでした。

自分家の中に入れた私は、すぐに中から鍵を掛ける。

そこでようやく私は落ちつくことが出来た。

玄関の壁に私は崩れる。

(なんだつたの、あれは……)

あんなものが、この退屈な世界にあるわけがない。

そう、あるわけがない。

私は顔を上げる。

「お母さん！お母さん！」

しかし、返事はない。もう帰ってきているはずなのに。

私は不安にかられる、まさか!?

私はお母さんの無事を確認するために、携帯を鞆から取り出す。携帯を取り出したその手は震えていた。

……メールが来てる？

私はおそろおそろそのメールを開く。

もしかしたら、お母さんは。そんな考えが私の頭を埋め尽くす。

だけど、そこに書かれているのは私の予想を裏切るものだった。

「ごめんなさい、また今日も帰れません。一緒にご飯食べるって約束したのにごめんね。絶対にこの埋め合わせはするから。今度どこかに一緒に食べに行こうね」

メールにはそう書かれていた。

なにが書かれているのかわからなくて、理解するのに時間がかかる。それを理解した瞬間に、目から涙が溢れ出てきた。

気が付くと、私はうずくまって泣いていた。

玄関先でバカみたいに泣いていた。

何も考えたくなくて子どもみたいに。

そんな状態ろくに話せもしないのに、私は叫んでいた。

「どうして、いつもそばに居てくれないのよお」

勝手なことをそうやって泣き叫んでいた。

「いつもわたし、こうやって、ひとりで泣いてるんじゃないの言葉が溢れて止まらない。」

「どんなときも、いつだって。わたしがどんな気持ちでいるか」

「どこでだってひとりなのに、どうしろっていうのよお」

「がんばられて、ひとりでがんばれる訳ないじゃない」

また、呼吸が出来なくなる。

それでも私は。

「……そばにいてよお」

ただ、泣き叫んでいた。

エピソード

「なんの様だい、それは」

白衣の男はミマタにそう言った。

路地裏でゴミのように転がるミマタには、なぜか両腕が無かった。しかし、出血もない。辺りに出血の後がないことから、それが止まったからではなく最初から血が流れていないことを示した。

「返事はどうした」

「……妨害者だ」

ミマタは特に苦しそうな様子もなくそう答えた。

白衣の男は「ふん」と鼻をならす。

「それで、ここまでポロボロにされたと。間抜けな狩人だな、君は」
ゆっくりと白衣の男は、ミマタに近づいていく。

「使えないな」

表情には怒りも何も浮かんでいない。

ただ、目に現在見ているものに対する軽蔑の意思だけがあつた。

「お前は満足に獲物も狩れないのか！」

突然、無表情のまま男は声を荒げて、ミマタを蹴り飛ばす。

ミマタは反射的にうずくまる。だが、ミマタは顔をしかめつつも特に痛みを感じているわけではなかった。

男の表情と声の全く合わない様子が、その場の雰囲気をとて妙なものにしていった。まるで仮面を被った子供が演劇でもしているかのような。その雰囲気为非現実的を通り越して、ひどくその場で起こっていることを嘔臭くする。

白衣の男は奥に、女性の死体を指して言った。

「それでも一応獲物を仕留めてはあるみたいだな」

周囲へと目を向けた白衣の男はもう一つのことにも気付く。

先程までここで闘いが行われたのにも関わらず、この場に流れているのはその死体となつている彼女の血だけだった。それは妨害者が

傷一つ追っていないことを意味する。

「相当の腕だな、これは」

そう白衣の男は結論付ける。

「ミマタ、どうやってやられた？」

白衣の男はミマタに顔も向けずに尋ねた。同時に男はなにかを地面から拾い上げる。

ミマタは首と、まだ残っている腕の付け根で起き上がろうとしていた。その中で、ミマタは白衣の男の命令に対し、思考した。

まず、嘘の情報を流すかどうか。残念ながらそれは自分には不可能だ、そう結論付ける。沈黙しても利益はない。ならばただ、事実を告げるのみだ。

「ナイフだ、動きが実践慣れしているようだった」

あえて細かい説明を省くことでミマタは、白衣の男に伝える情報を最低限のものにした。ミマタは命令には逆らえない、そのため命令に逆らっていない範囲で反抗するしかなかった。

白衣の男はミマタの言葉を聞いて口の端を僅かに歪める、それも左端だけだ。

「ようするに、力に対し力で向かうことなく、洗練された技で力を受け流し戦えるということか。素人の君では太刀打ちできなくて当然と言えるね」

ミマタは白衣の男を睨みつける。

（お前もたいして俺と変わりはないだろうよ）

だが、ミマタは自分の思いを男に言い放つことは出来ない。そういうものだからだ。

ここで、ミマタは男の言動を不審に思った。

男は先程から、自分に一番に質問するべき点を聞いてきていない。それは何を意味するのか。

「なあ、ミマタ」

ミマタは男を見る。

男の無表情な顔の中で、狂喜に輝く眼。

「自分が何故人を殺しているか、考えたことはあるか？」

ミマタは返事をしない、自分がそんなことは考えたことがないのは明白だったからだ。なぜなら、自分は『そういうもの』だから。

それはこの男に植え付けられたものかもしれないが、それはミマタにとって絶対の事実だ。

ふとミマタは未だ答えを待つ男に気付き、仕方なく声を落として答える。

「……考えるはずがない」

男は頷いた。

そして、男は自分の握った左手を自身の胸の前に出していく。

「俺もだ。そして、この世界に生きている奴はみんなそうだろうな。お前が殺してきた人間達もだ。自分達がどれだけの同族を殺しているのうと生きているか。それを知らないし、考えもしない」

ミマタは男の口調が先程までと違うことに気付いた。かといって、ミマタに何かがあるという訳でもない。

男は徐々にその左手を開いていく。

「そして、これから殺されていく人間達もそうだろう」

その左手の中には、赤いピアスの片方があった。

白衣の男は芝居がかった様子で、ミマタに向き直る。

「運べ、ミマタ。見つかるなよ」

ミマタは頷いて女性の死体を自らの歯と顎で持ち上げる。それを背中に乗せると犬のように走り出していった。

それから路地裏は静寂に包まれる。

ありふれた日常の様子を取り戻していく。

そこに男の声が響く。

……見つけたぞ、ようやくな。

意図する演技としない演技（前書き）

一番の問題は、主人公の振る舞いを誰も問題だと思わないことです。もちろん本人も含めて。

意図する演技としない演技

ある少年の独白

僕は普通ではいたくなかった。

誰かにとつての特別でいたかったし、特別な仲間も欲しかった。

特別な誰かがそばにいて欲しくて、その中で特別のことをしたかった。

子どもの頃からそれを自然に望んでいたように思う。

でも、僕はよくある程度に個性的でしかなかったし、家だつてよくある程度の問題を抱えているだけだった。

勉強が出来るとか、運動が出来るとか、家庭に問題があるとか、複雑な過去を持つてるだとかはそんなことはよくあることだったんだ。だから、僕は『普通の人のフリをした特別な人間』のフリをすることにした。

いろいろな人を騙して、その上で絶対にばれないようになにかをする。

学校にいる騒いでいる馬鹿な連中とは全然違う、あんな奴らみたいなあの底の浅いことなんかじゃない。全く違うことを僕はしていた。

僕はそう思っていた。

そう思うことで僕は特別な人間になれたような気がしたんだ。

でも、本当はわかっていたんだ。

僕はそんな偽りの特別を望んじやいないつてことを。

僕が本当に望んだのは。

僕が本当に望んだのは。

本当に望んだのは。

望んだのは……。

第三話 『乾いた本気』と『崩した覚悟』

「今日の午前2時に近辺をパトロールしていた警官2名が女性の遺体を発見しました。詳しいことは現在確認中ですが、警察は連続猟奇殺人に関係があるとして捜査を行っています」

「ということは、今までの事件との同じ手口で殺されていたということでしょうか」

「殺人かどうかも確認の段階ですが、警察の動きからもその可能性は高そうですね」

リビングのテレビはまたくだらないニュースが流れている。

コメンテータの知ったかぶった解説に、わざとらしく驚くニュースキャスタ。そしてさらに、それを熱心に見る美弦。朝のいつもの風景ではあるのだがあまりにも爽やかさに欠ける。

しかもリビング。場所の名前からして爽やかさなんて元々ないようなものだ。

さらに言わせてもらえば食事なんてダイニング、これもまたダイニングってサスペンスじみてるなんか嫌だ。これでリビングとダイニングが組み合わさるとスプラッタぽさが増す気がする。

そんなわけで、朝からリビングでこんなニュースが流れているのはいい気分ではない。正直言えばさっさとテレビを消してやりたい。

だけど、まずは口で言わねばならない。それが文化的コミュニケーションと言っものだろう、前置きを置かずに大砲をぶつ放す文化もあるらしいが。

俺は口の中のベーコンとパンを牛乳で飲み込んでから口を開く。

「美弦、食事をしながらテレビを見るのはどうかと思うな」

「んー」

「さすがに食事の時は消せとは言わないからさ、せめて手と口は動かそうよ」

「んー」

「……美弦、聞いてる？」

「んー」

美弦の言いたいことは俺にはよくわかった。
リモコンに俺は手を伸ばす。

知ったかぶりおっさんと演技過剰のおっさん。それと比較的美人っ
ぽいおばさんの顔がモニタから消えた。後に残るのは漆黒の闇。
うん、これでよし。

俺は満足して食事に取り掛かる。

美弦は俺に怒鳴りつけた。

「なに考えてんの、今いい所だったのに！」
また、これだよ。

「今回、俺は声をかけてから消したよ」

正義は我にあり、だ。正義なんてものに価値があるとは思えないけ
ど、今回ばかりは美弦も俺に文句は言えないだろう。

美弦は自分の椅子に敷いていたクッションを俺に投げつけた。

「そんなの関係あるかあ！」

わお、そう来たか。

理屈では勝てないからそれを無視して可愛い暴力を振るう。それを
行うのは実は理屈で言うところと正しい、相手に勝つ為に勝てない勝負を
行わないのは当然だ。誰もがそれぐらいのことはする。

美弦は使われていない他の椅子のクッションを引っ張り出して投げ
てくる。

俺はそれを片手で払いのけながら牛乳を飲んで言った。

「美弦」

「なによ」

「せめて、服はちゃんと着てください」

「今は関係ないでしょ」

「そうなんだけど、投げる度に見えてます」

俺は全く気にしないけれど、常識的に問題ありだろう。

美弦は顔を真っ赤にして両手で胸を押さえる、そして俺に向かって
絶叫した。

「このド変態っ！」

それは、さすがに濡れ衣だ。

俺も胸を片手で抑える、もちろん美弦とは別の意味で。こんなに痛い一言を言われたのはかなり久しぶりだ。せめて変人に留めて欲しい。

「あの、さすがにド変態はないんじゃないだろうか」

「女の子の胸を見て喜んでるヤツなんてド変態で十分よ。変質者じゃないだけいくらかマシでしょ」

それは確かにその方がまだ良いような気がするけど、その理屈でいくと男性のほとんどは変質者だ。それに、彼女の認識には一部誤りがある。

せめてその旨は伝えておくべきだろう。それで出来ればドの字ははずして欲しい。

俺は昨日の残りのスープを飲み干して、息を吐き出した。

慎重に美弦の顔色をうかがいながら、声を出す。

「あの、誤解しないで欲しいんだけどね。俺は美弦のそういうのか別に見てもなんとも思わないから」

ちなみに、美弦の胸があまりないからではないです。

と、美弦から返事がない。

またさらに美弦の顔が真っ赤になる、拳が震えているような気がする。

ああ、これはさすがにやばいな。何かしくじったみたいだ。

「それはそれで、し・つ・れ・い・だ・あ・あ・あ！」

そんな感じでいつもの朝。

なにもあそこまで、キレることはないと思っただ。

美弦はまだ俺を怒っていて、仕方なく少し離れて後ろから俺は美弦を送っている。

背後からついていく俺の姿はそれこそ変質者だと思っただ、どっちにしたって駅には行くんだし、それなら美弦にばれないようにいくよりは一緒に歩くほうがまだいい。それに美弦に関して言うと、仮

に駅まで送らなかつたら送らなかつたで、彼女の怒りが一層深くなる気がして仕方ないのだ。

俺は歩きながら、がつくりとうなだれて落ち込んでいるフリをする。いや、実際にある程度落ち込んでいるのかもしれない。なにせ俺は今や、変質者のド変態となりつつある。いや、実際に既になっている。

いくら俺に常識が欠落していると言っても、これは落ち込まない方がおかしいだろう。

俺は演技ではない演技をし続ける。

「はあ」

意図せずして俺の口からため息がこぼれた。

その時、美弦が俺のため息に反応したことに気付く。

一応、あれでも俺のことは気にしてくれているんだな。

それがわかった瞬間に「もうなんか俺、もう変質者のド変態でいいや」って考えが頭の中に広がってどうでもよくなった。

だから美弦に、変態って言われるんだろうな。

どうでもよくなったけど、さらに俺は落ち込んだ。

結局、どうでもよくないんじゃないか。俺。

「あの、もういいよ」

美弦が背を向けたまま言う。

もう駅の前だ、いつもより着くのが早い。きつと美弦と俺は無意識に互いに合わせて早く歩いていたんだろう。それは互いに相手にしか意識がなかつたからだ。

俺は美弦には見えないにも関わらず、頷いた。

「わかつたよ、それじゃ」

美弦は俺がこのまま歩き出したとしても呼び止めはしないんだろう。それは短くとも長い付き合いだ、わかる。

俺の言葉を聞いた美弦は駅に向かって歩き出す。

だが俺はその場から動かない。こいつは呼び止めない、だからこそ俺は動かない。ここで相手に甘えて、美弦が俺を呼び止めたり謝る

ことに期待するほど、俺はガキでも大人でもなかった。俺がそうしたのにたいした理由はない。ただ単にそれがしゃくだったのだ、相手に期待するという行為が。美弦は俺が立ち止まっっているのに気付いたのか、一瞬迷ったかのようによくペースを落とす。でもすぐにペースを戻してそのまま歩いていった。

その後ろ姿は見えなくなる。

どうも美弦の様子が最近おかしい。

俺は自分自身を棚に上げてそう考えた、同時にどこか冷静な自分が常に頭の中にいるのを自覚する。

それが嫌で、俺は自嘲気味に鼻で笑った。

「なんか馬鹿みたいだ」

そう呟きつつ、由枝先生がいるであろう駐車場に向かう。

こんなことで毎日一喜一憂してるなんて、俺らしくない。

*

車内で俺はまた外の景色を見ていた。

結局の所、俺は静寂が一番心地良い。

それはどうしようもない、もう今さら変えれないことだ。

「なにかあったの？」

由枝先生が俺に聞いた。

余計な感情もない声、それでいて機械的でない。

その声は人間味がなくて俺は好きだ。でも、こんな声は人間にしか出せない。

先生の声は静かで安定した雰囲気を作る。

俺もその場の雰囲気壊さないような声を意図的に作り、返した。

「生きていればなにかはあるでしょうね」

だがそのせいで声に感情がこもり、自分がイメージしたものとはかけ離れた声となる。

俺は場の雰囲気を壊した。

先生の声は意図的に出されたものではない、自然体で出した声だからこそ感情がこもらないのだろう。残念ながら俺にその芸当は出来ない。

俺は少々自虐したい気分にかられる。一般的にこういうときに舌打ちをするのだろう、それぐらいに俺のしたことは失態だった。

「なんだか今日は怒りっぽいね、何に対して怒っているかはわからないけど」

先生が誰に対して、ではなく何に対してという言い回しを使ったことが、俺にはかなり正確なものに感じた。

きつと、それも意図された言葉ではないだろう。全くの自然体。

俺が返答しないのを確認すると、先生はそれっきり黙った。

無駄に大きい車の振動、きつとそういう車種なんだろう。

俺は密かにその横顔を盗み見る。

この盗み見るは比喻ではない、俺は先生の横顔を一枚の絵として本当に盗んでいた。

こんなに真っ直ぐに前を見ている存在は他にないだろう。写真や人形ですら真っ直ぐではなくこちらを見ているような気がする。

人形よりも無機質で、人間らしくないその様子が本当に綺麗だった。人形は出来る限り、人に似せようとして作られる。つまり人間らしくあることを目的として存在している。ではこの目の前にあるのは何なのだろう？

白い肌に紅いピアスが映える。

ふと、なぜか罪悪感にかられ、窓に視線を移した。

会話はない。

俺は言葉と言う無粋なものを失くして、由枝先生との時間を楽しむことにした。

外の景色は毎日人間の目からするとほとんど変わらない、俺は人間の目や記憶がいい加減で良かったと思う。もし、精密に物事を見れるのだったら流れる景色は楽しめないだろう。

景色の中にいつもより警察が多いこと、それがとても残念だった。きつと、なにかあったのだろう。世の中にいつもなにかはある。

こうして車内の中で、由枝先生の隣で、なにかを考えているようになにも考えない時間を過ごすことは俺にとつてとても有意義だった。由枝先生にとつてどうかは知ったことではない。

しかし、楽しい時間は短い。もう公園の前だった。だから、わざわざ別れの挨拶を交わさないといけない。こういう時、俺は言葉なんてなければ良いと思う。

俺は仕方なしに口を開いた。

「いつもありがとうございます」

外の景色を見たまま言った。こうして相手の顔も見ずに言葉を言っている姿は、出来るなら美弦や母には見られたくないものだ。

先生は僅かに笑い声を漏らした。

「知ってるでしょう、感謝されたくてしているわけじゃない。もし、本当に感謝したいのだったら言葉よりも行動で表して欲しいな。口で言いたいただけだったらよしてね、重荷になる」

由枝先生の声には温度がない。冷たいのではなく、暖かいのでもなく。

「伝わってませんか、俺の気持ちは」

「伝えたかったの？」

俺は外の景色を見たまま苦笑する。

そういう言い方をするか、このひとは。

俺としては女性にこう言われて引き下がる訳にはいかない。

「わかりました。俺、今度なにかしますから」

俺は由枝先生を見つめる。

目に念を込めた、相手を捕らえるかのように。

声に感情を込めた、空気を壊すのではなく作るために。

俺は口元をばれないように上げる。

「その時は逃げないで下さいね」

その時先生は未だに前を見ていたが、俺の方へと顔を向ける。今ま

で人形よりも人形のらしく前を見ていた彼女が、真っ直ぐに俺を見る。

俺はその瞬間にまたしくじったと思った。

綺麗な二つのガラス玉が静かに輝く。

由枝先生は、何一ついつもと変わらない無色な声で言った。

「わかった、その時は逃がさないでね」

先生のその目には俺以上の念が込められているのだろうか。結果、捕らわれたのは先生ではなく俺の方だった。

俺は由枝先生から目が離せない。

この人は最初からそうなるって知っていたのか。

いや、由枝先生がそんな計算するはずがない。なぜなら……そんな計算するまでもなくいつも彼女が絶対に勝つんだから。

由枝先生は目を合わせたまま固まってしまった俺を見て、人形のようなその顔に満足そうに笑みを浮かべる。それから俺から目を離れた。

先生は捕らえた俺をすぐに手放す、名残惜しそうな様子もなく。

俺にはそれが腹立たしかった。

（今に見てるよ、後悔させてやる）

そう俺はその笑顔を見て決意した。そのうちなんて生易しい子供みたいな決意じゃない、明日にでも後悔させてやる。

決意したのと同時に車が自然に減速していき、止まる。

先生は前を向いたままいつものように言った。

「それじゃあ、今日も1日頑張つてね」

「ええ、そのつもりです」

俺はシートベルトをはずして鞆を背負う。

この人は頑張っている人にさらに「頑張つて」と言うのが好きなのかもしれない。残酷なことでもあるが必要な経験でもある。それを先生が考えているかは別にして、この言葉を相手のことを考えていない言葉と、そう言うかどうかは人次第だろう。

いや、人次第なんじゃない。全ては俺次第だ。

俺は車のドアを開けて出て行くこととする。

ああ、また忘れるところだった。

俺は由枝先生に振り返る。身体の向きは前を見ているので正面から見えず、やや斜めを向いた姿勢だ。その状態で先生に口を開いた。

「由枝先生、おはようございます」

なぜか由枝先生はためらうようにする。それから挨拶を返した。

「……おはよう、コウ君」

由枝先生はいつもの笑顔に戻る。

人にまとも挨拶するなんてこの時間くらいだよな、と言ってもまともな挨拶というのはよくわからないが。

俺は鞆を背負いなおして由枝先生に背を向ける。

「それじゃ」

学校に向かって俺は歩き出した。

それからやや間を空けて車は俺を追い抜かしていく。顔を向けていなかったのが先生が見ていたかはわからない。

それを勿体なく思いつつも、逆にそれがいいのだとも思った。

私はどうしたらいいんだろう。

通学路を歩きながら私はそう考えていた。

警察に言うのが一番なのかもしれない、でもそれは逆にしちゃいけないようなそんな気がしていた。

言わないで過ごす、その方が安全って言う訳でもない。むしろ言った方が安全なはずだ。警察と関わりたくないのだろうか、私はいや違う、なにも大人から聞かれたくないし、大人に何も言いたくないんだ

大人と関わりたくない。でも、本当にそれだけなんだろうか。

私は自分がどうしたいのか、何を考えているのか、よくわからない。それでも私の中で確かだったのは「とにかく警察には言うつもりはない」ということだった。

急ぎ足で歩いていた私は、ふと自分が腕時計を見ようとしていたことに気付く。

私はいつの間にか無意識のうちに歩く早さを遅めたり、早めたりして学校に着く時間を調節していた。……八賀谷君に会おうとしていた。

でも、そうやって自分で気付けるからにはまだ無意識じゃないのかもしれない。

ああ、もうまだ頭の中がごちゃごちゃしてる。

とにかく私は、なにもなかったことにしてこのまま生活していくしかないんだ。考えても仕方ないんだから考えるな、私。

余計なこと全てを振り払うために、私は学校まで一気に走り出した。すぐに心臓の鼓動が早くなって、息が続かなくなる。なんだかお腹が痛い。

どうしようもなくなって、校門の前で私は上半身を前に倒して休んだ。両手を膝の上に置く。視界が一気に狭まって、自分の足元しか

見えなくなつた。

なぜか今日はすぐに息が切れる、いつもとは大違いだ。

一生懸命に呼吸を整えようとする、けどあせつてそれすらもうまく出来ない。

いったいどうなってるんだろう、今日は変だ。身体も頭もうまく働かない。

「あの、大丈夫？」

突然、私の目の前に影が差した。それから聞き覚えのある男子の声。八賀谷君だ。

私は顔を上げる。

そこには心配そうなのか、戸惑ってるだけなのかわからない八賀谷君がいた。彼は私の前に立ってどこか居づらそうにしている。その目には私が映っていた。

「保健室行った方がいいよ、顔色悪いみたいだし」

八賀谷君は、少なくとも表面上は心配しているかのように言った。なぜかそのときの私は八賀谷君のその態度が気に入らなかつた。

自然と怒りが感情を支配する。

「大丈夫だから私に構わないで」

私はそう言つて、すぐに体勢を戻した。なるべく平気そうに背筋を伸ばして歩き出す。

八賀谷君はそれでもその態度を止めない、私に目を向けたままだ。もうその目も気に入らなかつた。

「でも」

八賀谷君が軽く右手を伸ばしながら言う。

私はその手を反射的に払つた。

「構わないで！」

私は彼を避けて走り出す。

その途端に目の前が真っ暗になったような錯覚に陥るが、それでも私は走るのを止めない。彼は追つて来ることはなかつた、当たり前だ。

玄関なんてすぐに目の前のはずだったのに、着いて靴を履き替えた頃には人とまともに話せるかも危うい状況だった。

荷物が重い、いつもよりずっとずっと。

私は保健室の向かう。

八賀谷君に言われたからじゃない、私の行く先はそこにしかないからだ。私は彼に言われても言われなくても、もともとそうするしかない。

もう、いやだ。

引き分けと負け試合

俺はパスを受け、走る。

点差は2点、時間は10秒と少し。

目の前に立ちはだかる登、他2名の男子。

どう考えても、俺なんかが抜ける面子じゃない。

となると、ここからシュートをして3ポイントを狙うか。

俺は一瞬そのそぶりを見せる。

登は全く動かないが、他の男子はそうも行かなかった。見事に引つ

掛って、二人の男子の重心がシュートを防ぐ為に浮く。

馬鹿か、俺が打つても入らないっの。

俺は比較的空いていた左へのスペースにボールを投げる、そこには誰もいない。敵も味方も。

とボールを投げる直前に俺の脇から、一人の男子が走りだしていた。結果的に暴投がパスへと変化する。よくあのタイミングから間に合うものだ。

その男子が一直線にゴールへ向かう、防ごうとする登。だが間にあわない。

男子がゴールに向かって飛び、片手で軽くボールを運びそれをリングに入れる。その様子は文字通りだ、他に説明のしようがないくらいに完璧だった。

得点が同点になる、残り時間は3秒。

ボールを受け取った登が笛がなるのと同時に、片手でこちらのゴールに思い切り投げつける。ボールはほとんど弧を描かずに一直線に飛んでいき、ゴールの横、その板にぶつかって跳ね返る。

そこでタイムアップだ、残り時間を今まで示していた得点板から電子音が鳴り響く。この音は耳障りだ。

「引き分けだな、八賀谷」

登がほとんど息を切らさずに俺に声をかける。

「佐才、引き分け？ふざけんな」

俺が息も絶え絶えに言った。

正直な話もう余力はないが、追いついての引き分けなどと最低の負けを認めるよかマシだ。

惜しかったな、なんて慰めあうのは興冷めだ。

「当たり前だ。延長だ、延長」

さつき点を獲った男子、張山 耕治が俺の肩を叩いて言う。

コイツも息が荒くなってはいるが、俺よりもかなり余裕がある様子だ。

俺達の言葉を聞いて周囲の一部の男子が嫌そうな顔をしたが、他の男子は他人事のようにおもしろそうだ、続けるのを快諾する。

その一部の男子の中には、俺のチームの男子もいたのだが気付かなかったことにした。

周囲の空気を気にして、文句も堂々と言えないような連中になんて気を遣う必要性が無い。

空気を気に出来ない奴は無条件で無能だけど。

試合は結局、俺のチームが負けた。他のヤツはともかく登の運動量が別格だ。俺のチームの張山と、登のほぼ一騎打ちで試合は行われ、単純に今まで余力を残していた登が勝ったように見えた。うちのチームの面子がもう少しマシだったらと思う。

俺を水増ししたかのような口先野郎と、態度のでかいうすノロデブだ。もう一人は少しはマシだったがどう考えても勝ち目が薄い。

そもそも、バスケット部員を均等に配置したとすれば、部員でなくとも実力のある佐才のいるチームが有利だ。

試合終えて、体育館の脇に歩いていった俺は壁を背もたれにして座る。

バスケットボールの振動がランダムに連続して伝わってくる。

張山が、俺の横まで寄ってきて寝そべった。

「惜しかったな、試合」

笑いながらそいつが言った。

俺も笑う。ほら来た。

「ほとんどお前一人で点数獲つたる」

「お前、なんか頑張つてたじゃん。いつもより」

「結果を出したのはお前だ」

話は繋がっていない。

それでも話を続けた。

「フェイント良かったよ」

「……フェイント？」

なんのことだかわからなかったが、順に思い出してあのシュートをしようにしてやめた行動だと気付く。変なタイミングで突然行動変更をしたせいで、妙な所に投げるしかなかったただけだった。

「あんなの偶然だ」

「いや、上手かったよ。あのゴール近くに居た奴に向けてパスすると見せかけたヤツ」

パスじゃなくて、シュートしようとしたのだが。

まあ、そういうことにしておくか。素人としては上手かったってことなんだろうけど、それでもいい。

何も言わない俺に向けて、張山が言う。

「お前、案外運動出来んのな。やっぱ体力ないけど」

「余計なお世話だ、って言うかお前と一緒にすんな」

多分俺は一般基準だ。いや、だと思いたい。

そこで、張山がなにかに気付く。

俺が横を見ると、登が突然現れたかのように立っていた。

登が張山に向かって、口を開けずに笑いかけて軽く手を挙げる。

「よう」

笑って、張山も登と同じように返す。

登は俺の横に座る。

その顔は汗まみれで、どこかそれを気持ち悪そうにしていた。

なんとなくそこで篤史がどうしているか気になり、視線を動かす。

すぐに見つかった、具合が悪いと見学している女子2名に話しかけ

ている篤史。

よくやるよな、あいつも。

目立たない風貌の割りに、意外と篤史が女子に人気のある理由がわかった気がした。

その光景から、ここでまた別の思考が頭に入る。

……具合が悪い、か。

突如俺は言語化された思考から、言葉にならない思考へと変える。映像と感覚で支配された思考へと。

俺が自らを思考封鎖していると、登が俺に小声で話しかけてきた。聞き取りにくいぐらいに小さな声だが、自然とわかる。あれほど騒がしい周りが静かになったみたいだ。

「なにがあつたんだ、コウ」

俺は顔を向けずに答える。

「ルール違反だ、登」

俺達のルールとして、日常的にはクラスメート以上の関わりは持たないことになっていた。

登はくだらない、と笑う。

「返事をしたからにはお前も同罪だよ。それに罰則を設けてない法なんて、そんなもの無いのと同じだ」

「登、お前な」

「いちいち焦らすな、どうせ言うはめになるんだからさっさと見え女か、お前は」

俺はため息をつく。

そういうお前はいちいち余計な一言入れてるよな。

口には出さない、きりがいいからだ。それにこいつの言う通り、どうせ俺は言うはめになる。俺は慎重に語るべき言葉を考えた。

「登、なぜそう思うんだ？」

「お前が人前で本気を出すわけないからだよ、たいした本気じゃないがな」

ホントに余計な一言だな。脳内で殴ろうかどうかを決定する為の緊

急会議が開かれるが、「今じゃなくてもよし」と可決される。さすが俺、大人だ。

俺の言うべき言葉が時間と共に定まる。

「確かになにかはあったみたいなんだ、それがなにかはわからない」
登は俺の言ったことの意味を考えるためにか、間を置いてから答える。

「それじゃよくわからないぞ」

「俺もだ。俺もよくわかつたらお前に言うよ」

俺は自分の右手を見た。

登はゆつくりと俺に言葉を向ける。

「ごまかしてるんじゃないんだな」

俺は頷く。真横に居る登には見えているかどうか微妙なラインだ。

だから俺は、しっかりと一言だけ登に「ああ」とそう言った。

それを聞いた登はさらに声を落として、なにかを返す。

よく聞き取れなかったが、俺には登が「そうか」と言ったように聞こえた気がした。

登の良い所は、今の関係を壊してでも自らのしたいことをしようとするところだ。そうやって壊した友情関係もあっただろう。

無自覚に友情を壊す無神経な人は多いが、こいつはそこまで考えて行動し壊すとわかっててそうする。おそらく、それで後悔はしないのだろう。

……もつとも俺達は友達じゃないけどな。

俺は自分の右手を見ながら考える。

こんなのにのんびりしていいのだろうか、と。

しかし、その答えはもう出ている。まだ早い。

落ち着け、八賀谷 コウ。

まだ時間はある、今から焦っても仕方ないんだ。

ふと、なにか目の前が静かだと思いついてみると、いつの間にか張山が他のチームの試合に割りこんで参加していた。よくやるやつだ。

どこからあんな元気が出てくるのか。

ん、ああ、頭の中が空元氣ってヤツか。

いいな、そうやってエネルギー溜め込んでく場所がある奴は。

と思うと、それを見ていた隣の男が立ち上がる。その顔には力が満ちていた。

こいつもか。

佐才登は力のこもった目で俺を見た。

「見てみる、珍しく宇都木が出てるぞ。橋本にまた怒鳴りつけられただな」

「授業に参加しろって？まあ、見りゃわかるよ」

ウツロギは積極的に授業に参加しようとしな、橋本に言われたとき以外は。

佐才は不敵に笑う、敵が増えると喜ぶ奴だ。好戦的、ないし阿呆だ。強い相手が現れたとき、コイツはまず可能な限りそいつの敵に回ろうとする。

十中八九、張山と同じチームに加勢して、二人がかりでウツロギを止めに入るに違いない。七割抜かれるが。

「……やる前から結果は見えてるだろうに」

負け試合だろう、ウツロギ一人に主力格二人を向けて五分にもならない。

……なにがおもしろいんだか。

「コウ」

「なんだよ」

「なにがあつたのかは俺は知らない。だがまあ、聞け。俺の自転車、学校に置きっぱなのは知ってるだろ」

俺は佐才の声に頷く。

「それがどうした？」

「後輪とカバーとの間に隙間があつてな、よくゴミがたまって困ってるんだよ」

「……掃除しといてやるから感謝しろ」

佐才も俺に頷いた。

「サッキュ、出たゴミはいつもの場所に捨てといてくれ。俺が処分
しとくから」

そう言っつて、張山の隣に走っていく。

本当にうらやましい奴だ、力に満ち溢れて。

でも、正直ああいう目は鬱陶しくて好きじゃない。
だから、一生礼なんて言っつてやらないことにした。

く校舎の裏にて

昼休み、西川は校舎裏の日陰に座り込んでいた。

その周囲に散らばっているジュースのパックとパンの空袋。

校舎裏はとても静かで、グラウンドとは逆の位置にありそのため人の声がとても遠く聞こえる。

西川は思う、「なんで、自分が怯えて隠れ過ぎさないといけないんだ」と。その答えは西川自身の中でも実は明白なことで、その原因は自身の隣に居る人物だった。

西川が横を見上げると、そこには茶髪でヒマワリのように髪を逆立てさせた人物が、全体重を壁に預けて不機嫌そうに腕組みしていた。
古田 恭平。

恐らくは、古田も西川と同じように「なぜ、俺がこそこそしないといけない？」などと考えているんだろう。ただその理由が自分にあるとは思っていないに違いない。

そもその原因はこの古田があつた。佐才 登に喧嘩を売ったことにある。

西川は中学の時から、彼らの世代の人間にとっては多少は名の知れた不良だった（もちろん、その範囲は限られていたが）その当時から西川は古田と組んで色々な悪さをしてきた。

それでも名が知れてるといっても、そうそう大人に顔が割れるようなことはなかった。それは西川と古田の親がそれなりの立場にあるからだが、それと同時に西川自身が気をつけてるからでもあった。

西川は学校で教師に喧嘩を売るような真似はしないし（正体がばれないように気をつけて闇討ちをしたことはあった）白昼堂々暴力を振るうようなことも実はあまりしなかった。そう昨日のようなことはいはずだった。

西川は無意識のうちに古田を睨む。

（それなのに、コイツときたらだ）

昨日の件に関しては、西川は古田が八賀谷に声をかけるのをやめさせようとした。だが、古田がその西川の忠告を聞くようなことはなかった。せいぜい、まだ手を出すなと言い聞かせることが精一杯だった。

そもそも古田に対して西川は強く出ることは出来ない。グループの他の連中もそうだ。

それは古田が理性より感情で動くような人間だからでもあるが、単純に古田が執念深くその上行動が理屈に合わないからだ。単なる口喧嘩でも、古田は相手が仲間だろうが女だろうが仕返しに暴力を振るうことをいとわない。

西川からすれば、そんな奴、敵に回すのも味方にするのも御免だったが、その古田が今ではグループのリーダー的存在だったのである。西川が古田の味方ではなくて、古田の味方は西川だったのだ。

西川の視線に古田は気付き睨み返す。それは睨むと言うよりは脅すような目だ。

「なんだ、西川。なにか言いたいことでもあんのか？」

西川は今にでも殴りかかってきそうな古田に戸惑う。

「いつ、いや、そういう訳じゃねえよ。ただ……」

「なんだよ」

「まだ佐才のこと諦めないのか」

「つたり前だろうが。アイツだけは許さねえ」

西川は古田の「アイツだけは」の言葉にわずかに表情を歪ませた。

古田はそれに気付かない。西川は言葉を続ける。

「他の奴もびびって誰も手伝おうとはしないのか、俺達だけでやるなんて無茶だろ」

「は？お前なに言ってるんだよ、あいつらは所詮同じ高校生だぞ。それにうちの高校の連中が手を出さなかったって、他の高校の奴に声かけりゃいいじゃねえか」

「他の奴って、同じ結果になるだけじゃねえの」

「いちいちびびってんじゃねえよ、人質でも何でもとりゃいいんだ

からよ」

その手はもう使って失敗した、普通の奴ならたいていみんな人質になるようなものがあるからだ。

もう話しても無駄だと判断した西川は、会話を終わらせる為に一言告げた。

「ああ……そうか」

西川は古田から目をそらす。その様子を見た古田も西川に興味を失って、視線をはずす。

視界から古田をはずしてようやく安心した西川は、言葉にせず毒気づいた。

（アイツだけはとか熱くなりやがって。そもそもお前が今まで他人に仕返ししないことがあったかつての、それでどんなに俺が迷惑こうむってるか考える。だいたい昨日あれだけのことをされといて、よくこりねえな）

そこまで考えて西川は震えた。

他人事のように考えたが西川もそれに巻き込まれたのだ、正直な話他人事のように考えなければやっていけない。

自力でなんとか脱出が出来たからよかつたものの、あのままでは助けを呼ぶしかなかった。いや、脱出してからはもつと大変だった。

西川は様々な複雑な思いに駆られる、男としてとか以前に下手をしたら二度と人前に出れなくなるところだったのだ。

西川としては、もう思い出したくもない。

古田の一人の行動に自分がここまで巻き込まれ、西川は自分を「一方的な被害者である」と考えていた。ある一面においてはそれは事実ではあったが、佐才の方からすれば西川は加害者でもあるのは間違いない。それを考える余裕は西川にはない。

西川は古田の様子をうかがう。

古田は貧乏ゆすりをしながら、ポケットに手を伸ばしてはやめる行動を繰り返している。どうやら煙草に手を伸ばそうか決めかねているようだった。

西川は思う、古田がこんなに反応するのは今までにほとんど負けた経験がないからだ。佐才には正面切って2度も叩きのめされている。確かに西川も古田も多少腕に覚えはある。過去に相手に喧嘩を吹っかけたことも少なくない。言葉使いのなっていない奴、態度の気に入らない奴、目つきがむかつく奴、金を持ってそうな奴、腹が立っていた時に偶然近くにいた奴、いろいろいたが勝てない時はまずなかったと言ってもいい。だからこそ、ここまで古田も反応するのだらう。

自分達が強かったわけではない、いつも5、6人。多い時は14、5人も的人数で数に物を言わせて一方的にいたぶった。ようするに勝てない勝負はしてこなかったただけだと言える。

西川はそれをわきまえていた、自分の力が決して強いものではないと。そのために手を出しては行けない連中がいるのも知っていた。それでも西川は自分から見て、あんな真面目なだけがとりえのような連中が、その手を出してはいけない連中だとは思っていないかった。最初の頃は舐めきっていたのである、彼らは少々勘違いをした馬鹿だと。それが今ではこの様だ。

（佐才 登、あいつらはいったい何者なんだろうか）

結局、西川の考えはそこに尽きる。

というよりは、彼の思考はそこに逃げるしかない。それ以外のことを考えると自分の不都合な点ばかりが見えてくるからだ。

それを考えてまで行動するような能力も西川にはない。これは西川自身も知らないことであつたが。

古田が壁から身体を起こす、そして西川に言った。

「お前、ゴミ片付けておけよ。最近、そついうのうるせえから」
西川は周りを見渡した、確かにゴミが周りに散らかっている。でもこれはほとんど古田の出したゴミだ。西川は学校のパンなど食べない。

西川は腹立たしく思ったがそれを態度に出さぬようにして、古田に

聞き返す。

「お前は？」

「決まってるんだろ、佐才の野郎に一泡吹かせてやるんだよ」

古田は西川の意図も気にせずそういった、西川としてはその態度がまずまず面白くない。西川はあえて不服そうに言った。

「そんなこと出来るわけねえよ、下手したら今までの写真ばら撒かれるんだぜ？それも昨日の分もだ」

「出来なくしてやればいいんだろ、簡単だ」

簡単なはずはなかった、それならこんな所でこそ食事などならない。古田はいまだに佐才達を普通の真面目野郎と勘違いしているのだらうか、まだ自分の力でどうにかなると考えている。

そのまま古田は西川を見もせずに立ち去った。

西川はその後姿を睨みつける。が、姿が見えなくなるまで見るようなことはせず、ため息をついてゴミを片付けるためにしゃがみこんだ。

「なんでいつも俺が……」

そういつつも西川は手を休めはしない。

西川は思う、あいつさえ古田さえいなければもつと楽に高校生活を楽しめたはずだ。

「古田さえいなきゃ、いや、佐才もだ。それならまた好き勝手できるのによ。こんな所で飯を食わなくてもいいんだし」

「そうかい」

背後から男の声、西川はあせって振り向く。教師ならまだしも、古田が引き返してきたのだとかなり厄介なことになる。

だが、振り向いたとたんに西川は安心した表情になった。

「なんだ、あんたか。誰かと思った」

「なんだ、とはなんだ。そんなに焦って古田がどうかしたのか。もし悪巧みでもしてたのなら俺も入れてくれると嬉しいんだけどね」

「別に」

背後に立っていた男は笑った。

笑いすぎて、しゃべるのも一苦労だといった様子で男は口を開く。

「そうか、別にか」

「なんだよ」

「いや、別に」

再び男は笑う。西川はその様子に腹を立てた。

それでも西川はゴミを片付け続けるながら話す。

「うぜえな、用もないんだったらさっさと行けや」

「いや、用はある」

西川は面倒そうに男に立ち上がって向き直る。その時、今まで笑い声を上げていたはずの男に表情が無いことに気付いた。

「……なんだよ」

「たいしたことじゃない、お前の望みを叶えてやるよ」

「なんだと？」

「することは大して変わらないんだがね、ただ文字通り手が足り失くなってな。ちょうどいいだろう？ きっとお前には性にあつてるんだよ、それが」

西川は顔をしかめた。男が自分を馬鹿にしているのか、それとも頭がどこかおかしくなったのか。西川はそれを判断しかねていたのである。

とりあえず西川は舐められないように声を荒げる。

「意味わかんねえよ、さっさと用件を言えつってんだよ！」

男はそう言われて考え込む、そして頭の中でなにかが閃いたのだろう。左手の指をパチンツと鳴らした。校舎裏に響くほどにそれはよく鳴り響いた。

「ああ、アレだ。アレ」

「アレ？」

男は西川に顔を向ける、その顔は未だ無表情だった。しかしその中で不自然なほどに輝く瞳。男が頷くのを見て、西川の思考が凍りつく。

(こいつ、誰だ。こいつこんな顔してたか？ 本当に……)

西川の目に映る男の口がゆっくりと言葉を紡いでいく。

「バイトだよ、食肉の」

男のその言葉を合図としたかのように、西川に向かって小指程の無数の影が飛び掛っていった。その影に西川が埋めつくされていく。悲鳴はなく、校舎裏は静けさを保ったままだった。

加藤先生が流し台から、乾かしたばかりのカップを取り出す。それに先生は熱いココアを注いで持ってきてくれた。

「はい、やけどしないようにね」

慎重な手つきで私が受け取りやすいように、カップの角度を調節しながら差し出した。

私はそれを両手で受け取る。

「……………ありがとうございます」

まだなんとなく目がはれているような気がする。

「今日暖かいからアイスの方がいいかなって思ったんだけど、ホツトの方が落ち着くよね。とかなんとか思ったり」

私は先生の言葉に笑顔を形作る、あまり無理なく見えるように。

それを見て、先生も私に笑顔を返した。それが作り物かどうかは私にはわからない。私もそう出来たらいいのに、と最近よく思う。

加藤先生はヒマワリの柄のカップでココア以外の何か、たぶんコーヒーを飲んでいた。

「藤咲さん、あれでしょ。本当はコーヒーあんまり好きじゃないんですけど？」

当然の問いに、私は戸惑う。

「いや、そんなことは……………」

「うん、嫌いではないと思うよ。でも好きじゃないでしょ」

「……………はい」

加藤先生は私の言葉を聞いて頷いた。

「やっぱりね」

私にはこのことがなんだかとても先生に悪いことをした気がした。なんだか今まで嘘をついていたみたいで。

私は先生に尋ねる。

「もしかして、顔に出てましたか？」

「うん、なのかなあ。それとも、違う、なのかなあ？」

先生は上を向いて考えながら言う。どうやら私は難しいことを聞いたらしい。加藤先生は思いついたように言った。

「えーとね、顔に出てないから分かったの、了解？」

そのまま先生は顔を下げて、私を見る。私にはよくわからなかったが、そう言うことが出来るような雰囲気じゃなかったたのでやめた。

加藤先生は私の無言を了解と受け取ったらしい。それで満足したのか、私の返事を待たずにカップに口をつける。

そして、ボソツと言う。

「でも今後も飲ませるけどね、コーヒー」

いちいち私をどうしたいんだ、この人は。

私も先生に遅れてココアを飲むことにした、熱いものは苦手なのでゆっくりとカップに口をつける。すると、もうカップの中身は温めの状態だった。猫舌の私からするととても飲みやすい。

（あれ？ やけどに気をつけるんじゃないかったっけ）

私はココアを飲みながら、先生を上目遣いに見る。

きつと、ただ言ってみただけなんだろうな、この人の場合。私はそう結論づけた。

なにも聞いてこない先生を不審に思って私は聞く。

「先生」

「ん、なーに。あ、そのココアだったらね。結構ね、高級品なんだよ」

「そうじゃなくて」

「なあに？」

私は呼吸を落ち着ける、大丈夫だ。さっきよりも。

「どうして、なにも聞かないんですか」

加藤先生はわざとらしく首をかしげる。ぶりっ子してる女の子みたいに、わざとらしい首のかしげかただった。

「私が、あなたの、なにを、不審に思っただけを聞くと思うの。説明して」

なぜか先生は、一言づつはつきりと区切って私に聞いた、どういう意味があるんだろうか。

「なんでそんなこと聞くんですか」

「さっきの質問にそっくりそのまま返すわ。私がおあなたに質問したのは、あなたがなにかを聞いて欲しくてさっきの質問をしたと判断したからよ。質問に質問を返さないで、それが答えじゃない限りはね」

加藤先生は「それが原則よ」と言って再び、カップに口をつける。今日の私には先生の言っていることの意味が全くわからなかった。とにかく、私は先生の質問に答えることを優先することにする。

私は何も考えたくない。それなら、他人に判断をまかせた方がいい。「あの、それは私が朝から貧血を起こして倒れて、起きた後もずっと泣いてたからです」「訂正、泣いては泣き止んでを繰り返してたんでしょ。いくら水分補給をさせても目から出てくるんだもん、一生続くかと思っただわ」

私は先生の様子がいつもと違う気がした。

「もしかして、先生。怒ってますか？」

「ええ、知らなかったの？」

先生が笑顔で私に言う、それには答えようがない。この場合なんて答えても喧嘩を売っているような気がする。

加藤先生はその毒気のない表情のまま、毒気がないとは思いがたい言葉を口にする。

「とりあえずそれ飲んじやいなさい、どうせ朝食も摂ってないんだから。まあ、仮に摂ってたとしてもあれじゃあ意味なかったかもね」たぶん、先生は私が泣きすぎて吐いてしまったことを言っているんだろう。昨日の晩からなにも食べてないから胃液以外なにも出てこなかったんだけど。

さっきまで先生は、私がどれだけ泣いても必要最低限のこと以外なにも言わなかったのに、泣き止んで多少落ち着いてからは、いきなりこんな言葉をかけてくるようになった。

どう考えてもあんまりいい気分じゃないけど、妙に気を使われたり、慰められたり、励まされたりするよりはいいのかもしれない。

私はそう考えることにして、ココアを飲み干すことにした。ちょっと私には量が多くて一息では飲めない。

その私の様子を見て先生が言った。

「ゆっくり飲みなさい、今まで胃に何も入れてないんだから」

私に結局どうしろって言うの、私はココアを飲むのをやめて先生を見る。

その視線からなにかを感じ取ったのか、先生は口を開く。

「最初から急いで飲めとは言ってないでしょう?」

「先生、私はなにと言ってません」

私はそう言いつつも結局は加藤先生に従った。

少しづつ、ゆっくりと自分のペースで飲む。

口をカップから離すたびに、息を吐き出す。

そうすることで私はようやく自分を取り戻せた気がした。

同時にそれが私にとってどんなに難しいことだったかをはっきりと実感した。そんなことは、もう今さらのはずだったけど。

加藤先生は私を見て、カップを片手になぜか頷く。

「それじゃあ、そろそろ答えてもらいましょうか」

先生はカップをテーブルに置く、それから私に目を向けた。いつもの加藤先生とはどこか違うイメージの目。とても真剣で大人な目。

その目で私を見据えて、先生はそれがとても大切なことであるかのように言った。

「ねえ、藤咲さん。あなたはどうしたの?」

私はどこから話せばいいのか、なにを話したらいいのか悩んだ。というより、どこまで話したらいいんだろうか。私の口は閉じたままだ。

だけど、いつまで経ってもそれ以上先生は何も他に言わない。

ずっと真剣なまなざしで私の言葉を待っている先生を見て、私は困惑する。

なにを言ったらいいのか。

説明できないことばかりだ、それに人に言ったからってどうしようもない。

私はどうしたらいいのだろうか。

言いようのないことを言葉には出来ない、私の中にはそういったもののしかなかった。

でも、ふと気付く。先生は私の言葉を待っているんだらうか。

私は先生の目をもう一度見た。それから息を呑む。

いや、違う。待っているのは言葉じゃない。

それがわかると同時に次第に私の決意が固まっていく。

私がこれからどうすればいいのかを、私は決めた。

思考分裂と金檻戒

放課後、試合に負けた張山に教室掃除に付き合わされた俺は、いつもより遅れて美術室への階段を登っていた。なんで登がないんだよ、とぼやくと、登が俺達との試合に勝ったかららしい。

……不条理だ。

最初に鍵を取りに行くのではなく、面倒ながらも先に美術室へと向かうことにしたのは、鍵を確認する必要性があると思つてのことだ。昨日の様子から、ウツロギなどの新入部員が俺より先に鍵を開けている可能性がある。

というか、そうであつて欲しい。あの教員を見つけるのは一苦勞だし、他の生徒に注目されそうで嫌だ。

とまあ、俺は上辺だけは淡々として、だがその中で美術室の鍵ごときに祈りをささげながら、歩いてた。

俺は、何かにものすごく期待をしながら行動してしまうことがよくある。

意味がよくわからないかも知れないが、具体例を出すと家に忘れ物をした時に「実は俺、学校においてなかったけ？」などとロッカーを確認するとか、盗まれた傘（しかも、お気に入りの）が戻つてないか時間を置いて何度も確認するとか、まあそんなようなことだ。いい加減、わずかな可能性に望みをかけるようなことをするのは、さつさとやめた方がいいと常々思つてはいるのだが、それでも期待することをやめるのは難しい。

現状を確認することにいちいち期待をかけていると身が持たないのだが。

ん？ああ、また思考が脱線している。

実際の問題として、顧問を探しに行った後に美術室の鍵は開いていることに気付く、と言うそんな事態に遭遇するよりはずっといいはずだ。

(自分の行動はそれほど無駄ではない、だから何も問題ない)
俺は自分に対してそう確認の意を込めて頷いた。

こうして考えながら一人で頷いている姿は、客観的に見ているとおそらく奇行でしかないだろう。

だが周囲には誰もいないから全く持つて問題ない、そもそも人が居たらそんなことはしない。

もし、人前でそんな一人で頷くようなことをしたら変人呼ばわりにされてしまう。

変質者のド変態として確定されてしまっている以上、変人だけは死守しなければ。

ふと、俺は歩くのをやめる。

(もしかして気にしているのか、俺は)

俺がそう思考した瞬間に、頭の中で声が響く。

思考をまとめるために仮定の人格として置かれた思考の声が。

(いや、そんなはずはない。だいたいそんな場合じゃないだろう)

頭の中でその言葉に反論する思考が現れる。俺はそれを止めようとするが、思考停止に失敗する。

(そんな場合じゃない？なにがそんな場合じゃないだ、勝手に大騒ぎしてるだけだろうが)

やばい、その思考の発言のせいで他の思考が騒ぎ始めた。

(違う、勝手にじゃない。これが確認必要な事項である以上そんな自暴自棄な考えは許されない)

(なにが自暴自棄だ、なにが必要だ、なにが許されないだ？自分が自分の考えで行動してなにが悪い)

(その通りだ。あてにもならない妄想なんか気に気をとられてないでいつものように行動しろ)

(妄想なんかじゃない。その思考が他人を傷つけるんだ、自分の考えや都合だけに固執するようなその思考が)

(傷つけることのどこが悪い、自分の考えで行動しないよりはマシだ。自分は自分、他人は他人だ。俺は他人の考えには干渉しない、

だから他人のために自分の考えは変えない)

(そのどこが自分の考えだ、甘えるのもいい加減に……)

「ああ、うるさいぞ！お前ら！」

俺はその辺の教室の扉を思いっきり蹴り飛ばした。

一気に周囲が静かになる。

何だか頭の中が空っぽになったみたいでスッキリした。

息を吐き出して、肩の力を抜く。

そうして俺は再び歩き出す。

すると後ろの教室、さっきまで俺の目の前に合った第一理科室の戸が開く音が聞こえた。

振り向かずに無視して俺は歩く、そんなの面倒だから。

「おい、八賀谷」

仕方なく俺は振り返った。

そこには俺のクラスの担任が教室の戸によしかかり立っていた。

相変わらず眠そうだ、無精ひげが寝起きっぽい雰囲気を出している。

まさか理科室で寝てたんじゃないだろうな、この人。

「今の……お前か？」

俺は首を傾げる。

「何がですか」

何も知らない人間の声のトーンで俺は言った、例えるなら「は？なにそれ？」ぐらいのトーンと言えはわかるだろうか。

担任はあくびを我慢しているかのように口の形を歪めて頭を掻く。

「いや、今大きな音が聞こえたよな。ついでにこの戸揺れただろ」

「いえ、知りませんけど」

「……お前の怒鳴り声も聞こえた気がするんだが？」

「はあ」

そう言われても俺は何の話だか、全くわからない。

いや、本当にわからないな。なに言ってるんだ、このおっさん。

「今、部活で急いでるんですけど行ってもいいですか」

俺は担任に向かってそう言った。

担任は目をこすりながら聞き返す。

「だから、お前じゃないのか？」

「俺が……ですか。先生そう思うんですか」

「ああ？」

俺の言葉を聞いた担任が眠そうな顔をよりいっそう眠そうにしかめた。普通に見たら不機嫌そうな顔になったとも言つう。

「……わりいな呼び止めて、部活それなりに頑張れよ」

やる気なさげに手を振る担任。かなりどうでもよさそうだ。

なら、呼び止めんなよ。

そうは思ったが、俺は余計なことを言わずに、それに一言「はい」とだけ返事をして歩き出す。どうも何か忘れているような気がしたが、気にしないことにした。

きつと、面倒なことだろう。思い出さないほうがいい。

俺はいつものように。いや、いつもよりも軽やかに歩き出した。

*

俺は美術室の前で立ち止まる。

今日はなんと特に何事もなく美術室にたどり着くことが出来た。とても喜ばしい。

美術室の戸は閉まっけていて、鍵が開いているのかいないのか見た目では区別できなかった。

とりあえずその戸に手をかける。手に力を入れると、何の抵抗もなく戸は開いていった。

……これはこれで張り合いないな。

俺はそのまま戸を完全に開けて中に入つていった。

教室には勿論既に人が居た、ここまでは予測どおりである。ただその人物はウツロギでも新入部員でもなかった。

その人物は窓を背にして椅子に座っており、木製のイーゼルにボードを立てかけて絵を描いていた。服が汚れないように制服の上着を

脱いでその上から白いエプロンを着ている。時折見える腕の様子から、ワイシャツの袖を捲っているのがわかった。

しかし、そのイーゼルに立てかけられたボードに阻まれて顔を確認することが出来ない。それでも俺にはその人物が誰なのかわかった。その人物が顔も見せずに、俺に声をかける。

「どうしたんだい、部活をするために来たんだろう？なら、早く今朝の続きを始めたらどうなのかな」

何か回りくどく感じるような言い方で、その人物は言う。

間違いない、やっぱり金檻だ。

俺はその声に必要なほど感情を押し殺した声で対応する。

「元よりそのつもりですよ、先輩」

この人は嫌いだ。

言動が全部わざとらしい、いちいち本音を隠しているような振る舞いがムカつく。

演技をするために演技をしているような様が、どう考えても俺に喧嘩を売っているとは思えない。

俺はなるべく、金檻の方を見ないようにして準備を始めた。それもなるべく出来る限りの距離を置いて。

準備と言っても今朝に使った道具は、全部隣の美術準備室に置いておいたので、ただそこから道具をそのまま運んでくるだけでいい。

他には、せいぜい水を汲んでくるぐらいだ。

俺は準備室と美術室を往復して、絵を描くための準備を進める。

その客観的に見ても忙しそうの中で、金檻は俺に話をかけてきた。

いつもなら「後にして下さい」とか「今、忙しいので」などと言って会話などしないのだが、この日は少々事情が違った。

「八賀谷君、今朝は一人だったね」

俺は道具運びを中断して聞き返す。

「……どういう意味ですか？」

「昨日は朝から彼女と一緒にだったろう」

「知りませんね」

「嘘はいけないよ、実際に見たんだから」

俺は金檻に聞こえない程度に鼻で笑った。

もしかして俺にカマでもかける気が、コイツ。そんなものに俺が引っ掛る訳がない。

あくまで冷静な態度で俺は金檻に対して臨む。

「それはどこですか？……言えないですよ、そんな事実はないんだから」

俺は勝ち誇る。ここで焦ったりはしない、それは相手の思う壺だ。

「うん、実はずっと隣の準備室にいたんだ。君は気付かなかったみたいだけど」

いや、いるわけがない。だからそんな手に引っ掛るか。

「嘘ですね、そんなわけがない」

「なら言おうか、『いや、このケーキすごく美味しいよ。本当に』だっけ。ああ、証拠としてはまだ足りないかな？じゃあ『また、こ

うやって藤咲さんと……』」

「ちょっと待って下さい」

俺は金檻の言葉を遮る。

いや、本当にちょっと待て。まさか本当にいたのか？あんな朝早くになんているんだ。朝からあの場所にいたんだとしたら……。

わかった。

「金檻先輩って美術室に住んでるんですね」

「そんな訳ない、冷静に考えたらどうだい。そんなことは常識的に考えてありえないだろう？」

「アンタならあり得るんだよ。」

結局、金檻は否定するだけで、そこに居た理由を説明せずに話を続けた。なんとなく眼鏡を中指で上げるしぐさが目に浮かぶ、その口元には笑み。

「そんなことよりだ。なぜあんなに彼女の様子がおかしかったんだと思う？」

「知りませんよ」

俺は興味がないと言わんばかりに、準備を再開する。そっけなく歩き出した俺に、それでも金檻は気を悪くした様子もなくまだ話しかけて来た。

「君にならわかるかもしれないが、彼女はどこか狙われやすい感じがないかい？狙いたくなるの方が正しいかもしれないが」

「言っている意味がわかりませんね。要するに見た感じ、か弱そうで大人しそうで、もし何かあっても抵抗しなさそうってことですか」「ひどいことを言うね、君は」

言い出したのはアンタだ。
どうもコイツは、俺の神経をいちいち逆なでにするような言葉を選んでくるかのようだ。いや、「かのようだ」ではなく絶対に言葉を選んでは。

「言いたいことは全く違うんだけどね。わからないなら別にいい別にいいなら言うな、実はお前は藤咲じゃなくて俺を狙ってるんだろ。」

そう思った瞬間に、全身が寒気に襲われた。うわ、我ながら嫌なことを考えてしまった。

「どうしたんだい、そんなところで立ち止まって」

「先輩が話しかけるからですよ」

コイツと話していると頭痛がする。

一通りの道具を出した俺は、椅子に座った。

位置的に半分だけ、金檻の顔が見えるが気にせず、朝の続きを描き始めることにして適当な絵の具を筆に付けた。

と言っても、朝はほとんど絵に手を出していないので昨日と比べると進行状況に変わりはない。

まあ、どこかのコンクールに応募するとか、校舎のどこかに展示するとか、そう言った考えは一切無いので急ぐ必要性は無いといえば無い。

そもそも、自分の描いたものを他人に認められたいなんて思ったことすらないので、作品を完成させる必要もない。完全に自己満足だ。

個人的に言えば自己満足以外を理由として行動したくない、出来ることならだが。

いつものように余計なことを考えながら、何も役に立たないことを自分の好きなようにする。なんて贅沢なんだろうか。実際、最高の時間の一つだと思う。

「そういえば八賀谷君、最近物騒になつてきたね」

こうして、口を挟む空気の読めない馬鹿さえいなければ、だ。とにかく俺は返事をしないことにした。

馬鹿に付き合つと馬鹿がうつる。

「ほら、君も知ってるだろう。今、巷で……というよりこの街で有名となりつつある連続猟奇殺人だよ。若い女性を狙つた、ね」

ああ、知ってるよ。不本意ながらな。

だから、俺に話しかけんな。

「あれだけどね、内臓が半分以上持ち去られてるってテレビじゃ放送されてるらしいけどね。もっともテレビは見ないので、実際そうだと確かめたことはないのだけど、それはひとまず置いておくとして、だよ。正確に状況を述べるとするならば、胴体部分のみにおける内臓を全てどこかで摘出して、それ以外の部分を捨ててる、と言つた感じなのだよ」

俺は思わず金檻を見る。

コイツ、なんでそんなことを知ってる？

「まあ、素人に出来ることじゃないね。妙といえば妙なのが胴体部分以外の臓器、眼球や脳には手付かずなのだよ。どうでもいいといえばその通りなんだけどね」

別に臓器に興味があるわけじゃないかもしれないし、と金檻は一言置く。

俺はなぜか、今自分が塗っている色が赤だったことに嫌悪感を抱き、その色を選んだことを後悔した。

いや、俺が今さらそんなことで気分を悪くするか。実際に見たわけでもあるまいし。

「ただ、最初の一件目の事件は若干趣が異なる。なんとというか、持ち去られていた内臓がたった一つだけ、肝臓のみだからね。それだけを目的に殺した感じがする。単純に時間が無かった可能性もくはないがね。肝臓ってそんなに時間がないときに真っ先にとろうとする臓器かな？簡単に摘出しやすい、のか、肝臓は魅力的な存在なのか」

金檻は演技じみた口調を崩さず、手を動かし続ける。コイツにとつて、この程度の話は何かの作業のついでに話すことでしかない。

「実はこの事件の最初とされている犯行は、実は別件なのではないかと疑っているのだよ。といっても、それでも何一つ何の説明もつかないような不可思議な事件ではあるし、なんの解決にもならないわけだね」

俺は席を立ちこの場から逃げ出したい衝動に襲われるが、自分のそんな心の声など聞かなかったことにした。

俺のことなんかはどうでもいい、それよりも。

「金檻先輩」

「ん、どうしたんだい。急に改まって」

からかうように言う金檻の声を無視して俺は言った。

「なぜ、貴方がそんなことを知っているんですか」

半分だけしか見えない、金檻の顔。

「なんと言うか、それは今さらな質問だね。けど別に問題ないことにしようか」

金檻が眼鏡を中指で上げ、その表情から笑顔を消す。そんな光景が俺の目に映ったような気がした。

「それはね」

薄く、氷のような笑みがその無表情なイメージに足される。

「この金檻 戒がこの事件の第一発見者ということだからだよ。八

賀谷 コウ」

わかった、俺が気分を悪くしているのは事件に対してじゃない。

コイツに対して、だ。

思考が僅かに冷静さを取り戻す。

俺が金檻にその発言の意味を問いただそうとした時、ある光景が突如として視界に映し出された。

最も、その光景を見たのは本日二度目でもあったのだが。

く藤咲マミとユミマタ

「それじゃあ、私帰ります」

私は鞆を手に持って席から立ち上がった。

加藤先生はカップや皿を洗いながら、私の方を見た。

「あら、今日もなんだか早いのね」

「担任が会議なので、話がまた先延ばしになったんです」

「そう、丁度よかつたわねえ。じゃまた明日ね、藤咲さん」

加藤先生がなぜか意味ありげにウインクして来た。

私は笑い返す。

「はい、また明日よろしくお願いします」

どこか満足気な加藤先生の笑みに送られて、私は保健室を出た。

窓をみると日が傾きかけているみたいで、空が若干赤みがかつていた。

(あ……そういうえば、八賀谷君に謝らないといけないなあ)

自分が忘れてたことに本気でビックリした。

まあ、いいよね。

明日も会うことが出来たらってことで。

もしかしたら、まだ彼は美術室にいるのかもしれない。

けど、わざわざ会いに行くのも気が乗らなかつた。

(そんな、「心残りなくしておこうか」みたいなことしたくないし。

やっぱ、カツコ悪いよね)

私は出来るだけ力強く頷いて、玄関の方へ向かっていく。

行き先は決まっていた。

どこかはわからないけど、とにかく近い場所。

すぐにたどり着く玄関、私は靴を履き替えた。

そして、耳を澄ます。

方向は公園の方。もし、予想が正しいなら、昨日あの変な男の先輩に声をかけられた場所だろう。

(そう遠くないとは思ってたけど、まさかこんなに近かったなんて) 今から心の準備をしている暇もなさそうだった。でも、別にいい。

心の準備が整ってなかったとしても、出来ることに変わりがあるわけじゃない。むしろ出来てないからこそ、自分の覚悟を示せるのかもしれない。そんな考えが私の中に生まれる。

それと同時にそんな自分にどこか違和感を感じた。

まるで肝心な何かを失くしている様な、見失っているような感覚。

(なんだろう、これは……)

それは私にとって前にも感じたことのある感覚だった。

いつも私はそれを心のどこかで感じていて、誰もがそう思っているのかとぼんやりと考えていた。でも、今私はそれをはっきりと感じている。

明確にそれを言葉に出来るほど。

(そう、これはきつと……誰もが感じ思っているはず。いつも心の中で)

私はきつと、それを、その感覚をまた忘れてしまうのだろうか。それが少しだけ私を悲しくさせた。

*

獲物は近い、ミマタは身体を震わせた。

いつものように、そう望むだけで獲物は自らミマタの元へ寄ってくる。

まるで、自身が狩られる事を望んでいるかのように。

ミマタはそれを不思議に思うことはなく、ただそれだけの自然な現象としてそれを捉えていた。

つまり、目を凝らせばよく見える。耳を澄ませばよく聞こえる。

それに等しい。ただそれだけの、事象。

あって当然の常識にして、結果。

ミマタにとって、その獲物が自分の前に現れるということは、何一つ疑問に思わないはずのものだったのだ。

今ミマタは、路地裏ではなく、ミマタは未だ遠くにある獲物（恐らくは学校にいるのだらう）を仕留めるため、この公園に多くある木の一つに潜んでいた。

自身が路地裏を出ることを恐れていたことは、最早憶えていない。犬のように、その肘の辺りから切断された両の腕を前足として立ち上がる。

ミマタは白衣の男から一つだけ指示を受けていた。

それは、狩り損ねた獲物を狩ること。

ただ、それだけ。

その指示の意図がミマタには理解できる。

一つは、どうでもいいことだが目撃者を消すこと。

これはミマタを動かすための、一応の理由に過ぎない。そうミマタは判断している。

本来、そんな理由をつける必要性は男にはないはずだが、実際にそれを理由として指示をしている以上はそうなのだろう。

ミマタを動かすためだけの理由である、と。

（いくら奴でも、さすがに面と向かって「死ね」とは言えんらしいな）

二つ目に、妨害者をおびき寄せるための、それは餌としての意図だ。今まで、餌を集めるために動いてきた自分が、今度は自身が餌にされるとは皮肉な話だ。

いや、既にもう自身は餌だった。

だが、そう理解したことに対し、何かをするという発想はもはやミマタにはない。

なぜなら、そういうものだからだ。

そうであることに理由などあったとしても、その意味をなさない。スツと音もなく、とミマタは獲物のいる方向へと向き直った。

日も暮れてきており、周囲一帯のその光景も赤く染まっていた。

そろそろ狩りの時間である。

学校の授業はとうに終わり、部活動を行う生徒を除けば、多くの生徒達はみな既に一帯を通り過ぎていた。

なぜか、獲物は未だ校内に留まっているようだが、理由があるとなかろうと今のミマタには関係のないことだった。

ふと、変化に気付く。

獲物は建物から出、こちらへと向かっている。しかし。

(……走っているのか?)

真っ直ぐにこちらに向けて近づいてくる、それも明確な意思を持つてのことだろう。

(なんだ、これは)

確かに、自ら獲物はミマタの元へとやって来る。

しかし、それはあくまでミマタの意志によって、なぜか獲物が来るということであって、獲物が自らミマタを目指して来る、なんてことは今までに一度もないことだった。

どうしようもない違和感。

目を見開いても度の合わない眼鏡を掛けているかのような、耳を澄ませとも水でも入っているかのような、なにか強烈なフィルターを通して得体の知れない感覚がミマタを襲った。

と、ミマタの前に獲物の姿が現れた。

昨日と同じ、制服姿の女子。

暗く、姿かたちをしっかりと見ることは出来なかったが、間違いなく昨日の獲物と同じ臭いだった。

しかし、獲物だったはずの少女のその目は、潜んでいるミマタをしっかりと映していた。

少女は口を開く。

「貴方が……そうなのね？」

そのはつきりとした声を聞いた瞬間に、ミマタは再び身を震わせた。恐怖によって。

壊れた本気とサボタージユ

「どうもー、ミノリはちゃんとやってる？」

元気良く橋本アカリは美術室の戸を開けた。

しかし、そこに見覚えのある顔はいない。

ただ一人、自分より一学年上であろう生徒がいるだけだった。

「えっと……」

周囲を見渡せば、一人分の美術道具が放ってあった。

橋本は考える。

これは宇都木ミノリのものなのか、それとも八賀谷コウのものなのか。

「誰かをお探しかな」

戸惑っている橋本を見かねてか、その先輩に当たる生徒が声をかけてきた。

柔らかそうな微笑。

橋本は頷く。

「ええ、まあ。……あのー、貴方は美術部の方ですか」

美術部で活動している以上は当然ながらそうなのだろう、本来ならば無駄な質問だ。

しかし、一応の確認、もしくはは続く言葉に向けワンクッション置くという、会話の流れを考慮する手法を彼女は意識せず重視した。

だが、会話の流れなどあつてないようなもの。

彼女に言葉に対して続くのは、涼しげで、かつ自分のことにしか興味がないような声。

「いや、勝手にここを私物化している者だよ。よって部員ではない」と「ふむ」とその声の主は一人で頷き、そして聞いてもないことを語りだした。

スラスラと。

「とは言っても、それを問題として取り上げられたことは今のところ

るないがね。つまりは、今ここでこの教室を、無断でありながら、一切の問題として取り上げられず、今まさにこうして占拠している人物こそは、まさにこの教室の主と非公式であるなら言えるのではないかな。などと、戯言を並べてみたわけだが」

会話の流れを重視した配慮。そんなものはコミュニケーション能力が一般的な基準にある人間にのみ、効果を発揮するものだった。

そうして、語り終えた果てに、その時点でようやく橋本に気がついたと言った風に、その視線を向けて先輩に当たる生徒は語る。

「さて、どういったものだろうね、橋本さん」

なぜか、自分と会話しているはずなのに、会話の対象から外されているような気分を味わっていた橋本は唐突に名前を呼ばれて驚いた。「あの……どうして、私の名前を？」

「生徒会役員だろう、君は。と言うことは、他の生徒が君の名前を覚えていても、不思議でないのではないだろうか」

その質問を予期していたのである。すぐに答えは返ってきた。

そうは言っても、生徒会役員は二十名以上いる。その中でもまともに人前に出るのは、会長ぐらいだ。あとは数に埋もれてしまい、普通は誰も覚えてはいない。

異常な認識、会話。橋本はこの人物に心当たりがあった。

「あの、もしかして金檻先輩ですか？」

「ふむ、その通り。確かに今、君の目の前にいる者が金檻 戒だ。

しかし、君のマネをするわけではないが、なぜわかったのかね。いや、そもそもなぜ名前を知っているものかな。これでも一生徒にか過ぎないつもりだったのだけどね」

噂には聞いていた。二年生に三大名物的生徒の一人、金檻 戒。「これがあの、金檻先輩か」と橋本は感動とも嘆きともはつきりしない感想を抱いた。

一度だけでも、一目見たいと思っていたが、まさに、噂どりの人物だった。

（と言うか、二年のクラスにまで行ったけど一度も見ただことなかつ

たんだよなあ……)

そう思っている間にも、変わらずどうでもよさそうに、しゃべり続ける金檻。

「これは予想を裏切られたね。いや、予想なんてしていなかったわけなのだが、この言葉はもし予想していたら、と言う仮定に基づく言葉だね。そもそも、いちいち生きていくことに予想を立てている人間などいないと思うわけだよ。と言うことはこの言葉はそもそもそういった意図でないと使えないのでは？などと、愚考したのだがね」

橋本はなんとなく悟る。

自己中心的思考が強い人間は、相手の言葉を聞かずに、自分の話したいことを話そうとする。ただし、情熱的に、感情的にだ。

自分が一番だからこそ、自分の話したいことに熱意を持ってしまふ。では、この人物は？

笑顔ではあるが、特に熱もなく、むしろ涼しげな、冷静な様。それでいて、こちらの意図には考慮がない。

その答えは一つ、きつと、どうでもいいのだ。

自分の意図も他人の意図も。

だから、気にならない。

一番があるから、他のものを見ない。一番がないから、他のものを見ない。どちらにしても、普通の会話にはならないと言うだけだ。

橋本はその感想に納得する。

どちらがいい、などの考えはいらない。

そんな人間が正しいか、間違えているかなんて思考はこの世に必要な。ない。

現実にもうがある以上、そういうものだと考えるのが正しい。

さて、重要なのはその上でどうするかだ。

橋本は金檻の様子がことごとく、幼馴染に似ていると感じて、親近感が湧いた。

(アイツがもしもおしゃべりだったら、たぶんこんな感じなんだろう

うな)

そう思ったものの、「それはありえない」と冷静に自身に突っ込みを入れてしまう自分。

そう、問題はその幼馴染。

「あのすみません、その質問は置いておいてですね」

「ん、どうしたのかな。なんでも置いといてくれて構わないよ」と、どこか外れた返答が変えて来る。

しかし、橋本は戸惑うことはない。そもそも、こういうタイプには慣れている、そうだった自負が橋本にはあった。

コツは一つ、余計なことを言わず、必要なことのみを正確にかつ明確に話すこと。

「今日の放課後、1年生の宇都木稔は、美術室に来ていないでしょうか。彼が今ここにいると思ってきたのですが」

その言葉に金檻は頷く。言葉への反応が常人よりも、若干早い。

「来たよ、先ほどのことだけだね。すぐに帰った。帰ったと言ってもそれを確認したわけではないが、教室に姿を見せ、立ち去った以上は帰ったと判断した。よって、彼は今ここにいない、会いたいのなら帰るといい」

「そのときどんな様子でした？」

「別に。真実、嘘誇張なく『別に』だ。様子どころか表情もない。

美術室の戸を開き教室の様子を確認したら、すぐに立ち去ったからな」

橋本はその理由を察した。

一昨日、八賀谷に謝り来た時、美術室を出てから幼馴染に向けて橋本は言った、「八賀谷くんとしっかりとやんなさいよ」と。思い出して少し頭が痛くなる。

(いや、確かに私はそう言ったけど)

そしてもう一つ、「ここ、部活するの自由らしいから」

(……八賀谷君が居なかったから自由に部活動したな)

ようするにサボりだ。本来、実際のところ来なくてもいいのだが、

橋本としてはそれでも部活に来させたい。

どうしたものか、と橋本は考える。

質問が途切れたわずかな間に、金檻が言った。

「置いといた質問を取りに戻ってもいいかな」

それを橋本は無視する。

無視されたことに対し、気にする様子は金檻にない。

橋本の疑問は一周して、美術室に戻っていた。

「あのー、その放置されている美術道具は誰のですか？」

一瞬、間が開く。

「それかい？」

なぜかその言葉に対し金檻戒の反応が遅れていた。金檻戒において会話における反応の遅れは、本人が意図したもの以外では、かなり珍しいことである。

だが、橋本は反応が遅れたことではなく、金檻が会話にワンクッション置いたことに違和感を持った。

会話に反応するのに、1秒程度間が開くのは普通は珍しいことではないから、そこに疑問を持たないのは特別なことではない。

だが、会話の流れ、組み立て方に目を向けて違和感を得た橋本の洞察力は、普通の女子校生と比較すればかなり特異だと言えるだろう。金檻は眼鏡を中指で上げ、その表情から笑顔を消し。

そして、どうでもよさそうに呟いた。

「八賀谷コウと言う、一般からズレた者に押し付けられたんだ」

だから、今は金檻 戒の私物だよ。と、そう最後に付け足して、金檻は作業に戻る。

橋本に対して興味を失ったかのように。

しかし、そこで気にする橋本でもない。

(と言うことは)

現在ある情報からの結論。

(……みんな、今帰ったばかり?)

牙をむき出しに飛び掛ってきた男を、俺は体当たりで突き飛ばした。間一髪、と言う形容が一般には当てはまるのだろうが、俺にとって はあまりに予測しきったタイミングだったので、狙い通り丁度良く が状況としては正しい。

転がる、両腕のない男。

「あの、大丈夫？」

今朝のように、俺は少し居心地の悪さを感じながら、藤咲に声をかけた。

藤咲は異様に戸惑うようなそぶりを見せる。

「八賀谷……君？なんで、どうして。いや、だって」
なんで、そんなに驚くのだろうか。

ちよつと傷付いた気がする。

……って言うか俺、もしかして格好悪い？

「まず、ありがとうでしょう？藤咲さん」

そう言ってくれ、じゃないと素で落ち込みそうだ、俺。

と、言ってる場合ではない、か。

俺はその両腕のない男（身体的特徴としては十分なように思う）に 対して身構えた。

その男の服はぼろぼろで、多分洗濯もせず、風呂にもしばらく入っ ていないだろうと言う気がした。と言うか、息は荒いし目つきもど ことなくやばい。

あんまり、触りたくないなあ。

そう思いながら、左手で威嚇のための折りたたみナイフ取り出し、 刃を相手に向けた。

そうして、他者に刃物を向けない。と言う、社会常識から逸脱する。 人に刃物を向けるなんて、ガキの遊びじゃあるまいし。と、少々抵 抗がある。

だが重要な問題はそこではなく、ここからどう生き残るか、だ。

男が立ち上がる……ことはなく地面に這いつくばり、目を細めた。

「……お前がそうなのか？」

突然に男の顔に現れる理性と知性。

よく見れば、大学生ぐらいだろうか。俺から見れば年上だが、一般に若いといわれる部類に入るだろう。

話は通じない相手かと思ったが、もしかしたら。

俺はなるべく、穏やかに話しかけた。

「どこの誰かは知らないが、あんたの襲撃は失敗した。ここいらで引くのが賢い選択なんじゃないか？」

男は若さに反し枯れた声で笑う。

「馬鹿な、獲物を前にして引けだ。お前は俺に死ぬと言うのか」
俺は静かに呟く。

「交渉決裂……いや、不成立か」

確かに、間違っていたのは俺のほうだ。

相手は彼女を殺そうとした、いや、俺が居なければ彼女の死は確定済みだった。

事実上、コイツは彼女を一度殺したわけだ。一撃で、ためらいもなく。

そんな人間に、殺すなという方が間違っていた。

そう、コイツは彼女を一度殺した。

見逃すなんて、間違えている。

……コイツはここで殺しておくべきだった。

俺はなるべく冷静を装う。足は肩幅、左足を引くのではなく、右足を前に出す。つまり、より相手に接近する。

「悪かったな、妙なことを言って」

そして、右手を前に突き出し、逆にナイフを持っているほうの腕を引いた。

ナイフのグリップを確かめるように強く握り締める。

「もう馬鹿な話を聞かなくて済むように」

俺は対峙する相手を睨み付ける。

「……ここで終わらせてやる」

「八賀谷君、ダメだよ！」

藤咲がなぜか俺を止める。

「そのまま動かないでね。下手に動いたり、逃げたら安全の保障は出来ないからさ」

コイツを足止めする技量は俺にない。抜かれたらそれまでだ。

となれば、単純に俺が藤咲の壁になるために、出来るだけ近い位置に自分を置くしかない。

(護りながら戦うなんて、できるほど強くないんだけど)

いや、そもそも俺は素人なんだ。護りながら戦う必要なんてない。

護らずに戦わずに、こいつを仕留めればいい。

つまりは作業だ。

オーケイ、落ち着け俺。こんなものすぐに終る。

と、男がニヤリと笑って再び牙をむき出しにし、器用にもそのまま話し出した。

「終わりにするか、それもいいな」

この表情、どうも人間を相手にしている気がしない。

俺は肩の力を抜いて次に備えた。

「さあ、早く終わりにしてくれえっ！」

ダ、ダンと2回地面を叩く音がして、男が飛び掛ってくる。

狙いは俺の首、突き立てるは牙。

俺の首にキリキリと走る熱さと痛みが、相手の狙いを的確に示した。突き出している利き腕をあえて盾、すなわち犠牲とし、首を守る。

その瞬間に、俺の気の早い痛覚はしっかりと働き、熱さと痛みが、首ではなく、右腕に広がる。

それと同時に、握り締めたナイフを軽く突き出す。狙いは首だった、相手が俺を狙ったように、人間における弱点を俺も狙う。予め、定められた決定された部位に対する攻撃は、俺の腕によってせき止められ、予想されていた位置にピンポイントで突き刺さる。

そして。

何も考えず適当に、力いっぱい引いた。引き抜き、引き尽くした。
「じぶつ」

気持ち悪い声が聞こえ、その主は地面に崩れた。
背後からは、藤咲の押し殺した短い悲鳴も聞こえる。
これで作業は終わり、俺は現実に戻るはずだった。
何一つ手に残らない感触。

出血がない。
と、突然の感覚。

（やばい、これもいつものヤツだ）
身体に走るであろう衝撃に、反射的に身体を硬くしてしまう。
崩れ落ちた男は、先のない右腕で殴りかかっていた。
いつもの感覚に、いつものように癖になったように両腕を交差させ、
前に出す。しかし、それごと俺は殴り飛ばされ、全身に衝撃が掛か
る、と自覚した瞬間には既に倒れている自分の状態だった。
アスファルトにねそべっている状態だが、意識はある。
だが、込み上げてくる吐き気と痛み、絶え間なく襲いかかるそれに
立ち上がるのがせいぜいだ。俺はよろよろと一切の頼もしさをそこ
に含ませぬなんとか立ち上ろうとする。

まともに入ったな。

そもそも、なんだこれ、どういうことなんだ？
致命傷は与えた……はずなのか。
なら、これはなんだ。

目の前には腰を曲げた姿勢で、平然と存在する男の姿。
勿論、その身体に出血はない。

（しくじったって言うのか）
これは正直どうしようない、絶対絶命ってヤツだ。
その気になれば、相手は俺どころか、藤咲をすぐに殺せる。
幸いなことにまずは俺から殺す気らしいけどな。

（考える、ナイフはまだある）
右腕……上がらない。動かせるかもしれないが、痛みでしびれて、

さつきみたいなおは出来そうにない。

左腕は……大丈夫だな。って言っても、両足はがたがたで、踏ん張りは利かない。

さて、これはアウトだ。足が動かないなら、まともに攻撃なんて出来ない。当てれるかどうかじゃない、当てても無駄なんだ。

「残念だ、非常に残念だ」

見てみると、男の喉には穴が開いていて、しゃべるのに合わせてそこから空気が漏れる音がした。

（おいおい、それは反則だろ）

失敗したんじゃない、狙い通りに攻撃に成功したのに無駄だっただけだ。

なんだか、B級ホラー映画を元にした冗談でも聞いてる気分だ。どうにも現実感が無い。

ゆっくりと、俺に近づいてくる。

「終わりになったはずなのに、まだ続くんだよ。お前のせいだな」
話す言葉も、音も耳を塞ぎなくなるほどひどい。

が、話さずにいれば空気の漏れる音もないようだ。

……呼吸すらしてないのか。

俺の頬は引きつっていた。

死んだな、これは。

俺はその場に座り込む。

男はヒューヒューと耳障りな音を出しながら、これまた耳障りな声で笑った。

「大人しくすれば苦しまずに餌にしてやるよ、雄の餌なんて狩るのは初めてだがな」

餌、ね。

俺は笑いをこらえる。

「そりゃ、どうでもいいんだが、勘違いだ」

「なんだと？」

男の歩みが止まる。さっさと殺せばいいものを。

「俺の感覚は、今ある痛みだけで一杯いっぱいなんだ。他の痛みは一切感じてない。どういうことかわかるか？」

男は怪訝そうな顔をする、もしかしたら、俺が狂ったのかとも思ったのかもしれないが、正直コイツにそんなこと思われる筋合いは無い。

まあ、そんなのも、どうでもいい。

俺は事実のみを告げる。

「俺は死なないうってことだよ」

その時、ウツロギがヤツの頭を掴んだ。

ヤツの姿が一瞬消えたかと思間違うほどの回転、ほぼ同時に複数のなにかが砕ける音が響く。

ウツロギはいつも無表情なはずのその顔を、不快そうに歪めた。

「邪魔」

今度こそ、男は崩れ落ちる。

約一名を除きその場に居る全員が啞然としただろう。少なくとも、俺はした。

ウツロギは顔を俺のほうへ向け、呟く。

「今日、部活は？」

俺は脱力する。

緊張感のかけらもない、いつもどおりの無機質で力のない声。わけのわからない言動。

「……休む」

俺はかろうじてそれだけを言った。奴に声が届いたかは知ったことじゃない。

なんというか、頭が一気に冷めてきた。

今、相手が人じゃなかったら、人殺しになる所だったのか？

俺は軽く左右に頭を振った。

……悪夢でも見てたのかね。

俺は、間違ってもそういうことをする人間ではない。

その時、視界の端でなにかが動いた。

「残念だ、まだ終わってないらしい」
折れ曲がった足で立ち上がった男の首は、ありえない方向に曲がっていた。

もう、よしてくれ。疲れたんだから。
だが、悪夢は終わらない。

「苦しみはまだ続いていくんだよ」

男は泣いていた。

そのまま、再びゆっくり近づいてくる。

ウツロギは男に向かって構えた。

「やめて下さい」

震えながらも、強い意思を持った声。

ウツロギは無防備に振り向いた。

男がそれを襲うことはない。

前へと出てくる、藤咲。

「もういいんです」

男はそれも襲うことがない。

ただ藤咲を見つめるのみ。

藤咲は無理やりにつめた笑顔で、笑いかけた。

「貴方が助けを求めてたんですね、ずっと」

私に向かって。と、そう藤咲は人間らしい真つ直ぐさで男を見詰める。

そこに恐怖はない、ただどう接したらいいのかという戸惑いがあるだけだ。

藤咲は一生懸命に言葉を紡いだ。

「届いてましたよ……それと」

遅れて、ごめんなさい。

辺りが静まる。

夕日が男を染める。

そして、グシャッと男の体は崩れ落ちた。

残るのは、人間だったものではなく、元は人間だったものの肉の塊

だ
っ
た。

エピソード

さて、彼らを覗く複数の目、とある一組目の所有者。そのうちの傍観者たる者であるが、突如ここで語り部の一人として語らせてもらおう。

さらに、理不尽にも語る前に先に言おう、客観的に語る自信はなくまたその必要性も感じていない、と。

彼ら前に起きているのは、貴方が交錯し、すれ違い、通り過ぎ、目視し、それでいて気付こうとしなかった。もしくは気付きつつも見ないことを選択したはずのよくあること。

この辻褄の合わない世界で、人為的に生み出された中で自然発生した、当たり前のそういうことごと。

不幸なことにそんな当たり前に、ただ巻き込まれただけの人物達は、今この公園を舞台としてようやく共に登場した。

物語の部外者であったはずの、八賀谷コウ。

ただの被害者、餌で終るはずだった、藤咲マナミ。

自身の言葉を持たず、それ故になにもするはずのなかった、宇都木稔。またの名をウツロギ。

ただの名も無き通り魔で終るはずだった、ミマタ。

全てがそうなるはずだった、の予定に過ぎず、その予定は全て狂った。

その上、誰にとっての予定か、それすらさして重要でなくなった。

ありあわせの語り部として、語らせてもらうが、これでも当事者たる者達は誰一人、直接会うことはまだこの時にはない。

もはや、これは部外者達が紡ぐ物語、当事者達の役割は奪われる。

このことを語り部として多少は愉快に思い、個人としてはとても愉快だ。

その舞台を遠くから見つめる八つの目、四組の目にしての、四人の者。

一人はその異様な光景を当たり前のようにスケッチし。

また、一人はナイフを片手に背を向け、立ち去り。戻り。

もう一人はその瞳に夕日を写し、耳には紅いピアスを光らせる。

この全てが語り部の目に映っていた。

「さて、次の辻褄合わせに翻弄させられるのは一体誰なのかな？」

誰かが、誰かに言うわけでもなく、呟いた。

「次は君の番だよ」

また、誰かが、誰かに答えるでもなく、呟いた。

「あなたがどこの誰のものになるのか、それだけが不安ね」

さらに、誰かが、誰にも告げるでもなく、呟いた。

誰もが総じてしばしの間、口を閉じる。

それらの呟きはただの呟きで終わらないことを、語り部だけが知り、知った語り部はその目と口をいったん閉じた。

面倒くさい決意

どうやら、死にかけては撒き餌にもならないらしい。ミマタさんも、いやミマタも案外使えないもんだね。しかし、まさかアイツが関わってくるとは計算外だな。

八賀谷 コウ……。

やはり、ぼくが本当に特別になるには彼が立ちはだかるわけだ。結局の所、彼が妨害者なのか？

いや、確かに妨害者はナイフ……少なくとも刃物の使い手ではあるみたいだったが、それにしても彼は手際が悪すぎる。

そう、彼は普通の人間なのだ。

それとも、宇都木？

……しかしして、これは別の人間を示している。

結局、すべてはまだ不明だ。

なにより、手足が不足気味なのがよくない。

成長は進めば進むほど、餌は必要になるのに一定の量までしか望めないのだ。

……いつそのこと、解き放つてしまうか？

いや、それではひたすらに増えるだけだ。

そうなれば、駆除されるのは目に見えている。そもそも、こんなもの特別の中のわずか一つでか無いのだからね。

考えて見れば厄介なものに巻き込んでくれたものだ、お陰で残されたぼくが苦勞する。

これを望んでいなかったと言えば嘘になるけど。

まあ、ようやく、チャンスが巡ってきたんだからさ。せいぜい楽しませてもらわないと、ね。

おっと、忘れてた。

ぼくは新しい肉を取り出した、この間ミマタが確保してきた残りだ。

それを無造作に落とせば、子どもの頭ほどの影が一つ、それらいつく。

「どう、美味しい？」

ぼくは勇太にそう尋ねた。

勇太はぼくの言葉には反応せず延々と肉をむさぼる。

ぼくはそれをみて笑った。

「足りる？ 足りないよねえ、すぐに誰かが持ってきてくれるから待っててよ」

勇太はやっぱり反応しない。

ただ、肉に喰らいつき、むさぼり、むさぼり、むさぼり、むさぼる。

そう、あとはただむさぼり尽くすだけだ。

案外、終わりは近いのかも知れない。

第四話 『論理的』にある『猟奇性』

しばらく、俺達三人は呆然としたままだった。ウツロギに関して言えば、ぼーっとしてるだけでも言える。

だが、俺は別に衝撃を受けて呆然としていたのではなく、非人間的でクソ喰らえなことに、いつもどおりどこかズレタ頭で冷静に思考を重ね、それをまとめるのにいつものように時間を要していただけだった。

出した結論は簡単なもの。

「ウツロギ、行くぞ」

無言で頷き、歩き出すウツロギ。だから、不気味だって。

俺は呆然としたままの藤咲の手を引っ張った。

引っ張られてすぐに、藤咲は意識を戻す。

「えっ、どこに行くの？」

「……家に帰るんだ」

出来るだけ早く……ここを離れる。

パシッと音がした、一瞬わからなかったが、どうやら藤咲が俺の手をはじいた音だったらしい。

藤崎さんはその声を荒げる。

「なに言ってるの！このままにしておくの！？」

俺はその姿に珍しさと呆れのようなものを感じた。

溢れんばかりのうさんくさが前面に出ぬように、形ばかりの誠心誠意の表情で話しかける。

「なるほどね、確かにこのままにしておくのは可哀想だろうね。じ

ゃあ、その辺に埋めるのかい？」

「そうじゃなくて……警察とか」

「出来るの？」

彼女は言葉に詰まる。

そう、彼女には出来ない。

なにはともあれ、彼女は事件に巻き込まれたのにも関わらず、誰にもどこにも連絡をとらず一人で解決しようとしていた……ようだった。

その理由が何であれ（俺の知った話ではないけれど）それがどんなものであっても、彼女にとって現在の状況はあきらかに不味いものだ。

……連絡をとらなかった理由が個人的な感情面のものならば。そう……例えば正義、使命、責任といったものによるならば、その選択は彼女にはそれを放棄するものに思えるだろう。

なぜか、警察に連絡することが、逃げ、のように思えるだろう。自分で解決しなければならぬ、と言う思い込みが邪魔をして。だから、彼女には出来ない。

言葉に詰まったまま、身動きできない彼女に俺は笑いかけた。

「でしょう？ 君は……理由はわからないけど、自分の理由で動いているんでしょう。今さらそれを止められるの？」

「でも、このままには……」

「ここは本当は……うちの生徒に限ってなら、人通りが多いんだよ。彼はすぐに発見される」

ただし、もう部活をしている生徒しかいない時間だから、だいぶ微妙なラインだけど。

「でも……」

「彼は遺族の元にいけるんじゃないの？」

「……っ！」

「わかったら行こう？ 藤咲さんにはなにか訳があるんでしょう、ここで止まるわけには行かないんじゃないかな？」

彼女は少し戸惑ってから、真つ直ぐ前を見据えた。

……意外な反応だ。迷いは在っても、一切の諦めはない目。

でも、まあ、都合はいいからそのままにしておこう。

そうして、話すこともなく無言のままやや早めに歩き出す俺と、

藤咲。ウツロギはあえて意識から除外。

それからは何も話さず、出来る限り早く、その場を去る。

いや、本音を言えば何も話したくなかったの方が正しいだろう。

藤咲さんはどうなのかは知らないが、少なくとも俺はもう何も話したくなかったし、考えることすら拒否していた。

必要なことだけ、今どうするかだけ、それだけが今、働く思考。

聞くべきことは多々あるのだろう。だが、それ以上に聞きたくないことも、聞かれたくないことの方が圧倒的に多かった。それは、触れたくないと言うより、面倒でしかたがないという程度のものでしかないのだが、それだけにどうしようもなかった。

俺の思考は吐き気がするほど、澄み切っていて、そしてたぶん狂っていた。

（ナイフをどうする？ このナイフにはなぜか血痕すら付着していない……かといって、手元を持っておくのか、いや、出来るだけ早く始末するべきだ。理想を言うなら、佐才に任せるべきだが、今回は自分で何とかするしかない。ただナイフを発見されても俺を、ひいては佐才を辿られることはないだろう、だからこそ借りたのだ

から。なら、直接的な証拠さえ残さなければいい)

混沌とした思考。

(警察はどう見る？ あの死体の様子は尋常ではないものだった。そう、死体というよりはというよりは燻製や乾物に近いもの？ いや、木片に近いな。血液は付着しない……ということは流れていなかった？ 出来ればあの死体を詳しく観察したかった、が、二人の前ではどうしようもないな。おそらく……本当に憶測でしかないが見ただけならともかく、検死が行われるなら、直接の死因がナイフであるとは思われないだろう、それどころかあればそれ以前の問題の物体だろうな)

頭を巡る情報。

(誰か目撃者はいるのか？ できれば……確認できないし、いれはどうしようもない。だが、周囲に人の気配はなかったはずだ。もしあるなら、そもそも襲われることはなかっただろうし。最悪、少し遠目に見られたからって、問題もない。いくらでもどうにでもなる……か？ まずはこの面子の安全性を確認するか)

結論はいつも安全圏にいるにはどうするか。

こんな状況で、こんな思考する自分が冗談抜きで恐ろしい。実感する。

ああ、やっぱり、俺は正常じゃないんだ。って。

だいぶ、現場から距離的に離れてきて、自然と俺たちの速度も落ち始め……その足が止まる。

そこは市街の中心から外れた場所、林や川が流れる、住宅街だった。

その歩行者専用の橋の上で一息つく。

この辺、なら大丈夫かな。

なら、さて、これからどうする？

俺は再び思考に戻ろうとする。

「本当にこのままでもいいのかな」

「え？」

唐突に口を開く藤咲、俺は聞き返す……しか出来ない。

「家族の人とか……どう思うかな」

家族……か。さつきはああ言ったが、まあ、いるのかもしれない。あれが人間、もしくは元人間だとしてだ。

でも、家族に判別できる状態かな、あれは。

そう考えても、口が紡ぐのは別の言葉。

「……だとしても、家族の人とかに事情を説明しても……理解できる範囲外なんでしょう？」

「うん」

藤咲は泣くわけでもなく、怒るわけでもなく、ただ頷いた。

そのままうつむく。

はっ、気がついたかのように視線を上げた。

「あ、あの、腕のけがは大丈夫？」

「え？」

また、間抜けにも聞き返す俺。

「すぐく血が出てるみたいだけど」

藤咲のほうからは影になっていたので、正確に何が起きていたのかはわかっていなかったのだろう。この傷は……噛まれた時の傷だった。

俺は藤咲の言動にどこか違和感を感じながらも、言葉を返す。

「あ、うん。大丈夫。たいしたことないんだ。出血も止まってるしね、意外と浅かったみたいで」

牙による傷は問題ない、制服の上からだったのが幸いした。制服と言うものは意外に厚く出来ている。

ダメージに関して言うなら問題なのは、肉が顎の力で引っ張られること。常人の顎でも人間の肉を引きちぎるぐらいは容易にできる人間の最も力の強い部分は顎であり、本来なら、腕が使えなくなってもおかしくなかったのだ。

そうならなかったのは、噛み付かれた時にとっさに腕を引かなかったこと。腕をもし引き抜こうとすれば、直接的に顎の筋肉に肉を

引きちぎられていただろう。

それと、多分、最初から限界だったのだろう。あの男が死ぬ寸前だったからだ。

つて、そんな奴に負けそうだったのか俺!?

まあ、その事実は忘れておこう。図々しくお節介なことをしておいて、勝手に無駄死にするところだったと言う、格好悪い事実は忘却しておこう。

……よし。

さて、結局の所、あれは一体なんだったのか。

噛まれた傷がうずく。

なにかのウイルス感染患者とか、だったら嫌だな。

その場合、完璧に多分殺人になるだろう。もしかしたら、正当防衛になるのかもしれないが、それでも俺の中では殺人には変わりない。人を殺すと言う意味で、死刑が殺人なのと同じように。

さらに、感染症患者の場合、俺にも感染した可能性が出てくる。それも、恐らく未知の感染症。

……なんにしても、厳しい末路には違いない。

深く考えると、真剣に落ち込みそうなので、かなりぶつちやけて「どうでもいい」とか思っておくことにする。

考えること思うこと感じるものが、無駄になり、害になり、迷惑になる。そういった事態には、何も考えず、思わず、感じないことが重要だ。

(じゃないと精神を平常に保てそうに無いからな)

そういう時、普通は取り乱したり、絶望したりして、自分を保つんだろうけど。

俺はそういうの、かなり苦手だった。

思考を切り替え、俺は藤咲に向き直る。

「……とりあえず、さ。これから、藤咲さんはどうするの?」

「えっ?」

「まだ、続ける?」

なにをしているのかはわからないし、なにがあつたのかも知らないが、だいたい想像はつく。なにが起きていてなにをしようとしているのか、ぐらいは。

なんとなく、身に覚えもあるし。

藤咲さんは左右に視線を揺らしてから、うつむく。

つくづく鬱陶しいな、こういうタイプの人間は。

「回りくどいの嫌いだから言っけど。藤咲さん、今生きてるけど。本当は死ぬはずだった……んだよ？」

実は俺もだが。

藤咲は律儀に頷く。

「……うん」

「で、次もまだやるの？ なにするのかは知らないけど」

「……」

「もしかしたら死ぬ気なのかもしれないけどさ。何か目的があるならそれを果たす前に死んでいいの？」

「……」

「絶対に果さなきゃいけないんだったらさ。手段を選ばず、目の前にあるものを利用したら？」

そう、例えば俺とか。

「それが出来ないなら、そもそも藤咲さんには無理だったんじゃないの？ それなら、出来る人間に任せたら？」

そう、例えば俺とか。

「出来ないことやるより、出来ることだけした方がいいと思うよ。

その方が、自分のためだし、みんなのためになるんじゃないかな。変な意地を持つのはよした方がいいよ」

……まあ、そのみんなは俺のことを含んでもある訳だが。

そこまで言っつて、言葉を切る。

だが、藤咲は無言。

……無視か？

「八賀谷君はどうして」

うつむいたままの藤咲。

「どうして？」

泣かれる……のか？ 今さら？

俺は目線をそらす。

それに反応したのか、彼女の言葉はいったん切れるが、その上で強い声で再び言葉を続けた。

「どうして、こんなにタイミングよく出てきたの？」

そついう話か。

……結局は俺の発言はすべて無視ってことでは？

もしくは、話を全力でそらしたいと言うことでは？

俺は肩をすくめる。なるべく彼女に、俺の言葉が嫌味に聞こえるように。

「それは助けなきやよかつたって事かな」

ついでに俺は鼻で笑ってやった。

だけど、彼女の声に変化は無かった。

「そうじゃないよ、私が聞いているのは」

そして、恐らく揺るいでいない、彼女の目。

「どうして、私を助けることが出来たのってこと」

彼女は顔を上げていた。

鬱陶しいぐらいに、真っ直ぐな視線。

その声を聞きながら、俺はこの質問をぶつけるために、藤咲は大人しく俺についてきたのではないかと考えていた。

実際にあの場から離れると言いだしたのは俺だ。しかし、あの状況からして、俺、もしくは彼女がこの場から離れないことがありえただろうか。

例えば、彼女がそれを言い出して……俺が断わることはありえる？

いや、言い出す必要もない。彼女は手っ取り早く、あの場から突然逃げるように走り出せばいい。それで、俺があの場合を離れないことはありえるだろうか？ 彼女を助けに来た人間が、彼女を追わない可能性は？

仮に俺があの場合に留まろうとしたら？ それを彼女が拒否をしていたら俺はどうした？ 俺がもし、警察に連絡しようとしたら……だが、すべては憶測だ。

俺は、結局、低次元な言い訳をする。

本来ならするはずも、必要もない言い訳。

「偶然だよ、たまたま通りかかったただけだ」

「ナイフを準備していたの？」

「いつも、持ち歩いてるんだよ。そんな男子も居ないわけじゃないだろ」

勿論、嘘だ。佐才から借りた。

そういう佐才も、無用心にそのまま持ち歩いていると言うことはまずない。というか、刃物を普通に持ち歩くヤツは阿呆だ。だいたい持っていない方が安全で有利な場合も少なくない。

藤咲は、ふふつと、笑って、俺の口元から目へと視線を流した。

「八賀谷君、嘘が下手だね」

「嘘って断言されても、俺、困るんだけど」

「どうしても、普通にごまかしたいんだったら、今朝の私を見て心配になって、放課後も校門を張ってたとか、いくらでも言い様は利くんじゃないのかな」

俺は沈黙する。

「八賀谷君って本当はけっこう頭が良い、というより普通は見えない、いろんなことが見えてる。でも、見ようとしてないって言うか、そんな気がする」

俺は彼女の言葉に口を挟まない。

「もしかして、八賀谷君は本当は疑われたいのかな？」

そんな俺を見て藤咲さんは断定する。

「そして、本当のことに気付いて欲しい。理解……されたい？」

俺はあくまで彼女のほうを見ずに、考える。

だが、彼女の視線は俺の背中にひしひしと当たっていた。

痛い。

なにかが切り変わった優しさのない視線。

「そんな曖昧な言葉で人を語らないで欲しいな」

俺が言えるのはこれくらいだ。

出来るだけ彼女を突き放そう。

……と、そう一瞬だけ思うが。

思考に雑音が入る。

その雑音はそのまま俺の口から飛び出す。

「話を逸らそうとしているね。でも、いいよ。付き合っただけだよ」

おいおい、なにを口走っているんだ？ 俺は？

「俺は……別に理解されたいんじゃない。理解し合いたいんじゃない」

俺の口は空回り続ける。

「理解してあげようなんて、そんなものがあるから、苦しめる。誤解が生まれる」

まあ、なにか……止めたくもないものが入る。

「そんなものは理解するのに邪魔な感情だ。理解したいって言うのは、自分が納得したいと言っているのに過ぎない。納得なんてものは主観的な考えだよ。相手の事なんか一切考えちゃいけないだ。

理解って言うのは、そんな余計なものは存在しない。あるがままってことだ。どうしようもない、変えようも、直しようも無い、解釈の余地すらない、ただそれだけのものだ」

どこかで、何かははずれる音がする。俺の持っていた意図は消失した。

そうして、突然、持てる限りの、持てない程の、正真正銘の悪意と憎悪を持って、俺は彼女を睨みつける。

「理解が助けになる？ 馬鹿馬鹿しい。人は他人を理解するために、生きてる人間の身体を切り開いて、醜い、誰にも見せたくない、隠し通してきた中身を見ようとする。人は他人に理解して欲しいと願うがゆえに、そんな醜いものを平然と見せびらかし、撒き散らす。それがどれだけ迷惑か、あんたにわかるか？」

それを見せびらかされてきた人間の気持ちはその人間にしかわからない。

「理解に最も不要なものは、理解されたい、したいという気持ちだ」
自分の発言のくだらなさに笑える。

「エゴだよ、それは。本来、理解は最も機械的で透明で無関心で冷たいものだ」

逆に言えばそういうものは求めているわけだ。

「アンタの視点で俺を理解しようとするな、そんなもの」
そんな、他人を巻き込んだ最悪のエゴの塊。

「吐き気がする」

どうやら、これは間違いなく俺の本音だったらしい。

俺はこんなことを考えて、ずっと生きていたらしい。

俺はそれを始めて、耳にし、口にした。

その時、彼女の顔が笑ったように見えた。

「私に理解なんか出来ない、あなたの気持ち、そんな考え。それと同じように、ううん、それと」
「なんにもかも違うように」
「あなたにも私は理解なんか出来ない」

俺は口を挟めない。

「だから」

俺の言いたいことは全部言ったからだ。

「理解なんかいらんない」

それは恐らく、彼女に何一つ伝わってない。

「ただ教えてくれればいい。わからなくなつて、それで十分すぎるぐらい。私はそれで十分。だからいらんない。嘘でもいい、そんなものわかるから。私には本当のことは何一つわからないの」
俺はただ言葉を聞くだけだ。

「もう一度、言ってあげる。私にはあなたのこと全くわからないの」
でも、と彼女は続けた。

それに対し俺は何も言う必要も、言葉も無い。

「私、気付いたよ。まだ、今度は手遅れじゃないんだよ。私は断言

する」

なぜなら、彼女は彼女の勝手を話してるだけ。

「あなたを手遅れになんかせせない」

俺は当事者ですらなく、俺の意思はそこに関係なかったからだ。

「私はあなたをも助けてみせる」

これは彼女の決意表明。

俺の手は借りない、俺は不要で邪魔。誰の助けもなく、誰の理解もなく、全てを敵どころか、傍観者に変えてでもそれでも目的を達成すると言つ意志の契約。

自分と自分、その本来の意味での一対一での誓約。

たった一人で戦うと言う、自らに課す絶対の制約。

つまりは……。

ようするに……。

ああ、どうやら、……と言つか、なにやらこれは宣戦布告らしかった。

誰への、か。それは誰にもわからない。

おそらくは彼女自身にすら。

*

俺たちの会話は、俺が木陰にいたウツロギに気付くことで中断になった。

どうやら、最初からずっといたらしい。

……それは、まあ、そうだ。

というか、当たり前だ。

え？　なんで忘れてたんだろう？　俺。

とりあえず、俺はウツロギに文句を言った。

「ったく、なんで見てたんだよ。さっさと声かけるよ。黙ってるって誰か言ったか、それとも気付いていないだけで実は声をかけたのか。って、かけたんなら聞こえるまで言う義務があるだろ」

「いや、話の間に口を挟むなといわれてる」

生氣と活気にかけて声でウツロギは言った。

そういふ部分では橋本の教育が行き届いてるってことか。

何と言うか、余計なことを橋本め。

「……全部聞いてたのか？」

それとも、ぼーっとしていただけか。

「別に聞いてはいない」

「……そうか」

「ただ、聞こえただけだ」

「結果は変わんねえよ、それ！ なに回りくどい会話してんだ、お前は！？」

「……会話に参加しろと言うことか？」

「余計なことすんなっ！ 人の話聞いてんのか？ 覚えてんのか？」

沈黙するウツロギ。

少し間が空く。

「……一応、聞こえた音声は全て記憶している」

「それが余計だって言ってるんだよ！」

俺がそう言つと、ウツロギは首をかしげた。

「……今度からは声をかける」

やけに素直にウツロギは言った。

いや、そんな風にされるとなんか俺が悪いような気になってくる
だろ。

俺は黙って、腕を組み今後について考えることにした。

すると、小声でウツロギは何かを呟く。

「……部活は」

俺はそれを37秒ほど経ってから気がついた。

危つく聞き逃すところだ。目の前にいるのに、なんて存在感が無
いんだ。

しかも、まだ、コイツはそんなこと言ってるのか。

「だから休み」

俺の声が届いているのかいないのか、じっと見つめてくるウツロギ。

やめろ、ウザい。

「なんだよ、なにか言いたいことでも？」

「休みだと困る」

ああ、あれか、橋本に怒られるのか。って、わざわざそのために来たのか？

なんで、そんな面倒なことに？いや、実質助けられたんだが。

「……一応聞いておくが、橋本になんて言われたんだ」

「八賀谷くんとしつかりとやんなさいよ、やらないと……えーと、と、とりあえず、じゃないと後悔させるからね」

棒読みで口走るウツロギ、普通に気持ち悪いぞ。いや、じゃなくて。

「なんてこと言うんだ、あの女。お陰で苦労するじゃないか！俺が後悔するわ！何に閉してかはわからんけど！」

って、あ、つい口に出して言ってしまった。

仕方なく適当に俺は流す。

「じゃあ、今日は野外活動。題材を見つけたら終わりだ、見つけて帰れ」

「……………」

なぜ俺を見る。

「なんだよ？」

「……もう見つけたのか？」

見つけた？ なにが？

ああ、絵の題材を俺が見つけたのかってことか。

「ああ、見つけたよ。嫌になるぐらいな」

絵を描くことは俺にとっては、暇つぶし、だ。

もう、それは見つけた。

「だから、お前も見つける」

「……どう見つける？ どんなものがいい？」

「見てて飽きなきゃいいんじゃないか？」

絵を描く以上は長時間観察しなければならぬ。逆に僅かの間だけ見て覚え、自分の中だけのイメージや記憶だけで描く場合もある。どちらにしても、自分が気に入らなければ描き終えるまで退屈な時間を過ごすことになるし、同じように退屈な作品が出来上がることになる。

それが、ウツロギにはわかりづらかったらしい。その目に浮かぶのは疑問、ではなく入力された情報の不足から来るエラー信号。どこかのパソコンみたいなヤツだ。

「飽きないとは？」

そこから来たのは単純にして深遠な質問だった。

だけど、俺は適当にあっさりと答える。

「変化のあるもの。見るたびに変わり、発見のある何か……だ」

ウツロギは、首をカクンと動かした。多分、頷いたんだろう。

この時、俺はこの発言と今回の状況によって、コイツの美術部の活動と言うものへの認識が、少々（大幅でも可）間違ってる構築されてしまったことに気付いていなかった。

気付いてなかったと言うより、そんなことに関心がなかったのが本当だが、これで後々ひと悶着……どころか何度も大騒ぎになるのだった。が、どうでもいいことにしておく。

それは俺の責任じゃない。いや、なのかもしれないけど、俺だけの責任って事はないだろう？

むしろ、ないことにしておけ。

「あの、ずっとここに居るの？」

藤咲さんが不安そうに声をかけてきた。

ああ、今度はこつちを忘れてたよ。

「いや……とりあえず、駅で解散しようか」

俺も要らないみたいだし、と付け足して言った。

藤咲は声のトーンを落とす。

「……助けてもらったのにごめんね」

「仕方ないよ。そうしたいなら」

俺も好きにするし。

そう言いつつも、どこか疲労感と面倒くささが重くのしかかって仕方ない。

でも、なんか今日一日で「仕方ない」と言う言葉に慣れてしまいそうだ。慣れるついでに親しみすら湧いてくるといふ哀しい事態が起こりそうで仕方がない。

まあ、でも、普通に考えてこんなことがあつたんだから仕方ない気が。

「そろそろ日が暮れる」

ウツロギがそう言った。多分、独り言だ。

それに対して、藤咲さんはわざわざ反応する。

「あ、そう……だね」

藤咲さんはウツロギに向き直る。

「あの、宇都木くん」

ウツロギは面倒そうに藤咲へと目を向けた。その様子は喧嘩を売っているのとられても、何一つ文句が言えないような態度だった。

だが、それでも姿勢を直し正面に相對する。これも、橋本の教育内容か？

藤咲はすまなそうな表情になつてから、笑つた。

「ありがとう、助けてくれて」

「別に助けた覚えはなく、礼を言われる理由もない」

「それでも、助かったから」

ウツロギはなにを思つたか目を細める。

そして、億劫そうに口をもごもご動かした。

「祖父が言っていた。生きることがは傲慢さを通すものだ、と」

藤咲と俺は、ウツロギを見た。

「下らぬ意地を張り通し、礼儀も正しさも踏みつけ、他人に怨まれ、家族から疎まれ、迷惑困惑を撒き散らし、より強く重たく憎まれ、忌々しいものとしてその眼に射抜かれる。それが生きることだ」

重々しく、くだらない、それは説教だった。

年の食ったじいさんの言いそうなセリフだった。

「後悔しろ、悔やめ、泣け。だが、想いを折るな。臆せ、逃げろ、怯えろ。だが、戦い続ける。そうでないなら、生きている意味など無い。それは死人だ。それが出来ているなら、心臓が止まっても生きていられる」

ウツロギの瞳は誰も写さない。

誰も目標としない。

ただ目の前にある者を写した。

「藤咲マミ」

誰も目標とせず、ただ単に事実を事実として伝う声。

「……今、お前は間違ひなく生きている」

そう言つて、奴は口を閉じた。

俺は驚く。

つか、お前、祖父なんていたのか。

藤咲さんも俺と同じように驚いた様子だった。

いや、ちょっと俺とはニュアンスが違うな？

「あの、宇津木君」

ウツロギの目は眠そう、というより死んでいる。

だが、藤咲さんはウツロギへ、感謝を告げた。

「上手く言えないんだけど、なんだか嬉しい……ありがとう」

ウツロギは藤咲から視線を外す。

「礼を言われる理由はない」

そう言つてウツロギは無感動にそつけなく応答し、歩いていく。

それは照れ隠しでもなく、本当に礼を言われる必要性を感じていないのだろう。

藤咲もそれを見て、同じように歩いていく。

そのやりとりを見て思う。

俺って、もしかして、人として……いや、なんでもないです。

認めたら、ここまで保っていた心が、今さら折れてしまふそうだ。

俺は黙って、二人の後ろに続く。

その上で、ウツロギと藤咲に、「ごめんなさい」をばれないように慎重にこっそり三回言った。それも、絶対に聞こえないように心の中で。

……その上、心の中での発言なのに小声で謝る、というチキンっぷりだった。

面倒くさい決意（後書き）

ウツロギくんを書くのが楽しくて仕方ない自分がある。
……なんだろう？

私が、その場を去り、空を見上げる頃には、辺りは暗くなり、日は完全に沈みかけていた。

私は……結局、彼を助けることは出来ず。

後悔を胸が占めていた。

(全部、無駄だったのかな)

こんなことまで、考えてここに来てたわけじゃなかったけど、助けられるつもりで来たわけでも、本当はなかったけど。

それでも、なにも思わないわけじゃない。

後悔してる、私は。

彼を止めることが出来なかった、私のせいで起きた……そう殺し合いを、私はそれを止めることも出来なかった、彼を助けることも出来なかった。

私はいったい、なにするために来たんだろう。

なんの役にも立ってない。

それでも、私にはまだ出来ることはある。

私の耳には聞こえる。

遠くから、近くから、無数に蠢く声たちが。

(あれを止めないと、また誰かが襲われてしまう)

きつと、彼は犠牲者だ。この蠢く声たちの。

そして、もう一つ。

八賀谷君。

彼は私を助けに来てしまった。もしかしたら、彼も狙われてしまっ
うかもしれない。

もし、狙われてなかったとしても、彼が私をまた助けようとする
なら、絶対に彼は邪魔者として殺される。

私は狙われている、間違いなく。もちろん、私は引く気はない。

なら、私のすべきことは、私を助けないように八賀谷君を止め

ること。

八賀谷君が狙われているなら、それを私に引き付けること。

宇都木君は、八賀谷君が連れて来たみたいなものだから、八賀谷君をなんとかすれば、二人とも安全になる。と思う。

(もしかしたら、私がそう思いたいだけなのかもしれないけど)

でも、そんなことを考えても意味はない。

じゃないと私に出来ることなんて失くなってしまふ。

まず、彼は私の危険を知った、なんらかの方法で。

それなら私はその方法を知って、それを使えなくするとかして、やめさせればいい。

でも、それだけじゃ何の解決にもならない。

私はあるをどうすれば止められるのだろう、正直、なんの手段も浮かばない。

けど。

私は助けてみせる、とそう断言したし。

まだ、生きてる、から。

きっと、大丈夫だ。私は必ず、やり遂げてみせる。

私は次の戦いに向けて、笑みを浮かべた。

うちの『かぞく』(前書き)

家族紹介……なのかな？

うちの『かぞく』

俺は二人と別れそのまま帰宅した。

玄関の戸を開けて、やや小声で言う。

「ただいま」

「おかえりなさい」

母がすぐに言葉を返した。

カレーのにおいがするので、キッチンにいるのは間違いない。

母はハーブのタイミングだのなんだのと、全く持ってよくわからない理由でカレーの時は鍋に付きっ切りだ。スパイスの調合はわざわざ自分で行い、日夜忙しい合間を縫って、その分量、割合などの細かい配合に研究を重ねるなど、妙にカレーにこだわりを見せる。

話によると俺の父と付き合い始めてからそうならしい。

でも確か、奴はカレー嫌いだったような記憶がある。

……まあ、そのところは疑問に思わないことにしておこう。……

なんというか、母親って言うのは、どこもそうなのだろうか。

俺は鞆は美術室に忘れたことを何気なく思い出しつつ、それをなかつたことにして手洗いとうがいを済ましますことにした。

……ついでに歯も磨こうっと。

ふと、洗面所に行く直前で、誰かに声をかけられそうな気がし、視線を移す。

リビングから出てきたのは、美弦。

でも、美弦はこの時間帯は夕食まで自分の部屋にいるはず。

……ということは。

美弦は俺をにらみつけるようにして、口を開く。

「……また、怪我してきたんだ」

前半部分を力強く、つまり「また」の部分を強調して、美弦は言った。

もしかして、ずっと、俺を待ってた？

いや、そんな馬鹿な。そんな面倒なことをする意味が不明だ。…
…だけど、なんだろう、この雰囲気。

とりあえず、当たり障りないように。

「うん、まあね」

と返しておく。

何故か、沈黙。

え、だからなに？ この空気？

「……また、喧嘩ってこと？」

美弦は重苦しく呟くようにして、そう言った。

なるべく明るく、軽い調子で話す。

「そういうこと。まあ、たいした怪我じゃないから、心配しないで」

「……心配するな？」

美弦は薄っすら笑みを浮かべる。

え……なんですか、そのリアクション。

「ふっ……」

ふ？

ふっ、ってなに？

ふっ、って……夫？ 麩？ 婦？ それとも腐？

どうせそれだったら「浮」が一番自分らしいな、と思った瞬間だった。

「ざっけんな！」

いきなり大声で怒鳴りつける美弦。

かなり、長い溜めだった。

「あなたね。いい加減にしなさいよ？ じぶんでそんなことありえないってわかってるでしょ？ 胸に手を当てて考えなさい、八賀谷コウが二日連続で、自分が怪我をするようないざこざに巻き込まれると思う？」

「って言われても、実際に起きてるし」

「しかも、その理由が喧嘩？」

「そういうのって重なるもんだよ。人間関係のこじれってもんはさ」

「は？ 人間関係のこじれ？ そんなもの、コウにあるわけないでしょ？ こじれるようなマトモな人間関係なんてものが、人間関係を、人間社会を、人間の気持ちを、なめふかしてるような、アンタに、あるわけが、ない！」

「うわ、わざわざ一言づつ区切って言われたよ！」

「って言うか、なめふかす……ってなに！」

「コウに喧嘩できるほどの人間関係が構築出来るなら、月と太陽が同時に共存できるわ！」

「しかも、結構ひどいこと言われてる気がする。」

「俺なんかしたか？」

「と、先ほどとは対照的に、美弦は今度は声のトーンを穏やかに、落ち着いた様子で話す。」

「コウ、正直に言ってくれる？」

「ああ、あれか。脅した後、優しくして、相手の情報を引き出すやり方？ ……確か、刑事が犯人にする自白のさせ方だよな。」

「私、コウのこと。怒ろう、叱ろうとか思ってるわけじゃないの。ただ嘘はつかないで欲しいの。ねえ？ わかるよね？」

「でも、美弦、それ間違えてる。」

「俺、どっちも脅されてる気がするもん。」

「ええ、まあ」

「じゃあ、答えてね」

「はい」

「また、妙なことしてるんでしょ？」

「妙なこと？」

「そう、例えば……今話題の連続猟奇殺人事件とか？」

「なに言ってるんだよ、美弦。現実には漫画でもドラマでもないんだよ。ただの平凡な高校生が殺人事件に関わることなんてありえないよ。」

「確かに普通に生きてたらありえないよね」

「俺の言葉に美弦は深く何度も頷く。」

「そうだよ、世界には常識ってものがあるんだからさ」

俺は美弦ににこやかに笑いかけた。つられるようにして、美弦もその表情を崩す。

だが、美弦の目は笑っていない。

「……別に事件じゃなくてもいいんだけど。普通じゃない妙なことから、異常な事件なら、それは本当に何でもいいから。退屈を紛らわしてくれるなら何でも。そういうものに」

コウは飢えてるでしょう、と美弦は言った。

俺は美弦に笑いかける。

でも、美弦の目は笑っていない。

だけど、もうひとつ。

その目に映っている人物。つまりは俺の目も笑っていない。

それは笑えないし、冗句にも冗談にもならない。

俺が退屈凌ぎに飢えているだって？

「美弦」

スツと、美弦の顔が曇る。

「頭がおかしくなったか？ そんなことがあるわけない。それでこ

の話は終わりだ」

「……あくまで喧嘩だって言うの」

「当たり前だ。それ以外にありえるか？」

「コウがそんなこと……」

美弦の言葉を俺は遮る。

「ただか二日連続喧嘩をして帰ってきたくらいでなにを言うかと思えば。大騒ぎしたいならすればいい、それは美弦の勝手だ。だけど、これ以上、俺を疲れさせないでくれるか」

「……っ！ なら、なんで喧嘩したのか言ってみなさいよ！」

「だからね、美弦。言われないとわからないみたいだから言うけどね。僕が誰とどうしようが、なにをしようが」

『君には一切、関係ない』

そう言った瞬間、空気が凍った。

それは禁句。

完璧な禁句。

それを聞いた美弦は。

絶対に、自分を保てない。

凍りついた美弦の顔は震え……。

思考が凍る。その言葉への拒絶反応と、現実を受け止めるための時間を要するために。

俺の発言が、頭の芯に届くまであと3秒。

あと2秒。

1秒。

美弦の顔が一気に歪み。

そして……。

ポフツ。

俺の後頭部が殴られた。

「コウくん。こんな所でなにしてるんです」

俺の後ろから殴り、声をかけてきた人物。

「美弦ちゃんをいじめたら駄目じゃないですか。仮にも、僕の娘なんですからね」

どこからどう見ても、一見して人畜無害な風貌の眼鏡を掛けた平々凡々なサラリーマン。

百見して人のいい世間知らずそうな、鴨にネギしよった田舎野郎。

しかし、一聞すればド変態、百聞してド変態でしかないこの人物は結局の所。

「ただいま、愛しの我が娘、美弦ちゃん。それと、生意気そうなクソガキ」

腐れ、俺の父親だった。

*

「あの、もしかして、今日も……いえ、今日はカレーですか？」

「ええ、そうよ。あれ？もしかして嫌いだった？」

「いえ、まさか。僕に嫌いなものなんてありません」

「そう？ならいいけど」

これと同じようなやりとりが先週にも行われていたような気がするのは、気のせいとしておいておこう。

とりあえず今日が金曜日であり、母親がカレーを作っている以上、なんで父親が帰ってくることを俺は失念していたのか。

ああ、まあ、理由はわかる。

ふと、目の前にいる両親を見る。

「あ、カレーは少なめをお願いします」

「え？ああ、カレー大盛ね」

「えー？……ああ、カレー大盛でお願いします……す」

どんぶりに注がれたカレーを父は受け取った。ライスが注がれている場面は、見逃したのかなんなのか見ることはなかった。

心なしか、額から汗が吹き出ているが、あくまでその表情は輝かしい笑顔。だが、カレーを食べる前から辛さに参っているかのようにも見える。

美弦はひたすら沈黙しているので、今この場で話しているのは両親だけなわけだが、なんだか、交わされているのは白々しい、を通り越して痛々しい会話。

……なんていうか、失念していたと言うより。

気付きたくなかった、んだろうな。俺。

「ところでね、コウくん」

「なんですか、お父さん」

「はは……お父さんだなんて馴れ馴れしいな。……先ほどの話ですけどね」

「……………」

「もし、周囲の心配してくれている人に、これ以上迷惑をかけて、気を遣えず、さらにまだ自らを省みることが出来ないのなら。死ぬほど痛い目みるようになりますよ」

「いきなりですね。そもそも途中から来て、話の内容わかっているんですか？」

「なに言ってるんです？ 僕は最初からいましたよ。全部聞いてました」

「……そんなわけないだろう。」

それなら、美弦が気付くはず……ってそんな常識が通用するような人間でもない。

もしかしたら、玄関の外から立ち聞きしていたのかもしれない。

実際に試してみて、俺の耳で聞こえるかどうかは別にして。

「立ち聞き……ですか。悪趣味ですね」

「それはいいとして」

よくねーよ。

「問題はですね。その格好はなんですか？ 無様で見苦しい、その姿は？」

「……これは」

そんなのはわかってる。無様に転げまわり殺されかけ、助けようとして助けられた立ち回り。気がつけばぼろぼろだ。

「随分と気が抜けているみたいですね。……あまり調子に乗るのはやめなさい」

「……貴方だったら、やめると言われてやめますか？ お父さん」

「やめませんね。ですが、僕が怪我をして帰ってきたことがありますか？」

「……ないです」

一度も、だ。うちの父親が出血しているところなんて見たことない。それどころか、病気のだったこと、いやそれ以前に調子の悪そうな姿を見たことすらない。

「僕がコウくんの前で怪我をしたことは？」

「それも、ないです」

「きみが僕に自分の実力を示せたことは？」

「……もちろん、ないです」

「調子に乗りたくないなら力を付ける。そのための力です」

高慢な物言い。

はるか高みに自分を置いた視点。

誰もこの会話に口を挟みはしない。

今ここに参加出来るのは、俺と父親だけだ。

「せねばならない理由がある。なんだつてそうでしょう、誰だつてそうでしょう。ですが、きみには実力もなければ、運もなく、経験もなく、才能もなく、覚悟もなく、結果もない。全てが問題外だ。その上で、なにを言う資格がある？」

父親は俺に力を示す、示し続けている。絶対的なその実力を。

だからこそ、俺は情けないことに逆らえない。

「したければすべいいい。しかしね、コウくん。僕の言う調子に乗るなどは、お前はでかい口を利くな、ということです。今のお前は、誰かに心配をされていることで、それに甘えているクソガキだ」

「……それでも、俺は」

「言いたいことはわかります。しかし、きみの態度はあまりに都合がいい」

「ずけずけとモノを言う父親だが、それはすべて事実だ。」

親と子と言う関係以前に、強者と弱者としての差がある。

「力は示すものであり、権利は勝ち取るものです。僕の君に要求することはひとつです。強くあれ、と」

あくまで、頼りなさそうな騙されそうなその顔で、強者の理論を展開させる父。

弱くあることは罪である、そう父は言う。

「強者は全てを許される、とは言いません。そもそも、強者と弱者、勝者と敗者、この二つにはたいした差も違いもありません。」

弱者には弱さという繋がり、恐怖と怯えによる攻撃力があります。また、勝者が世にて栄えるわけでもありません。勝ったからこそ、駆逐されるなんてありがちな話です。

一方、敗者は敗北を知っているというタフさがあります、無敗は

敗北を知らないと言う無知の象徴にしかありません。しかしですよ？」

父の手にはスプーン。それをくるくると回す。

「君は弱さに甘え、敗北に慣れ、誇りを失い、娯楽と休息、その合間の惰性の中で生きています。なにをいじけているんです？ 自分の境遇にですか、環境にですか？ ちゃんちゃらおかしいですよ、コウくん。」

他人と比べるのも結構。己を知る近道です。しかし、他人のせいにするくらいなら、闘え。全てに刃向え。そして、潰される。君のように嘆いているよりマシです」

全く手元をみずに、スプーンを弄ぶ父。

弱いことが罪なのではなく、弱くあることから脱却しないことが罪で悪なのだ。

それは強いからこそ言える言葉だった。一切の甘えを許さない生き方。

「嘆くな、己の運命など嘆くものではない。それが強者の生き方なんですよ？」

そのスプーンを親指ではじき、それが宙に舞う。

俺はそれをアホ面で眺めた。

「……誰でしたっけ？ それ」

「また忘れたんですか？ まあ、憶えている方が不思議ですね。ええ、その辺も含めまして」

父はそのスプーンをキャッチし、それを俺のほうへと向けた。

「きちんと気合を入れなおしてあげますよ、コウくん」

「待って！」

そこで、なんと美弦が声を上げる。

「今、コウは怪我をしてるし、その……そういうことで解決するのは」

「ああ、美弦ちゃん。違いますよ、お仕置きとか、説教の代わりとかではないんです。そんなことは無駄ですから。殴って治せる能力

があるなら、殴られる前に治そうとするでしょうか？ そうではなく、コウには必要なんですよ。怪我に関しては大丈夫なようにします」

「……でも」

「そうそう見慣れないでしょうが、これが僕たちのルールですから、そう言われて、美弦は何かを言いたそうにするが、母の方の様子を一瞬伺い、やめた。

顔を伺われた当人、つまり我が家の母親は自分の仕事ではないと言つように、黙ってカレーライスを食べている。自分がなにを言つて無駄だと美弦は悟つたのだろう、どこか悲しそうだった。

そんな美弦を見て、父は穏やかに微笑む。

「美弦ちゃんが心優しい娘でとても嬉しいですよ。ねえ、コウくん」だから、調子に乗るんですよ？ と父の目はそう言っていた。

今日はカレー抜くか。吐く前に。

つて言うか、口の中に香辛料なんて入れたら死ぬほど痛いし。

と、父親は母の方をちらと見る。

「もちろん、気合を入れるのはカレーを食べてから。ですが」

……その結果は誰の誰に対する嫌がらせだ、父よ？

うちの『かぞく』（後書き）

めったに活躍せず、登場しない。そんな予定の父親登場です。

告白と甘え方（前書き）

うちの主人公は最低です。

告白と甘え方

包帯の巻かれた右腕が痛む。

どこまでもゆるく鈍い。そんな痛み。

腕の力を抜いて、ぶら下げるように、だらんと床にたらず。

浅くゆったりとした波。断続的に伝わる、痛み。

なんとなく指の先を動かすたびに、その波が加速する。

だが、あくまでもそれは鈍いだけの痛み。

こんなにも、腕の痛みを鈍く感じるのは。

腹部のじわり、じわりと広がるようなより強烈な痛みと。

もう出るものもないはずなのに存在する吐き気が、俺の中に同時にあるからだろう。

今現在、俺は確認するまでもないが、腕の怪我だけでなく、全身に何箇所も切り傷や擦り傷などが増え、その上当然のことながら昨日の傷からもちゃっかり血がにじんでいた。

さらに言えば、父の父による父のための気合の入れすぎで、腹部に位置する内臓全般の痛みが俺をさつきまで、のたうちまわしていた。

吐きそうなのに、吐けない絶妙加減。

っていうか、なんだろ。首も痛いな。

気合を十分すぎるほどその体内に内蔵され（特に内臓にだろう）自分の部屋に戻り、ベッドに転がり、転げ落ち、みにくく顔をゆがめた後、1時間ほど苦しみぬいた俺としては、このままウダウダと寝そべっていたいのだった。

父親ももういないので安心して休めるし。（仕事へまた行ったのだった）

怪我也改めてほしい処置したしな。

改めてと言うのは、実はウツロギが移動の途中に、馴れた手つきで応急処置を施してくれていたからだ。

手当てに必要な物品をすべてを、なぜか常備していた。って言うか、どこから取り出したんだらうか。

ああ見えて、意外に用意周到というか準備の良いところがあるよ
うな。

しかし、藤咲さんが「手当て、やっぱりした方がいいよ」という
まで、それを持ってきたという気配すら出さなかったという謎。

なんなんだろ、アイツ。

言われる前に、やれ。

と言うか、自分から言え。

持ってきたのが無駄になるだらうが。

……もはや、奴は行動だけでなく、存在が謎だ。

ん、まあ、礼ぐらい言ってもよかったかもしれないが。

と言うか、心狭いな、俺。礼ぐらい言えよ。

「……って、言ってもなあ」

アイツだって、別に礼なんか言われたくもないだらう。

言われてもさ。

なあ……困るだろ？

多分。

ま、それにしても。

「なかなかの状態だな、これ」

こんな傷になるほどのことをしてたかな、と過去を振り返ると、
瞬時に「してない」と答えていた。もちろん、自分が。

……なんだか自虐的だな。

だけど、まあ、ひとつひとつの傷はあれだけの立ち回りをしたく
せに、そこまで深くは無い。

というか、実際たいした怪我でもないような。

ああ、それが別に悪いわけではない。ただ、俺が本当にたいした
ことしてない気がしてくる。と言うだけだ。

いや、してないんだけどさ。

と、そこで俺はため息をつく。

「……気にしたって仕方ないよなあ」

問題は今後、どう藤咲に関わるかだよな。

だけど、どうする？

正直、手がかりはない。今後、ああして事件の先回りが出るか無理、あんなの奇跡に等しい。

なら、藤咲をストーキングでもするか？

無駄。先回りでなく、追うのなら事件があつたときには手遅れ、だ。瞬時に助けに入るには襲撃のタイミングや場所、方法を知る必要がある。そんなのは無理。今回は偶然に偶然を重ねた結果だ。

だいたい護衛っていうのは、死角を無くすためにも複数でやるのが原則、俺一人では無理だ。

その上、その状態なら藤咲自身の協力を得てないなら、むしろ、逃げ回られ、最悪、藤咲に出し抜かれた拳句、死の危険を引き上げることになる。

その状態で護衛を可能にする人間なんているか？

って言うか、ストーキングなんて変態のすることだろう？ 俺は

やだ。

でも、それ以外に有効な手立てがない。

……どうしたものかな。

そこで、トントン。と、小さくノックの音が聞こえた気がして、視線をドアに向ける。

もちろん、誰かはすぐにわかった。

……しかし、待つてもなるはずのノックがならない。

だいぶ迷ってるな。開けることは決めてるんだろうけど、決心がつかないってトコか？

自分から開けるのがめんどくさかった俺は、腕をたらしままベツトに寝て待つ。

でも、まだノックはならない。

……甲斐性なし、とは言われたくないかな。

「いるんだろ。……ちよつと話そう？ 出来たらだけど」

俺はドアに向かって言った。

これで誰もいなかったら独り言だ。

一拍、待って誰も入って来ず。

さらに二拍待っても変化がなかったなので、ベッドに顔を押し付けて寝ようとした。

さらに三拍経って、急激に眠気に襲われ、ああ、俺疲れてたんだな。と実感した頃。

ようやくドアがやや、感覚的にズレて開いた。

そこにいたのは、もちろん美弦。

俺は顔を半分だけずらして、美弦を見る。たぶん、美弦から見たら、俺の顔の半分だけが見えているはずだ。ただし、上目遣いで傷だらけ。

「やあ、美弦。元気？」

「どつちが。死人みたいに見えるよ」

「ここ座っていい？」と美弦。

俺は身体をずらしてベッドを少し空ける。

「……本当に死人みたい」

「ん、まあ、実際半分死んでるかな。生きてる気はしない」

「……傷痛む？」

「いや、そこまでは。むしろ、腹かな」

俺の父親は加減を知りすぎて、拷問の域まで達している。

多分、24時間気合を入れられ続けても、俺は死ぬどころか、気絶も出血もなく、永延と痛みに苦しみがくことになるだろう。つてどんな地獄だよ。

でも、アイツ。その気になれば痣すら残さず殴れるだろうからなあ。

美弦は言う。

「……大丈夫なの？」

「うん、まあ、いつものことだし」

「いつもの？」

「そう、あれ、わりと俺の中では普通」

そうか、美弦は俺と違ってこれに慣れてないんだよな。

八三が滅多に場面に遭遇しないのもあるし、そもそも最近、父親自身との遭遇もしないし。

「でも……」

「気にしない。あれ、必要だったのは必要だったから」

「必要？」

「ああ、俺がMってことじゃなくて、それ自体は否定は出来ないけど」

「いや、そこは否定してよ」

「だってさ、美弦。調子に乗って喧嘩して、それで死ぬよりマシじゃない？」

そう俺が言うと、美弦は複雑そうに顔をそらした。

これは本気だ。これからのくだらない小競り合いで死ぬより、いくらか、いや僅かにはマシだろう。……と思う。

いや、思おう。じゃないとやってらんない。

でも実際のところ、父親のしごきは無駄にはなっていない。なぜなら、自分の力はそういう方面には適してない、とそう気付かせてくれる。

つくづく思うのが、俺は、真っ向勝負には向いていない。ということ。

ほら、俺、根が素直すぎるし。

なんちゃって。

……………。

で、いつも、不思議に思うのはああして拷問……もしくは折檻をしている父自身が、俺にああいうことに向いてないことぐらい承知しているはず、ということだ。

昔から父には、才能も、やる気も、運も、センスも、根性も、心構えもなにもかも存在しない、なんて言われてきた。その上、毎度言われるのは、「コウくんにはその力はありませんし、必要もない

です」ってこと。

強くなれない、とは言われないが、向いてないと言うことを言外に言われ続けている気もする。

でも、それなら、俺に対するあれは時間を無駄にすることにしかならないはず。

なんだろうか。あの人、見た目通りに善良に人助けをする時だつて、無駄なことはいらない主義を貫き、いかなる時も傲慢と冷徹を忘れず、手遅れ、無駄と判断した人間はみな切り捨てると言う見た目に相反した人格の持ち主なのに。

なんのつもりかなあ、あの人。いや、かなり本気で。

でも、まあ、人間の理屈や感覚であの人を計るうってのが無理なのかな。

我が父ながら、時々、人類やめてんじゃないかと思うもんな。心を失くした的な意味合いで。具体的には、ほら、耳元まで口が裂けた悪魔。……から金を取り立てる悪徳金利貸し。

……ああ、そんなことすんの、人間くらいか。

「コウ、眠いの？」

そう言われて、ようやく自分が目を閉じていたことに気付く。

「うん、みたいだ」

「……帰ったほうがいい？」

「いや、これでも俺から誘ったんですよ？ 大丈夫っぽいよ、まだ、たぶん、きつと……」

「さつきから、セリフがみたい、とか疑問符ついたりとか曖昧なんだけど？」

「それはおそらく、俺という人間が曖昧ということなんじゃないだろうか？」

「うん、きちんと考えてから話そうか」

って言われても、大分眠いわけで。

「コウ」

「なに」

「ひとつ聞いていい？」

「二つ以上は聞けなさそうだしな、って言うか一つ目で寝るかも
「答えてから寝てくれる？」

「……おー」

「あのね、本当に連続猟奇殺人……関係ないの？」

「んー、……多分」

「興味ない？ 調べない？」

「ない。っていつか一回調べたら、はまりそうだから、やだ」
「……そう」

美弦はほつとしたかのように息を吐き出した。

「じゃあ、次は俺の番ね」

「なに？」

「……」

「コウ？」

「……おっと、俺寝てた？」

「知るかつ！ さっさと話せばいいでしょー！」
「って言われても、やっぱり眠いわけで。」

んー、なら、さっさと用を済ませよう。それしかない。

「美弦」

思ったより小声になり、美弦は俺に顔を近づけた。
「なに？」

俺は美弦に向かって用件を切り出す。

「えーと……」

「……忘れてるの？」

「今思い出すから」

「もう帰るわ」

「いや、待って。今言っつて」

「いや、帰るし」

「えっ、あ、ほら、思い出した。ね、今言っつから」
「……」

「美弦」

「……………なに？」

「好きだ」

「……………」

沈黙する美弦。

なんだ、この現実を受け止め切れでないリアクションは？ デジヤブ？

「え？ ……ああ、間違えた。 ……さっきはごめんな、美弦」

「むしろ間違えて告ったことを謝れっ！」

「なんかそんな感じの雰囲気だったからっ！ ……」

「つい、ってなに！ そんな雰囲気ないし！ ……ってか、コウは雰囲気告白してるのっ！？」

「……………男子ってだいたいそうじゃないかな。 雰囲気告白して、雰囲気受ける感じ？」

「そんな最低なヤツいるかっ！」

「……………いや、男ってだいたいそうでは？ 彼女が全く「いない」とかよりも、どんな相手でもとりあえずは「いる」方を選びそうな気がする。」

「……………ほら、あれだよ。 男ってみんな最低なんだよ？ 狼なんだよ？」

「コウは人間とか狼とか何だと思って生きてるの！？」

「んー、なんかこう。 フサフサで、しっぽふりふりで可愛いよね」

「だから、適当に会話するなっ！」

だって、眠いんだよ。

やばいな、ここまで眠いと本音と直感とノリだけで話しちゃうな。 っていうか、本音ってなんだっけ？

「結局、コウは何が言いたいの！ もう、また喧嘩したいのっ！？」

「……………美弦」

「だからなに！」

「俺、が全部悪いんだ」

「……………」

「というより、俺は全面的に卑怯だ」

「……………」

ひどいな、嘘でも認めるなよ。

そうは思うが……………不満はあっても、不服はなかった。

俺は謝る。

「ごめん」

「……………」

「まだある」

「なに？」

「美弦は優しいよな？」

「……………」

「でも、駄目だ。もう少し、なんか、駄目だ」

「は？」

「……………」

「………実感できないんだ」

「……………」

「俺、居ていいのかな？」

「……………」

「………だから、なんの話？」

「人と人の間にさ、俺さ、駄目なんじゃないかな。向いてないんじゃないか」

俺、人間じゃない気がする。

自分が。

人間に向いていない気がする。

「アンタは人間……………でしよう？」

美弦の言葉に頷きながら、俺は手を伸ばす、

「わかってるよ、だから嫌なんだ。人間なのに」

人間的じゃない。人間らしくない。

……………そんな気がする。

俺はそこから続きを言わなかったが、美弦は頷いた。

「……………」

ひどいな、なんか。いや、ひどくないのか。
俺は笑う。

「だから、もう少しだけ我慢して？」
待ってて。

実感させて。

俺に少しだけ。

教えて。

「なるべく迷惑はかけないようにするから」
そう言っつて、俺は手の平を握り締める。
強く、強く。

決して離さないように。

「ちよつとでいいから」

俺にわかるまで。

俺が納得するまで。

あと少しだけ。

それで、俺は言うこと全部無くなって、黙った。

自分の心臓の音が聞こえる。

いつもは結構嫌いなんだけど。

今日は、いいかな。

だんだん、意識が遠くなる。

美弦は「ふー」と息を吐き出した。

そして、何かを諦めたかのように、天井を見上げる。

「いつもそうだよ。勝手だし、一方的だしさ。自分が謝ったら、
もう、することないみたいにならへらへらいつも通り過ごす気でしょ」
「けどさ、と続ける。」

「私さ、いつもなんか、ちゃんと話を聞いてくれる人もいなくてさ。
むしろ、私がしっかりしないといけないし、みんな頼ってくるばっ
かでき。」

助けることはあっても、助けてくれないっていうか、都合のいい
時ばっか頼られて、いつもはだべってるばっかで、相談しても、た

だ合わせられるだけだったり、つらいのに誰にも気付かれなかったり、そんなの友達でもなんでもなくて、って悩んだり。

んー、っもう、なに言ってるんだろ。つまり、だから、だからさ」「美弦は八賀谷コウの方へと目を向ける。

「コウはするいんだよ？ 本当はコウは私がいなくてもいいんだろうけど、コウは私が駄目ならさっさと諦めて、許してくれないんならそれでいい。で終われる。

でも、私はコウがいないと、きちんと気を使ってくれたり、話を聞いてくれる人もいなくて。もちろんそうしてくれれば誰でもいい、って訳でもないけど、でも、そういう人って、そういう存在って貴重でしょ？」

そう美弦は自分でも、何を言っているのかわからないまましゃべり続ける。

「だからさ、すっごく不公平だと思うんだよね？」

ポン、と八賀谷コウの頭を叩く美弦。

「ね、わかる？ コウからは誰でも代わりに利く人間だろうけど、私は誰も代わりになる人すらいらないんだよ？ 不公平じゃない？

だから……だから」

美弦は目を伏せる。

「だから、だからもう……わかったから」

「……………」

「コウからそういうなら仕方ないよ。私も悪かったよ、なんかツケツケ言いすぎた。ごめんなさい。はい、仲直り。……これでいい？」

「……………」

「コウ？ 返事ぐらいしてくれろ？」

「……………」

「コウ？」

「……………」

「コウ！ 無視？」

「……………」

「って、「コウ!？」」

コウの意識（つまりは俺の）は自分の言いたいことを言ったら、満足して途切れていったのだった。

美弦の声は俺の中では既にとても遠くに聞こえ、音にはなっても意味をなさない。最終的には意識に浮上することなく消えていた。

告白と甘え方（後書き）

って言うか、本音ってなんだっけ？
実際に私はそう言ったことがあります。

泡沫の夢（前書き）

この小説、ジャンル何なんですかね？

泡沫の夢

長い一日だった。

だいぶ、長かった。

いや、永かった？

なんか、ぐるっと回って一周した気がする。

そうやってまどろんで、夢の中でさえ、どろどろに溶けてしまいうなほど。

何も考えずに漂う。

左手の痛み。

何かが聞こえる。

この声は……誰の声だろうか？

たすけ……て？

何かが形になる。

目の前に人が居て。

男だ。

俺はそいつを。

彼を。

必死に説得している。

俺は彼を必死に説得し続けている。

その必死さが自分には、八賀谷コウという人物には、ありえなさすぎる様子だったので、すぐに「ああ、これ夢だな」とそう思った。

当たり前か。

寝ているときに見ているんだから、夢だ。

俺は、俺じゃなくて、知らない奴になっていた。

そいつは凄く真剣だった。

とても真剣に言葉を選んで、説得していた。

説得？

なにを？

それは、既に誰ともわからない自分でしかなく、対面するやはり、誰ともわからない彼であつて。

とにかく、夢の中の自分はそれはそれはひたすらに言葉を並べ、ときに熱く、ときに冷めた様子で、幾度となく首を振られ、それでも幾度と言葉を連ねていた。

どんなに断られても、追いつがる。

でも、心の奥のどこかで、「もう無理だ」という言葉が常に響いてる。

終わりは迫っている、そういう予感。

この結末は決まっている、そんな実感。

それは単純に俺の諦めなのか、それとも結末を知っているからか。それはわからない。

それでも、俺は彼に仲間として、友達として……なによりも人間として彼を止めなければならなかった。

「お前がなにをしたいのかを俺は知らない。かといって、説明されても理解することすらも出来ないだろう」

「ああ、……そうだね。たぶん、いや、違うな。間違いなく、理解なんて出来ないだろうね」

彼は、どこか寂しそうに笑った。

最初から諦めてるよ、というその様子が、俺の胸を締め付ける。その姿はまるで俺だ。

「……俺はお前を理解出来ない。しかも、話を聞くことすら出来ないしな。なによりこうしてお前をひたすら説得だけをしようとしている。お前の気持ちには無視をしてな」

「でも、それは僕を友達と想っているからこそ、だろ？」

「それはそうだけだな。だけどよ、せつかくのお前の信頼をこんな形でしか返せない。それだけは悪い、と思ってる」

「……うん」

彼は頷いて、俺から目をそらした。

俺にはわかる。彼はそれでも理解されたいもっていたに違いない。

でも、それが無理なことわかってるのだ。

人は……ありえないと思っけていても、わかつていたとしても、それでも望むことをやめることは出来ない。

理解してほしい、自分を認めてほしいと願う。

「……うまくいえないが、そこは俺はわかるんだ」
本当にわかる。

わかるんだ、嘘じゃなくて、本当に。

お前は今、俺と同じ気持ちなんだ。

理解されないって、自分の気持ちは他の人間にはどうしようもないものだって、異質だって。

でも、やっぱり、知っけてほしい。わかるよっけて言われたい。同じだっけて言われたい。

その気持ちはわかる……けど。

……痛いくらいに、わかるけど。

「でも、だからこそはつきりと伝えなきゃならない。俺にはお前が理解できない。受け入れるなんて無理なんだ」

「ああ。こんなことを言っけたら、なおさら君は気に病むだろうっけどさ。……そういっけてくれて逆に助かるよ。余計な望みを持たなくていいしね」

本当に気に病むようなことを言っけてくれる。

でも、やっぱりその気持ちはわかるのだ。

同じだ。

だけど、認められない。

「……どう考えても、お前のしようとしてることは最悪だ。目的は知らないが、少なくともその手段はへたなテロより悪質だし、凶悪だ。……たぶん、そんなものと比べるのがおかしいんだろう」

「わかつてるよ」

「なあ、お前の目的には絶対にそれが必要な手段なのか。他に平和的な方法はないのか？」

彼は首を振った。

「だからさ、君が間違えているのはそこなんだよ。君は理解していない。目的と手段を別のものと考えられる世界に住む君にはわからない、ということがね」

「……どういう意味だ？」

「目的を達成できるならその手段はなんだっていい。だけど、目的を達成できる手段はいつだって限られている」

「それはそうだろ。でも、そのなかにだって方法を選択する余地はある」

「ないんだよ。違うんだよ。だから理解できないんだ」

彼の目に、自分より劣っているものを見る光が混じる。

「目的も手段も変わらない。結果も過程も同じものだ。なんらかの手段を行うためには、それを目的として準備するための手段が必要だ。結果は出された瞬間に次の結果への過程にしかすぎなくなる。」

全部、同じものを言い変えてるだけにしか過ぎないんだよ」

「言ってること、全然わかんねえよ」

俺がどんなの表情をしていたのかは知らないが、俺の顔を見て彼はため息を吐いた。諦めよりも、呆れの心境だろう。

「出来る限りわかりやすく言おう、君の認識に合わせて。もしも、ぼくの目的が結果的に人を傷つけるものだったとしたら？社会にとって、もともと害のあるものだったら？それなら人を傷つけることや、社会に害をなすことが目的ともなりえる」

彼はそう言って、机の上に座る。

その様子からようやく、今自分のいる空間に意識が向いた。

ここは……教室か？

でも、どの？

「なら、ぼくは他者から、社会から排除される前に自分の身を守るための力を得るしかない……だろ？」

「言っている意味がわからない」

「だろうね」

「だが、わかるものもある。お前は、自分を理解しないヤツを消し

たいんだ」

彼は無言だ。

「だって、そうしないと消されるもんな。自分に恐怖を覚えたヤツに」

人間は理解できないものに恐怖を覚える。

自分が死にたくないなら、社会的に消されたくないなら、社会の方を変えるしかない。それが出来ないなら……消される前に消すしかない。

「結局はそのための計画だ、と言うことが」

「ああ、そうだよ」

頷いて、彼は手の平を広げる。

「手段だけを言えば……君の言うとおりに、極力人に害をなさないで行くこともできる。ゆっくり、少しづつ人々を変えていく方法が……でも、ぼくはその前に死ぬだろうし、それだって、百人を一度に殺さない変りに、一人をゆっくりと殺す。と言う程度のものだよ……肝心なのはゆっくりと力をつけたところで相手に発見されれば意味がないってことだ」

駆除……されるからね、と彼は言う。

「相手だと？」

「ここから先は推論にしか過ぎないね」

俺には展開が速すぎて何の話をしているのか理解が出来ない。

それでも、俺の口は開いた。

「……多くの中の一つ」

彼の目が大きく見開く。

その様子を見て、俺は確信を得たようだった。

俺じゃないほうの俺は、間違いなくその思考を、彼を理解した。

「今までも繰り返された中の一つ。他でも行われていることの一つ。完全に異質であり、特別。さらには唯一無二の、だが、それでも世界を揺らがすには至らないものの一つ……と言うことか？」

「さすがだね、話が早い。予想外か、予想通りというべきか」

「俺にとっては思考が飛躍し過ぎた妄想に思えるけどな」

「だけど、それも今、力をつけることの理由にしかならない。生き残るための手段、目的のための過程、いずれは通る道筋、導き出される結果にしか過ぎない。と、同時にぼくには目的そのものでもあるんだ」

「結局、俺にはわからないな」

……彼の心境は理解できる。でも、彼らがなにを話しているのかわからない。

「……なあ、お前さ。なにがそんなに不満だったんだ？なにがお前をそうさせる？」

「なにが？なにもかも、かな。不満と言えば全てが、だし。そうさせるのは……やはり全てなんだらうね。それがくだらないことにぼくを駆り立てる理由なんだらう」

「そんな馬鹿な理由があつていいのかよ」

「もうどうでもいい、だろ？……君と話していて楽しかった、かな。最後なのは残念に思う。けど、いつまでも話しているわけにはいかないしね」

「どうしても、駄目なんだな」

「もう手遅れなんだよ。もう引き返せない」

「……手遅れなわけがあるかっ！」

「なんだらう、どこかで」

「覚えのある……流れだ」

「わかつてるだらう。もう、ぼくは彼女達の……」

「そんなはずはない、お前は自我を保っている」

「そうとも、これはぼくの意味だ。だからこそ手遅れなんだよ。君がどういおうが、どうしようもない」

「……もう一度、最後に聞こう。本当に、どうしても、駄目なんだな」

「ああ」

「そうか」

俺は顔を伏せる。

こうなることはわかっていただろう？

決意を固める、というのはいさういうことなんだから。

だが、待て。俺が今感じているのは確かに無念さ、喪失感。

でも、それだけじゃない。

これは憤怒……いや、それとは別の喉元までこみ上げる気持ちはなんだ？

「なら、力づくでとめるまでだ」

一瞬で彼に俺は接近する。

いつのまにやら握り締めていたバットで彼に殴りかかっていたのだが、彼は平然と左手で予測していたかのようにそれを受け止める。

彼の左手の骨が砕ける音。

だが、揺らがない表情。

それはまるで、申し合わせたかのようなやりとり。

「……やはり、君がまずぼくの前に立ちはだかるわけだ。期待していなかったといえ、嘘になるけどやっぱり驚きだよ」

ぼくに答えてくれるとはね、と彼は先ほどとは全く違う。笑みを見せる。

その顔の皮膚の裏側からは、黒くうごめく何かが見えていた。

「ふん、なんだよ？止めてほしかったのか？」

それでも俺は怯まずバットに力を込め続ける。

「いや、違うよ。まず君を傷つける口実が欲しかっただけだよ……ミマタ」

「だろうな。そうじゃなきゃ、こっちもおもしろくない。」

「絶対に」

「お前を」「君を」

「止めてみせる！」「超えてみせる！」

ミマタと呼ばれた俺は、彼と同じ表情を浮かべ、その腕をはのねけた。

どつやら、ミマタは、いや、俺は、自分は、いや、やはりミマタか
……？

なにかに疑問を抱く時。

僕はまどろみから一気に浮上する。

………泡？

*

夢の中から浮かび上がった俺は、気だるさとともに徐々に目を開く。目に映るもの、それが、その景色がなんなのかわからない。

だけど、少しづつ覚醒するにつれて、ここが現実で、自分の部屋だとそう認識出来るようになる。

部屋の付けっぱなしの電気を見上げて、脈絡もなくそういえば靴を学校に忘れたんだっけと思い出した頃、ようやく身体を動かそうとし、なぜか動かない。

それでも無理やり動かそうとし、ギシツという音と共に痛みが走り、うめいて即座に中止した。

………また、なんかやらかしたっけ？

………？

不思議と気分は落ち着いている（というより寝ぼけているだけに）、心臓は直前まで俺が暴れまわっていたのかというくらいに、激しく音を立てている。

なんだろう？

まさか、本当に暴れまわっていたのかな。

ただし、寝ながら。

うわ、それは痛々しい光景だ。

………その結論は、勘弁してやろう。自分のため、世のため、人のために。

と、段々、心臓は落ち着いていき。

それにつれて冷静な思考が寝ぼけた頭に、冷たい水が入るようにし

て戻ってくる。

目が覚め、意識が醒めてくれれば。

ああ、頭が痛い。

いや、やっぱり身体も痛い。

なんだろう、最近の朝は身体の痛みをこらえるのが日課だ。

日に日に痛みが増しているのは確実なので、そのうちショックで死ぬんだろう。

それまでに生活を改善した方が良さそうだ。

いや、性格を変えなきゃ無理と即座に判断。

結論、なんとかは死ななきゃ治らない、よって生活は生きているうちには改善できないだろう。

「……よし、来世に期待しよう」

まあ、そんなものがあれば、だけど。

「なに朝っぱらから、後ろ向きな決意固めてんの」
入る冷静な突っ込み。

ん？

「あれ、美弦？」

なんで美弦が俺の部屋に？

今、朝だよ？ここ……俺の部屋だよ？

美弦はなぜかベッドに腰掛け、俺を見下ろす。

「昨日の話、憶えてる？」

「……なんかあったっけ。」

「というか、いつ寝たのかすら憶えてないな」

「……そう」

美弦を見ると手に毛布を握り締めていた。

「なに、この部屋に泊まったの？」

「悪い？」

ジロ、と俺を睨む美弦。

え、なんか凄まれた！？

「え、いや。悪くないですけど」

一応、自分の服を確認する。

よし、着てるな。

……いや、じゃなくて。

どうやら、俺は服を着替えないまま寝たらしい。と、今はそれを確認しただけで、別にやましい理由で確認した訳ではない。

……着てることに安心したのは本当だが（へたれ）

ああ、疲れこんでそのまま倒れて寝たんだな。

「ねえ」

「ん？」

「本当に何も覚えてないの？」

「……そう言われても」

憶えていないものは、憶えていないわけで。

いや、でも。

「あ」

「なに？」

「すごい変な夢を見た」

殴られた。

「えっ、なにそれ！？どういうリアクション！？」

「うるさいー！」

「……はい」

なにも睨むことないじゃん。今にもまた殴られかねぐらいに拳握ってるし

美弦は立ち上がる。

「え……と、どこへ？」

「寝直す！」

「え、寝なかつたんですか？」

「寝られるかつ！」

怒られた。

そのまま怒りの深さを表現するかのごとく、音を立てて歩き部屋を出て行く（決して体重を表現しているわけではない）

……俺がなにをしたと？

と、その時になってようやく自分にさっきまで毛布が掛かっていたことに気が付いた。

愛情に向けて嘘を吐く

包帯を変え、きちんと服も着替え（身体の痛みでだいぶ手こずったが）、ようやく頭の回転速度も常人程度には回るようになった。というか、常人程度の回転でもう全力回転だ。フルスロットル

今までの流れから総合するに全く覚えはないが、どうやら俺は昨日の会話の内容とやらで怒らせてしまったらしい。

それ以前の、玄関で言い争いしたことは憶えているのだが……。

どんなことを話したかな。

……怒るような内容。

あの流れから怒らせる話なんていくらでも予想できるなあ。

でも、仲直りはしているようだ。

怒り方がそこまで陰険じゃないし。

……ふーむ？

とりあえず階段を降り顔を洗うにする。

……染みるので控えめに。

洗面台を正面に、水道の蛇口をひねる。

冷水に顔を付ける感覚はあまり好きではないが、好き嫌いの問題でもないだろう。

ふと、顔を洗っている中で顔をあげる。

鏡の自分、それと目が合う。

視線、なにかいつもとは違う差異。

ああ、そうか。

目の前の自分の口元はなぜか笑みを形づくっていた。

……なあ、なにお前笑ってるんだ？
そんなに面白いことでもあるのか？
それとも、見た夢は楽しかったのか？
あまり内容を憶えているわけではない。
ただその顔を見て、不安になる。

ちゃんと俺は……俺だと言えるんだろうか。
……なんて、ばかばかしいこと考えてるな、俺。

「適当な所で切り上げて、さっさとリビングに入る。
さあて、親はいつもどおりいないだろうし、美弦はあの通りだったから、今日は一人で静かーにのんびりと朝食でも摂ろうかな。と思つたら、誰か女の子が目の前にいた。
その娘はどこか見たことあるような、あえて言うなら美弦によく似ていて、ずばらにカレーにトースト付けて食ってる感じも美弦によく似ていて、朝から不快にもニュースなんか見てるのもそっくりだった。つか、朝くらいテレビ消せよ、うっとうしい。」

「……なにつつ立ってんの、コウ。座つたら？」

おお、声まで美弦に似ている。

俺がその女の子をじつと見てみると、苛ついた様子でその娘は言った。

「……なに、コウ。私が居るのに文句でもあるわけ」

その物言いと、性格。

朝から不機嫌だな、感情の落差が激しいところまで……。

「って、実は美弦さん本人じゃないですか？」
「当たり前でしょ、さつきからなに!？」

うん、いや、って言うか。

なんで美弦がここに？

美弦、寝直すって言ってたような。

「眠れなさそうだったから、起きることにしたの」
「……そうですか」

にしても、顔合わせるの気まずいとかはないんですか。
ないか。

あっても、美弦は「私の方がなんで遠慮しないといけないの？」
だったらアンタが部屋に行けば？」っていうだろうし。

絶対に自分は折れないからな、美弦。

俺は勝手に納得して、いつものように席に座る。

ニュースはいつものように付けられ、美弦は俺と視線を合わせず、
そちらのほうばかり見ている。

ちなみに、朝食のメニューはカレーの翌日なので、もちろんカレー
です。

これ、結構つらい。傷口に香辛料。

涙目で食べる、カレー。

「いやなら、食べなきゃいいじゃん」

ボソッと、美弦は言った。

目を合わせず、俺も返す。

「食べないわけにはいかないでしょう？身体が保たないし」

これはこれで保たないけど。

「なんでもいいから買ってくれば？」

「無駄遣いはしないことにしてるから」

「ならフツーに食べば？」

「痛いものは痛いんだってば」

「……そんなに痛いのか？」

かなり痛い。殺す気が、って思うぐらい痛い。

なんだろう、心なしか口の中の感覚がなくなってきたような。ただし、痛覚以外。

……いや、そろそろ痛くなくなってきた。

うん、ただ鉄の味だけがする。

………馴染み深い味です。

「ねえ、そんなに痛いの？」

「……ん、まあ、ちよつと」

嘘です。

だって、もう痛くないから。

ため息を吐く美弦。

立ち上がって、冷蔵庫まで行って………なんだ？

「はい、これ」

差し出されたものを見る。

………プディングじゃないですか。

ピンク、みどり、きいろの三色プディング。

「これは?」

「染みるって言ったから」

「いや、……いつ作ったの?」

「いいから!」

俺は頷いて、受け取る。

……本当に悪いことしたかもしれない。
ごめん、って今言ったら遅いだろうか。

許されるなら、土下座して延々と2、3時間謝り倒したい。
って言うか、むしろ、土下座している所で頭を踏んづけてくれて
構わない。

それぐらい、すまない、と思ってる。

……やっぱり、俺はMなのか?

「早く、さっさと片付けてくれない?」

「うん」

俺はスプーンを手にとり、プディングを掬う。

それを大事に大事に、味わって食べる。

もちろん、全く染みないわけじゃない。

でも、よく冷えたプディングは、たぶん甘くて。

でも、美味しいかって言われたら、きつとちよつと微妙で。

つか、もう味もなんもわかんないんだけど。……でも、俺のため
に作ってくれたもので。

「美弦?」

「なに」

「すごく、美味しいよ。ありがとう」

嘘を吐いた。
でも。

「そう」

素っ気なさそうな返事を聞いて。
返事を聞けて。

俺は、すごく、嬉しかった。

「ねえ、コウ？」

「……どうかした？」

なんだろう、すごく美弦が落ち着いている感じがする。
いつもはない、極まれに彼女と向き合う中で生まれる緊張感。
他の奴と、違う。そう思わせる瞬間。

……この感覚があるから。

「私には、やっぱり一切関係ないの？」

俺は美弦になんだかんだ執着するのかもしれない。

*

彼女は紅いピアスを付け直す。

それは彼女にとって、自己を確認する意味合いを持つ。

なぜなら、それだけが、今、自分が自分自身であるという
ことを証明する証だからだ。

彼女は自身に問う。

私は本当に私なのか、と。

そう、自己の存在証明のためだけに彼女はそれを身に付ける。

それは世界に唯一つの紅。

赤はこの世に無数にあれど、この赤だけは紅として自身を示す証。例え、赤が他に幾百といっても、この赤は私の紅。

二つと存在しない紅。

私だけの紅。

彼女はそう、その紅を身につける。

たった一組しかないその紅は、彼女が彼女である時。また、そうでない時も、その身を片時も離れることはない。

もし、離れることがあるとするなら、それは自分が消えた時だけだ。

……そう、少し前までは思っていた。

だが、もう一つの可能性を彼女は彼女である時に見つける。

もしかしたら、私は私の証明をしなくても……もう、いいのかも
しれないと。

なぜなら、気付いてくれる人が。

いや……かもしれない人がいるから。

もし、そうなら。

私はずっと、永久に他の誰でもない私になれた、とそう言えるの
かもしれない。

だが、それを信じられはしない。

自分が自分であること。

人間は他人を持ってして、自分と言う存在を定義する。

自分が自分であるためには、鏡が必要なのだ。

だからこそ、人は人の間に自らを置く。

だが、私は既に人でなく。

鏡に映される姿も、歪み、……ずれている。人からはずれている。

……それでも、私は誰かを必要としている。

私の役割は、狩ること。

私はこれから、狩りをまた始める。

その中で、私は私の望みを叶えることができるのか。

それとも、私は……。

私は……？

動きの見えない初手までに（前書き）

改定と執筆を同時に行っています。内容は変わりませんが、少しでも読みやすくなれば、と思います。

すこし、時間はかかりそうなのですが、気長にお待ちいただけるとありがたいです。

動きの見えない初手までに

父が嫌いだった。

母も嫌いだった。

弟も嫌いだった。

父は弱い、老いた生き物だった。

母に見限られ、自らの子どもを理解する知恵も柔軟さも持ちえず。

新たに何かを始めることなんて出来はしない。

自分に都合のいい言い訳だけをして生きていく。

憎んではない。

ただ、生きていることが哀れだった。

母も弱い、女という生き物だった。

新たに男を作り、それを父と呼べと言った。

男を捨てたくせに、男がないと生きていけない母は。

父を勝手に見限り、罵り。女という生き物がいないと生きていけない父と、それを罵る自分が全く変らない生き物だということを知らなかった。知ろうともしなかった。

女は身勝手で、何も見ない。他人の苦しみと弱さを知らない、無知な生き物だ。

これも、憎んではない。

ただ、見ていておぞましいと思うだけだ。

弟も弱い、子どもという生き物だった。

子どもは、他人の痛みに鈍感だ。

他の人間が痛みに耐えて生きていることなんて、知りもしない。

いや、痛みをこらえているのを知ると、血を流すのを知ると。

笑う。

残酷で、優しくすればそれが当然だと思い込む。
でも、憎んではいなかった。
ただ、生まれながらにして救いがなかった。

そんな中、彼だけは『特別』だった。

彼は、だけど、彼は……。

自分を『たくさんある、よくあるものの一つ』だとそう言った。

第五話 『停滞』と『流動』の『同一性』

なぜか、気が付くと。

俺は美弦にやり込められていたわけで。

「……俺はなにもしてないんだよ？」

「わかってるってば」

「ただ単に、そう……夢の話だからね？」

「しつこいなあ、いいから早く！」

俺はため息をついた。

まあ、今日は学校が休みだったので、どうせ状況を整理しようとは思っていた。

その過程で、美弦に話すのも悪くはないだろう。

……話を整理するための手段として、誰かに聞かせることはとても効果的な手段であるし。

人が悩みことを誰かに話すことで楽になるのは、それがごちゃごちゃした情報を、脳の中で処理し整理するのに適した作業だからだ。

ただし、美弦にこういいう話をする際には、一応……こういいうルールがある。

一つ、これは現実の話ではなく、それによく似た何かだ。
一つ、この話の主人公は、俺ではなく、Kくんだ。
一つ、俺が話せないこと……ではなく、設定されてないことにはあまり突っ込まない。
などなど、あくまでこの話はフィクションであり、現実の団体、人物、事件とはまったく関係がありません。という前提のもとで行われる。

まあ、美弦もそのつくり話を聞き、自分の意見を述べてくれた。もちろん、あくまで作り話として。

「つまり、今の疑問点はさ。その1、Hさんがどんな事件に巻き込まれたか。その2、襲ってきた男はなんなのか。その3、Hさんの目的はなんなのか。ってところ……かな」

このHはもちろん、藤咲だ。

襲撃して来た男は、とりあえず正体不明、としておく。

「ふうん、で、Kくんの今後はその女の子をどうやって護るか。事件を解決するか。が目的な訳ね？」

「そう」

もう一度言うが、Kくんはあくまで俺だ。

でも、この場では俺でないことになっている。

「そのためには情報を集めて、疑問を解消する必要がある……と」

どんな事件かわからなければ事件は解決できない。目的がわからないから、彼女は護れない。だから、まずは情報を集めなければな

らない。

「ああ、でも実際厳しい状況だよ」

「確かに。ちよっと手の出しようがなさそう。Kくんは誰かの手は借りれないの？」

「……出来ればKくんは、誰かを動かす以上は決め手が欲しいと思
い込んでるんだ」

「どうして？」

「必要以上に他の人を危険に巻き込みたくないらしくて。完全に事
件を手玉にするまではリスクを負いたくないんだよ。まあ、利用で
きるものを全て利用するぐらいの気概があれば、話は早いんだけど」

まるで他人事のようだ。

自分で話していて違和感がある。

「まあ、手玉にとる、まではいかななくても事件の手がかりを掴んで、
積極的に真相を追えるぐらいの体制じゃないとき。リスクを冒す意
味がない。それ以前に、Kくんはさ。四六時中、Hさんに護衛を付
けたいと思ってるんだけど……無理だ。どこから来るかもわからな
い奴相手に迎撃できるなんて、そんな動きの出来る知り合いはいな
い。……まあ、最悪Kくん自身がそうしてもいいんだけど」

「……Kくんにそれはやめて欲しいかな」

「わかった」

まあ、いざとなったら実行するつもりだけど。

でも、このままの感じだったら。

「手を借りないわけにもいかない……かな」

賭けの要素が高いけど、単独じゃどうしようもないな。

「Kくんは、そんなにのんびりしてていいの？ 今すぐにも手を打たないと危ないんじゃない？ ……いや、もう遅いくらいかも」
「そんな、昨日今日で襲ってこないよ。たぶん」

昨日にも死体が発見されているだろうし、あまり騒ぎは重ねたくないだろう。

……実はあのあと、公園の様子を調べたのだが、すでに警察がやって来ていた。

俺がわざわざ危険を犯してまで、現場の状況を調べたのは、もし、誰にも発見されていないのなら、死体を発見されるように直に手をくわえる必要があったからだ。

下手すると、死体が男の仲間に隠蔽される可能性があったからな。あの男が単独犯という可能性もあるが、もしそうなら、犯人が死んでもなお藤咲さんが意地を張る理由はなくなっているはずだ。

「なんだか、たぶんって言うてる割に、やけに自信ありそうだけど。すぐにも関係者は始末したいのが犯人の……集団なら、悪の組織？ ……の思考じゃないの？」

「まあ、ちよつと自分でも甘いかな、とは思っよ」

だが、少なくとも一度は襲撃に失敗している以上、次は警戒して、絶対に確実に用意周到な方法で来ると考えられる。

ならば、そのための準備として時間は必要だろうし、確実な手段として、こちらの油断をさそうためにも、数日から、長くても1カ月くらいの期間をあけて臨んで来る可能性が高い。

また、複数の第三者による介入（つまり俺やウツロギの）があった以上はしばらくは俺の素性など、彼女の周囲の人間についても調べられることは確実だと思われる。

彼女を消したとしても、彼女が持っている情報かなにかが漏れば、
なんの解決にもならないのだから。

よって、相手側の情報収集が終るまでは、彼女は恐らく安全だ。

「……なんか、結局さ。コウはさつきから、こうだと考えられる、
可能性が高いと思われる、恐らくはそうだろう……って、曖昧な表
現ばかりだね」

「悪かったな」

「って言うか、人の命が賭かっているんだよ？わかってる？」

「……わかってるよ」

「遊びでもゲームでもないんだからね？」

「わかってるってば」

俺はこれでも真剣にやっている。

賭けている命は自分だけじゃなく、賭かっているものは藤咲さん
の命だけでもない。

ウツロギはどうでもいいけど。

「……まあ、ようするにさ。Kくんは目が覚めていても、寝ぼけて
る時と思考レベルが変わらないってことですよ。常に曖昧で微妙な
思考回路」

なんか本当に五月蠅いな、美弦は。

なんでここにきて、そこまで突っかかって来るんだよ。

「……で、結局どうするの？」

「なにが？」

「Kくんは、知り合いに頼むの？ 頼むんだったらなにを？ 誰に
？」

「それは……一応考えてるよ」

「思いついてないんだ」

五月蠅いな。

でも、こうしてると、子どもの遊びみたいだな。
自分で言うのもなんだけどさ。

……とりあえず、それは置いて。

「あとは……そうだな。関係のありそうな事件があれば知りたいけど」

「残念だけど、それだけの情報じゃ絞り込めないんじゃない？」

「……まあ、そうだね」

事件なんて星の数ほどある。他の人からしたらどうでもよくて、当事者にとっては衝撃的な数多くの事件。その中から、目的のものを取り出すのは不可能だ。

「ねえ、コウ？」

美弦は顎に、華奢な手を添える。

「本当に例の事件は関係ないの？」

「……例の事件ね」

俺はテレビに目を向ける。

若い女性を狙った連続猟奇殺人。

「一件目は女子高生……だったけ？」

「うん、そう。Hさんは高校生って設定なんでしょう。可能性はあるんじゃない？」

「それは、いや、ずいぶんご都合主義って言うか、なんていうか
その言葉に美弦が諭すように言う。」

「あくまで……作り話の話なんでしょう?」

俺は頷く。

「……そういえば、そうだったね」

そんなはずはない、という思考に捕らわれてはいけない。美弦はそれを言っているのだ。常識に捕われるな、と。

そうだ、相手は異常なんだ。正常な世界で考えるな。現実はいつだって、想像の斜め下に行く。

俺の顔を見ながら、さらに美弦は言葉を続ける。

「タイミングで言うならHさんの様子がおかしくなったのは……昨日の朝からでしょ?」

「まあね」

「この事件と関係あるとすると時期は合うんだよね」

「……どういふことだ?」

「どうやら、事件について俺の知らない情報が美弦にはあるらしい。でも……。」

「美弦は……Kくんにはこの事件に関わってほしくないんじゃないかなかったっけ?」

「目の届かない範囲でやられるよりマシと思うことにした」

ああ、ほっといてもやると思われてるんだ。

「だいたいコウ……Kくんなら、いずれ知ることだろうし」

「……まあ、そういうことなら素直に話を聞くことにするよ」

と、なると……。

事件の概要の確認をしておくか。

「まずさ、コウはどこまでわかっているの？」

どこまでって言われても。

「まず、最初の1人は女子高校生だっただけ？」

「そう、あとは？」

「……さあ？」

呆れたような目で美弦が俺を見る。

「2人目は今年入社したばかりのOL。3人目は20代前半の女性」

「ああ、そんなだったね」

覚えてるわけないだろ、俺をお前と同じ殺人マニアだと思うなよ。

美弦。

俺はそんなニュース、嫌いなんだからな。

「で……4人目は女子大学生だったよ」

その情報にはさすがに驚かされた。

「へえ、4人目ね。いつの間に？」

「発見は一昨日の夜かな。放送されたのは昨日だけど」

「……ふうん」

「ね、可能性はあるでしょう?」

確かに。

発見された当日に犯行が行われた可能性もある。藤咲がその犯行現場か、もしくは……そう、それこそ犯行後の死体を目撃した……とかなら、彼女の取り乱した様子にも説明がつく。

犯人に命が狙われた以上は、犯行自体を目撃したと考えるとしつくりくるな。そのせいで、犯人は目撃者を消そうとした。

まあ、笑えることに時期は合うわけだ。

でも、そんなの辻褄が合うだけだ。
可能性があるというだけでしかない。

と、ふと事件の被害者を思い返して違和感を覚える。
なんだ?

「……美弦」

「なに、どうかした?」

「4人の被害者の年齢は?」

「えっ、なにいきなり。えーと、だいたい……最初の娘は高校生で……16歳。次が、OLで21歳。3件目はフリーターで22歳。4件目が大学にストレートに入ってて4年生だから……えーと」
「21〜2歳ってところだな」

コイツ、年齢だけでいいのに、わざわざ細かいことと一緒に憶えてるんだな。

……器用な奴。

でも、なるほどだな。

共通点はあるし、あとは……。

「だからさ、コウ。なにを思いついたわけ？」

「いや……話はズれるけどね。俺はこの事件、じっくりこないんだ」「どういうこと？」

「一つは、犯人の犯行の目撃例が全くない。と言う点」

今まで一度も目撃されていなかった犯人が、ここに来て一介の女子高生に目撃されるミスを犯しているとするとそこに不自然さを感じる。

だがそれよりも、根本的に今まで誰にも目撃されないようにどうやって人を殺していたのかという謎の方が大きい。

「犯行の時間帯はいつだかはつきりしないけどさ、昼なら難しいだろうし、夜なら女性ってこともあるし相手が警戒しているだろう？」

犯人が人通りの少ない場所で待ち構えていたなら、なぜわざわざ被害者はそんな危険な場所を通ったのかな？」

「どこかで連れ去って、安全な場所で殺したとかは？」

「それ、意味ない。連れ去るタイミングをとるにも犯人は人気のない場所を選ばないといけないだろ？」

「まあ基本的にはね。でも、どこかの屋内。カラオケボックスとか、トイレとかならどう？ フツの店を装った犯人のアジト、そこに偶然遊びに来た女性を襲っている、とか」

なるほど。死体は後から適当に捨てている、と。

「被害者は自ら犯行現場に向かったってことか」

やはり美弦は頭の回転が早い。それとも以前からそのことについて考えていたのか、どちらにしてもその論理的な思考回路は他の女

子とレベルが違うように思う。

でも、もしそれなら犯人の店に入る所を誰かには目撃されるだろう。捜査する警察だってわかりやすそうなものだけだ。どうなのだろう？

俺は自分の意見を頭の中でまとめようとする。

が、美弦は先に話を進めることを求めた。

「他に引つかかる点は？」

俺は少し戸惑いながらも、美弦に合わせて話を進めることにする。ただし、この件について考えながら、だ、

「あー、うん。確かではないんだけどさ、ねえ被害者の写真とかあるかな」

「……なんでそんなもの、持ってると思うわけ？」

「えっ、ないの？」

美弦が被害者の写真を持ってないだって？

もし、そうなら意外すぎる。

「……あるけど」

ですよねえ、ないわけじゃないですよね！

「って言うか、私ってそういうイメージなんだ」

と、美弦はそうブツブツいいながら、どこからかファイルを取り出した。

持ってきてくるということとは、最初から出す気だったんじゃないか？

美弦は一件目から、順番に被害者の写真……正確にはプリントアウトした画像を並べる。

「で、どうなの？」

「なにもそんなにムスツとしなくても」

「別にしてませんか？」

不機嫌そうな美弦を無視して、俺は机の写真を見比べる。
こうして並べると……やっぱり予想していた通りだ。

「ほら、一件目以外の被害者だけ隠すと」

「……ああ」

「ね？ なんとなく雰囲気、みんな似てる」

「目の印象とか、鼻筋とか……なんとなくね、そんな感じはするけど」

「まあ、年齢が近いのもあるだろうけどね。こうなると年齢や、顔立ち……一件目だけ、ね違和感があるんだ」

あくまで、これは予想にしか過ぎなかった。

なんとなく被害者の年齢を聞いていて、2件目〜4件目の被害者の年齢に共通性があると疑問に思っただけのことだ。そう思って、外見を確かめただけに過ぎない。

海外での猟奇事件とかの情報を見るに、犯人は自分の好みで標的を決めるからな。

……だいたい、被害者のタイプも似てくるわけだ。

「って言っても、美弦。それは予想してたんじゃない？」

「まあね、それくらいは私も考えたよ」

まあ、当然だろうな。美弦なら。

写真を並べて持つてる本人が気付いていないはずない。

「で、美弦。一応、参考として一つ聞きたいんだけど」「なに？」

「世間に被害者の内臓が持ち去られてるなんて、明らかに警察がマスコミに流しそうにない噂が広まったのは……どの事件の時点？」

即答する美弦。

「ああ、それはもちろん、二件目から……ね」

どうやら美弦はこれも予想していたらしい。

「まあ、情報も証拠もない中で、あまり確定的に話したくはないけど、全ては二件目以降の犯人が一件目に犯行内容をかぶせようとしたんじゃないか……と俺は思う。犯行の内容はまだしも、被害者のタイプが似過ぎてるし」

「でも、一件目の事件の情報は犯人しか知りえないんじゃない？」「……まあ」

そりゃ、そうだろうけど。

でも、俺は知っているのだ。

(ただ、最初の一件目の事件は若干趣が異なる)

(持ち去られていた内臓がたった一つだけ、肝臓のみ)

(実はこの事件の最初とされている犯行は、実は別件なのではないか)

(この金檻 戒がこの事件の第一発見者ということだからだよ。八賀谷 コウ)

結局、自分の発想がアイツと同じ地点と言うのには腹立つな。

……いつそ、アイツが犯人なら全て解決なんだが。

金檻 戒。

アイツに聞ければ、この事件に藤咲が関係ありそうかわかりそんなものなんだが。……出来れば、それはやりたくない。

悪魔と契約するようなものだ、ろくな結果にならないのは目に見える。

悪魔と契約、とまでいかず取引するにしても、駆け引きの材料は必須になる。そのためには、情報においてこちらに少しでもアドバンテージがないといけない。

それに、もう一つ。

最初の一件目。

この被害者の女子高生の顔が……いや、と言うよりは雰囲気と言った曖昧な印象でしかないが、その被害者の目。

どこかが藤咲 マミに似ているのだ。

*

結局、俺はある人物に電話を掛けた。

あまり気は進まないが、こういう時に頼りになる人間はそう多くない。

ベル音が携帯の向こう側から鳴る。

二度、三度。そして止まる。

「はい、佐才です」

案外、礼儀正しく電話に出るのが、佐才登と言う人物だった。

「俺だけだ」

「俺なんて言う名前知り合いはいないな」

「……八賀谷コウですが」

「ああ、着信の時点からわかってるよ」

ふざけてんのか、コイツは。

礼儀正しく電話に出ても、礼儀正しく対応しないのが佐才登と言う人物だった。

この野郎。

一度、考え直そうかと思っただが、自分が大人になろうと思っただけ。

「……登、暇か？」

「忙しい、と言えば後が怖いな。暇だ」

いちいち余計な一言を付け加えるよな、コイツは。

「ちょっと面倒なことなだけだよ」

「ちよつと？ かなり、だろ」

「……かなり、面倒なことなだけだよ」

「まあ、お前の電話が面倒じゃないことはなかったな」

うん、やつぱ切ろうか。

……いやいや、心を広く持つんだ。大人になれよ、俺。

「で、話を受けてもらえるかだけ先に教えてもらえる？」

「内容は？」

「聞いてからのお楽しみだ」

「まあ、どうせ、退屈してたしな」

こんなまどろっこしい言い方をしているも、今まで登が俺の頼みを受けなかったことはない。

その辺は安心して、頼めるんだけど。

「とにかく、やるかどうかの二択で言ってくれよ」

「いちいち情報を出し惜しみされると、モチベーションが下がる…」

「切るぞ」

「やる」

登は俺が本気だと感づくや否や、すぐに態度を翻した。

登が断らなくても、俺がこんな風にしびれ切らし、頼みを受けてもらう前に取り下げることが一度や二度じゃないのだった。

登の対応も慣れたものだと思う。

って言うか、余計なやりとりしないで最初からそう言えよな。危うくまたキャンセルするところだったじゃないか。

「で、どんなことやらかすんだ」

「それはまだ、言えない。とりあえず、頼みを聞いて欲しい」
「都合いいな」

まあ、仕方ないだろ。その辺は。

俺が黙っていると登が口を開く。

「そっいや、自転車に挟まってたゴミ、どうした？」

「あ、それ、捨てた」

「捨てた……だと」

「ああ、もう思い切りな。わざわざ捨ててやったんだから感謝しろ」
「や」

「……へえ、そりゃ珍しい。いつから綺麗好きに？」
「俺はいつも清潔な男だ」
「……よく言う」

なんだコイツ。
尋問し始めたぞ、俺を。

「……そういえばな」
「ああ」

「学校の前の公園で死体が見つかったらしいぞ」
「へえ、初耳だな」

嘘じゃない、耳にするのは初めてだ。

「……そうか」
「ああ、ニュースにそんなのあったか？」
「いや、そう言う訳じゃない。実は第一発見者は張山でな、アイツから連絡が来て知ったんだ。まだニュースには出ていない」
「張山が？」

あのバスケット部の？

「アイツは放課後、バスケット部の部活に出ているんだよな？」
「ああ、そうだ。ただ、その日はたまたま早めに部活をフケて来たらしい。その帰りに死体を見つけた……んだそうだ」
「へえ」

なるほど。

素直に部活出てりゃいいのに、タイミングの悪い奴だな。

「で、例の連続猟奇殺人と関係あるのか？」

「さあな、お前の方がよく知ってるんじゃないのか」

「なんだ、それ」

「……もし、お前が本当に事件について全く知らないなら、まずこ
う聞くはずだ。いつ起こったんだ、ってな」

それは……確かに。

事件が起きた、と登は言ったが放課後の後すぐ、つまり夕暮れ時
だとは誰も言っていない。

俺が「アイツは放課後……」と聞くのも流れからは不自然だし、
部活動を終えてその帰りつまり、発見されたのが夜でも別におかし
くない。

「まったくお前が時間について触れずにいるのも奇妙な話だろ」

「……でも、それ根拠として弱くないか？」

「かつ、いつもお前は放課後には部活に出ている」

「まあ、あれが部活と言えるかも不明だがな。でも、昨日は出てい
ない可能性もあるだろ」

「ああ、その通りだな。昨日は特にわざわざ自転車の掃除してくれ
ていたわけだしな」

……ああ、もう。

嫌になるくらい察しがいいなコイツ。

「お前、人を問い詰めて楽しいか」

「お前こそ、ばれるかばれないか、ぎりぎりのラインの科白で人を
試して楽しいか？」

「別に試した訳じゃない。あえて言うなら、癖みたいなものだ」

そう、俺はあえてそのことを隠そうとはしなかったのだった。

それも、狙ってやっている訳ではなく、自然体で。

「無意識でやってるならいいとでも？」

「……うるさいなあ」

「そのうち、色々なくすぞ。特に信賴的なものを」

人から信賴得ようなんて思ったことねえよ。

とは、あえて言わないことにしておく。

なんか格好悪いから、人として。

「その辺は今は聞かないでくれ、ちゃんといずれ説明するから」

「隠し事するのは構わんが、どこのなにを隠してるかぐらいは説明しておけ。……どこまで触れたらいいのかわからなくなるからな」

「よくわからんアドバイスありがとう。今後に向けて検討しとくよ」

「で？」

「で、ってなんだ」

「俺はなにすりゃいいんだ？」

……………。

始めからそれを言ってくれ。

回りくどく、本題の前にくどくど説教するのが大好きなのが佐才登と言っ人物だった。

さて、それでもとりあえず一人は決まったわけだ。

……………「一つ目の手は。」

動き出す人々

「あらあ、藤咲さんじゃない。……休みの日なのにわざわざ来たの？」

「ええ、まあ」

「……ふーん」

なんだか、なんとも言えないような目で、加藤先生に見られた。

「なんですか？」

「いやあ、別にいい。あ、なんか飲む？」

「……先生も休みの日なのに来るんですね」

「まあ……一般生徒は休みだろうけどね。色々ある生徒もいるからさ」

そうやって先生は、コーヒーメイカーへと向き直る。

その色々ある生徒の中には、ついこの間から、私も含まれているのだろう。

「もしかして、邪魔ですか？」

「ううん。こんなに早く来る子、いないから……あと1、2時間は大丈夫かな」

「……そうですか」

「で、藤咲さんは私になにか相談ごとなの？」

「はい……いえ、そうじゃなくて、なんて言ったらいいのか」
「うん」

加藤先生は相槌を打ちながら私にカップを手渡した。

中身は……結局、コーヒーのようだ。

前に言ってしまったけど、あまり好きではなくて。まあ、嫌いではないんだけど。

「その……やりたいことはあるのに、どうしたらいいのかわからなくて」

「あー、そう……」

先生は椅子に座り、ひまわりのカップを手の平で回す。

「んー、相談ではないって言うのは？」

「あの、どう話したらいいのかわからないので。相談にならないって言うか。自分で考えたいって言うか」

「ふーん」

「自分で考えたいって言うてなんですけど……ここしか来るとこなくって」

「そっか」

先生はコーヒーを口に含む。

私もカップに口をつけ、……一瞬、緊張する。そして、ふっとその暖かさが、自分にとって適温だと知ると一気に安心した。

加藤先生の顔が緩む。

「じゃあ、悩んでいくといいよ。気の済むまで」

「……ありがとうございます」

「どうしても……なんていうのかな、悩みの内容じゃなくて、なにが手段が欲しい時って言うの？　そういうことがあったらなにか答えられるかもしれないから。そう、なんでもいいから気が向いたら言ってみて」

「あっ、はい。でも……」

「でも？」

先生は首をかしげる。

「私、なんて言ったらいいのかわからなくて」

「んー、表現の仕方がわからない……ってこと？」

「たぶん、そうですね」

「じゃあ、こういうのは？なるべく近い感じのたとえ話で話す」

「たとえ……ですか？」

「そう」

そう言われても、なにも思い浮かばない。

たとえ話、とか。自分の気持ちを表現するとか。

……そういうものは得意じゃないし。

「藤咲さん、小説は読む？」

「一応は。あまり多くはないですけど」

「じゃあ、それで。たとえばねえ、あー、誰にも言えない事件に巻き込まれちゃった。あら、私、どうしたらいいのかしら？……みたいな」

私は驚きと、僅かな感動が入り混じったような、複雑な衝撃を受けた。

「あの、ちょうどそんな感じですよ」

「ああ、本当に？ややこしいわねえ」

「はい……ですね」

加藤先生と私は同時に、ため息のようなものをついた。

「なら、そこに……そう、刑事や探偵みたいなの。ホームズみたいなの

人はいないの？」

「……います」

「じゃあ、その人に……ああ、任せるわけにも、協力するわけにも
いかないのね？」

私は黙って頷く。

「じゃあ、その人とはどんな関係なのかしら？」

「どんな？」

「どんなって、……どんなだろう。」

友達なのかな？」

「あの……わかりません」

「そう？じゃあ、あなたはその人をどう思ってるの？」

「どう思う、か？」

好きとか、嫌いとか？」

「いや、そういうことじゃなくて。そもそも、そこまで親密でもな
くて。」

ただ、私が勝手に……思ってるだけで。」

「私は……護りたい人だと」

「その人を護るために、頑張ってるのね？」

「はい」

「じゃあ、あなたは事件をどうしたいの？」

「……どうしたい。」

私は、彼を護りたくて、彼らを助けたくて……でも、助けること
は出来なかったから。次は失敗出来なくて、だから。」

.....。

「私、気が付いたら相談してますね」

「違うよ」

加藤先生は当たり前前のことを言うように、断言する。

「状況を整理してるだけ……でしょ」

それは、確かにそうなのかもしれないけど。

でも、一人じゃ出来てないことには変わりないんじゃないかな。

「あなたは気にするだろうけど。私は、そうね、メモ用紙のような役割をはたしているだけだわ。どうせ使うなら、きちんと活用しなきゃね」

「……はい」

でも、思う。

私は結局、甘えているだけなんじゃないかって。
なにも出来てないし、戦えてないし。

……私は本当はなんにも変わってない、じゃないのかな。

駄目だ。

そんなんじゃない、駄目だ。

私は、ここにそんなことを考えに来たんじゃない。
ここを逃げ場にしてるわけじゃない。

私は、ここに解決するための方法を見つけに来たんだ。

「私は事件を、自分の力で解決したいです」

「そう、解決したい。……じゃあ、あなたの解決ってどんなものを

言っの」

「どんなもの……が解決？」

「そうよ。そうね、事件の犯人を捕まえたい、自分と大切な人の安全を確保したい。最終的な目標はなんなのか、それを決めなきゃ……誰もなにをいいのかわからないと思うわ」

「そう、ですね」

私は捕まえたい、わけじゃない。安全だけを求めてるわけでもない。

護りたいし、助けたい。でも、私の助けるって、なにが助けるなの？

私は……犯人を責めたいの？ 憎いの？

私は……。

「止めたいんです」

「止めたい？」

「犯人を止めたいんです。もう、こんな事件が起こらないようにしたい。もう苦しむ人がいちゃいけない。ただ、それだけなんです」

その言葉にすると、すたと自分で自分でも納得できた。

でも、あれ？ とも思う。

私ってこんな人間だったっけ？

「なるほど、ねえ」

先生は何度も頷く。

そして、コーヒーを飲み干し、口の端を拭いた。

「……でも、どうしたらいいのかわからないのね？」

「……はい」

「それは止め方がわからない、って言うのもあるんじゃないかしら」
「そうです」

「それと、こうね。犯人が誰なのか、どこにいるのか。それがわからない」

「……はい」

そう、それさえわかれば、私にだってどうにかしよつがあるはずだ。

犯人が誰か、さえわかれば私にだって、出来ることはあるはず。先生は私を見て、微笑む。

「ああ、なら、もうすることは決まってるんじゃないの？」

そして、ヒマワリのカップをすこし、傾けた。

*

「ああ……わざわざ何か用でしょうか」

加藤は新しく淹れなおしたコーヒーを片手に、入り口に向き直る。先ほど出て行った藤咲 マナミ。それと入れ替わりのように現れたのは。

「……神城先生？」

数学教師である神城 由枝だった。

問われた神城 由枝は、その人形のような顔に苛立ちを浮かべていた。

この場に八賀谷コウが居れば、それが珍しいことだと思っただろう。

「どづいつつもり？」

加藤は首を傾げる。

「なにがです」

「……彼女をいったいどうしたいの？」

「おっしゃっている意味がよくわかりませんが……」

加藤は困惑した様子でそう言った。

「彼女を危険にさらすつもりか、とそう聞いているのよ」

そう聞かれ、加藤は考え込むような表情を数秒だけみせる。が、ようやく納得した、とでも言うかのように頷いた。

「……ああ、彼女が事件……とそう言っていたことですね。立ち聞きは正直、どうかと思います」

「質問に答えなさい」

神城 由枝の声に、怒りの色が増す。

加藤は呆れ半分に、もう半分はやはり困惑を添えて、返した。

「確かに、物々しそうな話に聞こえましたでしょうが、あれは例えですから。……あまりにそのまま真に受けしないで下さい」

先ほどとは違い、カップから湯気が立ち昇る。

加藤は、その香りを楽しみながら、内心を落ち着かせる。

「子ども達にとって……本来は、大人にとってもそうですが、日々起きることは本人にとって、すべて事件と呼ぶのにふさわしいくら

いに大変なことなんです。……それが、他の人にとってどんなにくだらなくて、どうでもいいことだったとしても」

そう言って加藤は微笑んで見せた。

「もつとも、人々はすぐにそれを忘れてしまいますよね。特に、他人の時には」

「……物はいいようね」

「神城先生は……ずいぶんあの子が気になる様子ですね」

神城 由枝はその綺麗に整えられた眉を歪めた。

加藤は鼻を鳴らす。

「でも、私は貴方の行動の方が気になります。1年生の八賀谷さんと、相当親しくしているようですね」

「それがなにか？」

「……このところは私の、いえ、藤咲さんの周りをよく嗅ぎまわっていらっしやるようで」

神城は答えない。

「もしかして、最近、八賀谷くんが藤咲さんと一緒にいるのは貴方がそうしろ、と言っているからではないんですか？」

「へえ、いろいろとよく考えるのね？ そんなくだらないことを」

神城 由枝は冷たい刃のような視線を、加藤に突きつける。

「……………っ！」

一瞬、その視線に気圧されるようなそぶりを見せるも、加藤はす

ぐに持ち直した。

「……あまり、教師として逸脱した行動をしていらっしやるのはよくないですね。今は見てみぬフリですみます。ですが、それもほどほどに。……そうでないなら、私にも考えと言つものがありますから」

「考え？」

「他の先生方や……そう、PTAの耳に入れば、貴方も困るんじゃないですか？」

神城 由枝の頬が僅かに緩んだ、がその視線の鋭さは全く変化はない。

「……つくづく人を馬鹿にしている」

「……私は本気ですよ」

「まあ、いいわ。私もいつまでも貴方と話している暇はない。……ここで失礼するわね」

踵を返し、黒く輝く髪が一瞬だけ広がる。

「あまり余計なことをしない方が身のためよ……加藤先生」

そう一言付け加え、颯爽と神城 由枝は部屋から立ち去った。

加藤はそれを見て、深く息を吐き出す。

だが、その目は睨みつけるように、神城 由枝が出て行った扉を見つめていた。

*

私は学校の前の公園、昨日の惨劇の場に来ていた。

ここに来到ることに抵抗がない訳じゃない。

今でも、彼を死なせてしまったこと、無関係の人達を巻き込んでしまったこと……あの時の自分自身の無力感、誰も助けることの出来なかった自分への怒り。来ないわけにはいかなかった。

周囲に張られているテープや足止めを踏み越えて、私は現場に踏み込む。

当然、人は周囲に見当たらず、鳥のさえずりや木々が風にざわめく音が聞こえる。

何も起こっていないかのような、いつもどおりの朝。

不審なものは見当たらない。

この目には。だけど、聞こえる。その中に、複数の……聞き慣れない声と音。その中には、どこかで聞き覚えのあるものが混ざってあった。

これは……誰かが私をつけている？

これは犯人だろうか。

今後の問題は、犯人はおそらく私の素性を知っていて、いつでも殺せるだろう、と言うこと。

これからは他の誰かが襲われるという、タイムリミットとともに、自分自身の安全も守りながら行動しないといけない。

私は一人だ。

自分の身は自分で守らないといけない。

その上で、彼らを助ける。

具体的にどうしたらいいのかわからないけど、でも何もしないわけにはいかない。

もし、私に出来ることがあるとすれば、今は情報を集めることだけ。

こんなにも私はなによりも無力な存在。だけど、一つだけ価値がある。

それは知っていると言うことだった。

犯人にとって、私は知っている存在であり標的。

だけど、私は犯人のしてしまったことを一部ながら知っていて、

また犯人自身をまた、ある意味標的にしている。

ここが唯一の、私にとって有利な点だ。どうあっても必ず、犯人に接触出来る。

ふと、誰かがいる気配。

とてもとても静かな音。

こんなに近くににいるのに、まだ本当にいるのかどうか確証が持てないくらいに静かで、まるで在感がない。

強いて言えば、ネコに近いような気がする。ネコはどこにでもいる一見してすごく可愛い生き物だけど、その本質は狩猟を行う肉食動物だ。日常的に足音を殺すように出来ているし、獲物を見つけたときに出さえ、一切の気配と音を殺し獲物に一瞬で近づく。だけど、それよりも静かなこれはいったいなんだろう？

でも、なんとというか危ない感じではないし。むしろ、なにかを傷つけるような動的な感じがしない。今周りでざわめいている木々のよう。

……これは音が小さいんじゃないやなくて希薄な感じ？

もしかして……？

「ウツロギくん？」

私はそう、と問いかける。

でも、返事はない。

なんとなく、目には見えなくてもなんらかのリアクションがあったように思う。

たぶん、頷いた？

私はそのまま近づいていく。生えている背の低い木々をかきわけて。さつきまでの自分では考えられない、無防備な状態で。

いつ殺されるか、そんな状況だったはずなのに。

……もちろん、そこに彼はいた。

なにも言わずに、一本の木を見上げている。なにを思っで見上げているのか、その表情からは読みとれない。

「何してるの？」

一拍おいて、抑揚のない返答。

「……まずは探しにきた」

「なにを？」

彼は私の言葉に答えずに、視線で辺りを探る。

警戒しているようにも、油断しているようにも見えない。

ただ、機械的に注意を巡らす。余計な意図は一切無く。

「ウツロギくんってば」

私はもう一度、彼に呼びかけた。

「一つは今見つけた。もう一つあるとすれば……」

遠くを見るかのようにウツロギは呟く。

まるで私が見えていないかのように。

「……あの男はなにを見たのか」
「え？」

あの男……このタイミング、場所で言うあの男。それはどう考えても一人しか想像できない。昨日襲ってきた、あの人。

その人がなにを見たのかを、気にしている？

これはどういうこと？ウツロギくんが犯人を捜している、いや、より正確に言うなら、たぶん事件の真相を探ろうとしている？

……そんなどうして!?

私は必死に自分を落ち着かせようとする。

出来るだけ冷静に……私がなんとかしなくちゃいけない、助けられるのは私だけなんだから。そう、自分に繰り返し心の中で言い続ける。

私はなんとか、平静を装いつつウツロギくんに話しかけた。

「あの、ちょっといい？」

首を傾げるウツロギくん。

ただし、2?だけ。

ちよっと、って言うか普通に見逃しかけた。

わかりにくいけど、聞いてはくれてるんだよね？

「あの男って、昨日の？」

ウツロギくんは頷く、かっくんと大きく唐突に。

リアクションの大きさに微妙に差があるなあ、とかちよっと気になった。

そのまま、ウツロギくんは言葉を続けた。

「そう、昨日のことだ。あの男がなにを見、知り、感じ、考え、思い、発見していたのかそれが何なのか、そこにいたい何があるのか。そこに目的がある」

それってつまり……？

「興味、ようするに好奇心ってこと？」

ウツロギくんは表情に一切の変化を起さず、首を一度だけ左右振る。そして、それを合図にしたかのように、動作を終えてから話し出した。

「違う。好奇心、興味深い、心惹かれる、などといった感情の問題ではない。知りたい、と言う探求心でもない。知らねばならない、あくまでそういう絶対必須条件の一つだ」

絶対必須条件。

それがなにを意味しているのか、私にはわからない。だけど、必ずやり遂げなければならぬ、と言うその意思はわかる。

他に選択肢はない、そういう風にもとれる。

だけど、私には彼がなんのためにそこまで固い表現を使うのか、その決意がどこからもたらされているのかがわからない。

「もしも……だけど」

私は無駄だと思いつつも、念のために問う。

「私がそれを……その答えを探すのを駄目だと、そう止めたらどうするの？」

ウツロギくんは今度は間髪入れずに答えた。

「その言葉は無視される、現在の目的は優先順位が高い。言葉だけでなく、物理的に止めようとした場合も同様。……ありえないと判断しているが、もし仮に無視できぬほどの物理的妨害と成れば、それに対しいかなる手段も行使せざるをえない」

それは彼にとって当然の答えであり。

同時に私にとっても、当たり前前に過ぎる答えだった。

お互いに絶対に譲れない、と言う。

*

封鎖された公園の領域で、ならば男女。

それを見つめる、二人の影。

それが、俺。

「おいおい、思わぬ組み合わせだな。なあ、篤史」

それに対し俺は一言。

「確かにね、二人に接点があるとはあまり思わないからね」

そう、登に同意の意を示した。

登は嬉しそうに笑う、どうやらよっぽど退屈していたらしい。

まあ、確かにさ、黙って女の子の後をついて行くなんて登向きじゃないし、ウツロギが橋本以外の女の子と居るなんてかなりの話題性だけどね。

学校の前でだいぶ待たされていたのが効いているみたいだった。

そう俺達、つまり有元篤史と佐才登の両名は、コウの指示によってこうして彼女の尾行を行っていた。

休日に早朝からメールで起こされ、きちんとその頼みを聞くなんで、すごく友達想いだと我ながら思う。

こっちにもそれなりに思惑があつて言うことを聞いているわけだけど、少なくともコウの言うことを聞いていると退屈しなくていい、と言うのは登の科白。

コウは理由も説明せずに、藤咲マミを追えと指示を出してきた。そのために休日のはずの学校前で待機しろと。全く、いったいどこから指示を出しているのかは置いておいて、クラスメートを待ち伏せしろ、と言う人間性には問題あると思う。

しかも、待ち伏せを指示した場所にきちんと標的来てるし。まさか、こんな時間から校内に居るとは普通は思わないだろう。

それは置いておくとして、待っている間、登の苛つき具合はかなりのものだった。元々、じっとしているのが苦手な性分なのはそれなりに付き合いが長いので知っているけど。

でも、そんなに待つのが嫌なら、わざわざバイクで飛ばしてまで来なくても良かったんじゃないかと思う。

そう考えると、急ぎの頼みだつて言われてものんびり自分のペースで来た俺は正解だったわけ。

それはそれとして、目の前の光景は改めてみても、何とも言えないものだった。

登校拒否児の藤咲（正確には登校はしているんだけどね）とあのウツツ（コウはなぜかウツロギって呼んでる）、一応クラスメートなんだけど、今まで関わりがあつたとは思えない。

「篤史はどっ思っつ？」

佐才が聞いてくる。

「どっつて……」

俺は二人を見直す。

「なんか怪しいな、とは思っけど」

俺はそう返すも、そこまで二人の関係性そのものには興味を見いだせない。

「たまたま会っただけじゃ？」

「……この公園でか？」

「まあ、事件が起きた昨日だけどき、関連性があるってのは穿ちすぎじゃないの？ サスペンスドラマじゃないんだし」

だいたい事件とは言いつつも、実際なにが起きたのかは佐才も現時点ではわかっていないわけで。その状況から考えることが出来ることも、そんなに多くはない。

だいたい情報はクラスメートの目撃証言だけで、本当に人が死んでいたかどうかさえもその証言からは定かじゃない。

普通に考えれば、登もコウも基本的に考え過ぎだ。世の中、そこまでドラマティックに動いていないのが常識と言っものだろう。と言っか、こいつらいつもこんな感じで疲れないのかな、っと思っ。

登は二人を指して言っ。

「でも、ほらなんか話してるぞ」

「そりゃ、一緒にいれば話さない方が不自然でしょ」

確かに親しげ、と言う雰囲気でもない。そうは言っても、ウツロギが誰かと親しげにしているところなんてまず見たこと無いわけで常にウツロギを御している橋本ですら、親しげと呼ぶには程遠い気がする。

あえて客観的に見るなら、二人の間に緊迫感が漂っていると言えなくもない、それでもウツロギはどう見てもいつもどおりなんだけどさ。

「とりあえずは様子を見たら？」

「ああ、元からそのつもりだよ」

佐才は無邪気そうに笑う。

あとに続く、一言がなければ誰もが元気の良さそうな好青年だと思っただろう。

「いざとなれば誰であろうが、だからな」

いざとなれば。

それが具体的になにを指すのか、未だに俺は理解していない。

もしかしたら、佐才本人も理解していないのかもしれないが、そんなことはこいつにとってなんでもないことにしか過ぎないのだから。

そうして、嬉しそうにイカレタ笑みを浮かべる登。

俺はそれに呆れながらも、同じような笑みを浮かべる。

それが俺という、有元篤史という人間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299o/>

いつもどこかズレタセカイ ~人喰い

2011年4月15日22時25分発行